
同じ世界の勇者と見習い魔法士

希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ世界の勇者と見習い魔法士

【Nコード】

N9051Y

【作者名】

希望

【あらすじ】

セーヴル大公国は日々、魔族と呼ばれる獰猛な種族による侵攻危機に脅かされていた。そんな中でついに耐えかねた皇帝が紡いだ言葉は 異世界からの『勇者召喚』。その言葉を聞いたある魔法士の見習いは驚愕する。何故なら彼女は、異世界トリップを現在進行形で経験中の日本人なのだから。主人公の兵藤凜は基本厄介事嫌いの現実主義者。同族に会えたことは嬉しいが、勇者には関わらず元の世界に帰る方法を探そうと思ったところに勇者からありがたくない一言。「一緒に魔族退治をしてくれないか？」いえ、全力で

お断りです。 最強チートなドS勇者と異世界トリップ中の見
習い少女の織り成す異世界恋愛ファンタジー。

第一話：見習いは異世界人（前書き）

2 作目の投稿になりました。

読んでいただけると幸いです。

第一話：見習いは異世界人

「勇者を召喚しようと思う」

端が見えない程の広い空間に響き渡る静かな声。

発するのはセーヴル大公国の頂点に君臨する皇帝。

30代なのに20代と思えるほどの若々しい美貌に威圧感を纏わせる冷酷非情の王。

そんな彼がいる国は近年魔族による侵攻が始まっていた。

魔族とは人間よりも遥かに優れた身体能力を持つ獰猛な種族だ。

そのため、当時は侵攻が始まると共に3日で陥落すると国の誰もが絶望に打ちひしかれていた。

しかし予想に反して皇帝率いる親衛隊が現在まで死闘を繰り広げ、国を守っている。

皇帝自ら先陣を切り、魔族をなぎ倒しているそうだ。

けれど皇帝はそろそろ限界と感じたのだろう。

魔族と唯一渡り合えるとされる『勇者』を頼った。

「……このまま陥落するのも時間の問題だ。ならば賭けてみるのも良いかもしれん」

紡がれた言葉にこの場の全員が息を呑む。

『勇者召喚』は大量の魔力を消費して行う魔法。多量に魔力を持つ生贄を数人犠牲としなければならない。

その上、勇者の意思を無視しての強制召喚だから極悪魔法といっても過言ではない。

「もう時間が無い……。勇者の召喚は満月の満ちる今宵の晩、おこなう！至急準備せよ！」

皇帝が玉座を去ると、周りが慌てて動き始める。
急すぎる事態に対しても準備を間に合わせようとする彼らの精神は
立派だと思う。

（さて…私も哀れな勇者の召喚のために準備をしましょうかね…）

私は周りの動きに合わせて準備をし始める。

あ、紹介が遅れてしまいましたね。私の名前は兵藤凜ひょうてい りんと言います。

勘の良い方なら気づきかもしれません。そう、私はれっきとした
純日本人です。

そんな私が何故こんなファンタジー溢れる世界に違和感無く存在し
ているのかと言われますと色々あったですよ。

まあ、詳しい話はまた後日にして簡単に説明しますと異世界トリッ
プです。

精神科医を紹介してやろうとか思わないで下さい。大丈夫です、頭
はイっちゃってませんから。

いえ、正直馬鹿な話だと思ってましたよ。異世界舐めてました。
気づいたら環境にとっても優しそうな緑溢れる草原で寝転がっていま
した。

あれですかね、基本現実主義で日頃から異世界を馬鹿に思ってたか
らですか？

とにかく私は軽くパニック状態に陥り、命懸けで生活を確保して現
在は魔法士見習いをやっております。

もちろん元の世界に帰るための方法探しです。

ですから勇者召喚でお仲間降臨はとっても嬉しいのですよ。

勇者という肩書きでの登場は少し哀れに思いますが。

だって勇者なんて聞こえがいいだけの奴隷みたいなものですから。

「リン！お前は何をしているんだ。早く準備を始めろ！」

思わずビクリと心臓が跳ね上がる。

恐る恐る後ろを振り返ればご立腹なご様子の我が師匠、ガウス様。黒い髭をもつさりと生やす50代、威圧感ハンパない。

敵に回したくない人と逆らえない人ナンバーワンを魔法士の中で誇る強者です。

頼み込んで弟子にして貰いました。

「いやいや、今からしようと思ってましたよ」

「ほう。さつきからずっと見ていたが動く気配が無かったぞ」

「師匠、気配を殺すって卑怯だと思いませんか？」

「むしろ爽快だと感じるな。相手の驚く顔が見れる」

「いやあ、ドSもそこまでいくといっそ清々しいですね」

「褒め言葉として受け取られるか皮肉として受け取られるか、選べ」

「遠慮しておきます。今の言葉はお忘れ下さい」

異世界に来て半年、世を渡るための処世術を学びました。

『笑顔は最強の武器』

大抵は笑顔を作っておけば世を渡れます。

私もチャレンジしてますよ。通じない相手に。

「さつさと準備をしろ。神殿の掃除と聖水の調達、終わったら話がある」

はい、死刑宣告を受けた気分です。

話ってあれですか、あの地獄の数日間の再来ですか？

魔法士としての基礎を寝ずに叩き込まれたスパルタの日々が頭をよぎる。

おかげで初級魔法をマスター、でももうやりたくない。

「はい」

笑顔を頑張って貼り付けたまま、神殿へと向かう。

神殿は皇帝の住む城のすぐ隣にある純白に輝く建物。

壁には汚れどころか塵1つ付いていなくて輝きを放っている。

私はわざわざ裏に回って裏口から中へと入る。下っ端の私が正面から入ったら打ち首です。

神殿の中はとっても冷えていて寒い。壁の素材が大理石に近いものらしく、冬の今は神殿自体から寒さが放たれている感じである。

白い息が吐き出され、腕をさする。

（さ、寒い！コートが欲しいよ……。こんな布切れでこの寒さを乗り切れと！？）

視線を下に向け、自らの服装を見る。

ぺらぺらの布地がワンピースのような形に加工されているだけの布切れ。もちろん断熱加工や防寒などは一切してない。

ふと腰まである髪の毛が視界に入る。この国では珍しい黒髪をわざわざ一般的な茶色に染めてある。

瞳も黒は見世物にされるほどだという事を知って、偶然にもポケットに入っていたカラーコンタクトで緑色に変えた。

お姉ちゃんから未使用で貰ったカラーコンタクトを出すのを忘れてて入れっぱなしにしておいて良かった。見世物なんて嫌だし。

私は体を振って寒さを紛らわすと、掃除をし始める。

掃除は簡単。初級魔法の『ウインド風』を使って埃とゴミを集めて捨てるだけ。

指をくるくる回して、掃除を終えると次は聖水を汲みに奥へと向かった。

ちなみに聖水とはぶっちゃけると只の水だと思う。ミネラルウォーターのような水。

ここの人達は崇めてるけど只の水でしょうがとツツコミたくなる。神殿の奥には聖水が溜めてある井戸があり、傍にある水瓶で汲む。中々の重量なので毎回息を切らしてしまう。

汲み終わると、さっきの場所に帰って水瓶を入り口近くに置いておく。後は放置だ。

（よし…終わった…と。師匠のとこ戻って死刑宣告を受けよう。どうせ逃げられないし）

足取りが重くなるのを感じながら、ガウスの部屋に向かう。

ガウスは、国でも高位の魔法士であり神殿を取り仕切る祭司長でもあるため城で部屋を与えられている。

基本はそこにいたので探す手間が無いのだ。

「失礼します」

ノックも無しに入るのはこちらの常識。私も抵抗は感じるものものやっています。

扉を開けて入ると案の定、ガウスが机で書類仕事をしている。

「ああ、来たか。話がある、座れ」

ガウスは顔を上げると、中級魔法の『テレキネシス念力』で片付けてあった椅子を用意する。

私は大人しく座って死刑宣告を待つ。気分は裁判所。

出来れば食事と睡眠をつけて貰いたいと叶わぬ願いを抱いてスパルタ修行を思い出す。

「今日の勇者召喚の事なんだがお前が参列しろ」

ずるりと椅子から転げ落ちる。

何ということだ、身構えて損をした。

「先ず死刑宣告の話では無いことに安堵を覚えたのも束の間、今の人は何と言った？」

「すみません、今何と？」

ワンモアプリーズ。

「だからお前が勇者召喚に立ち会え、高度な魔法を見れば良い修行になると思ってな」

「ちなみに本音は？」

「私は面倒くさいから立ち会わん。代わりにお前を行かせる事で休みを貰った」

「鬼、馬鹿。ドS悪魔」

「何とでも言え。今日は大事な娘と会う日なんだ、」

口元に笑いを浮かべて話すガウスに殺意を覚えるのは何回目だろうか。

よりによって私に勇者召喚に立ち会えだど？

断言しよう、絶対爆笑する。

目の前で勇者様とか言われる同族を見るわけですよ。しかも素で。笑う場面でない場所で爆笑したら絶対最悪でしょ。確実に国を追われる。

ここは仮病を使って休むか？

いや、仮病なんてすぐばれる。特に目の前の人は騙せない、今日は更に娘さんも絡んでるから。

ガウスは20代の娘に溺愛する危ないお父さんなのだ。

最近、結婚して離れて住むことになり凶暴化が進んだ。

ちなみに娘さんはとっても美人で嫁ぎ先が公爵家。貴族の中でトッ

プに位置する。

ガウスは伯爵家なので大出世だった。

「くっ…分かりました。引き受けます」

結局は折れるしかないのだ。仮にもガウスは師匠であり地位もある。そんな人に逆らえるわけが無い。

「そうか、じゃあ私は帰るから後は頼んだ。勇者召喚の参列者マニュアルを机に置いておくから頭に入れておけ。それと服装は神官服が正装だ、そこに新品があるから着替えておけよ。じゃあな」

何だ、この手際の良さは。

とゆうか勇者召喚の参列者マニュアルって何ですか。

異世界にそんなマニュアル存在するんだ。

私は立ち去るガウスを見送った後に、しぶしぶ分厚いマニュアル本を掴みパラリとめくり始める。

『勇者を利用して平和を掴もう、勇者攻略100の方法』

私はパタリと本を閉じて深呼吸をする。

うん、今のは見間違いだ。きつと疲れてるんだ。

だっておかしい、救世主に対しておもつきし利用という文字。

私はもう一度本の表紙をめくる。

うん、書いてあるのは同じ文字だ。良かった、私の目がおかしくなっただけじゃ無くて。

っていやいや良くない何も良くないよ！

私は現実主義者のはずがいつの間にか現実逃避に走っていたらしいです。

今だけは現実を逃避したい気分です。と言う事で私は何も見ません

でした。

壁に掛けてある新品の服を持ってガウスの部屋から出ると、自分の部屋のある地下へと向かう。

下っ端の部屋は地上ですら無いのがとても悲しいです。

重たい本と汚れを付けてはいけない服が私の心をどんどん重くしていくのが分かる。

夜まではもう少し。月はもう満ち始めているころだろう。

私は地下へと続く階段を下りて奥にある自分の部屋へと辿り着く。

扉を開けて中に入れば、灰色の壁に薄汚れたベッドという質素すぎる4畳の見慣れた空間。

夜までもう時間が無いので、急いで新品の服に着替える。

着方はスパルタで叩き込まれたからマスターしている。着終えた後に残る感想は　　ぶかぶか。

サイズが合わなくて裾を引きずる形となっている。この服は元はガウスのために用意されたもので当然といえば当然なのだが。

ふと、『刻量』と呼ばれる時計のような役割を果たすものを見れば夜はもうすぐそこまで迫っていた。

慌てて本を服の中に入れて、勇者召喚の行われる神殿の『光臨の間』へと向かう。

引きずる裾は汚れていく気がするが構ってられない！

遅れたら真っ先に眼に浮かぶのはガウスの怒りと国からの視線だ！息を切らしながら神殿に着いて、中に入る。

まだ始まってはいないらしく、人は居るものの慌しく動いてるだけだった。

そんな中、私に近づいてくる慌しい人影が見えた。

「お、リン。お前も参加すんのか」

「ミリー。神官服ってことはミリーも？」

「もちろん。俺はこうゆうのには人一倍興味があんだよ」

このミリーは喋り方こそ男のようだが、れっきとした女性であり強気系の美人だ。

私と同期で魔法士見習いになったが、すでに彼女は魔法士となって立派に活躍している。

天才的な魔法センスと、美しい美貌によって求婚は日々耐えないという贅沢な悩みを持っている。

「私は師匠に押し付けられたんだって。早く帰りたいのが本音だし」
「まあまあ、見てて損はねえって！楽しみよ」
「はいはい」

手を振って去っていくミリーは男に呼ばれていた。

あれは皇帝の長男であるレオン殿下であり、皇帝に負けず劣らずの美貌の持ち主。

二人は恋人同士という噂が流れてはいたが、どうやら真実だったようだ。

私はもうすぐ始まる召喚に備えて、心の準備をしていた。むろん笑わないように。

そして始まりの合図、皇帝のお出ましだ。

「これより伝説の戦士を異世界より呼び寄せる！」

凜と響く声に先程までの喧騒が嘘のように静まり返る。

皇帝の声と共に、端にいた祭司長方が前に出る。

祭司長方が中央に集まり、杖で魔方陣を描き始める。

これでも魔法士の基礎は叩き込まれたから分かる。高度な魔方陣でとても真似が出来そうにない。

私は思わず息を呑み、魔方陣の出来に惚れ惚れとしてしまう。

「異世界より現れし救世主の御霊よ。今宵、危機に陥ら

んとする我が国を救う新たな救世主の召喚を我は願う。現れる、数多の戦を勝ち抜いてきた異世界の勇者よ!!」

皇帝の叫ぶ声に力が入るその瞬間、魔方陣が強く輝いた。

眼を閉じてしまうほどの強い光に私はたじろぐ。数秒くらい続くと、光はゆつくりと収まった。

その場を静寂が包む。成功？それとも失敗？

眼を開ける前に轟いた歓声がその答えだろう。開ければ、魔方陣の上に青年の姿が見えた。

17歳位だろうか、私よりも年上そうならずりとした顔つきは端整に整っている。白い肌とは対照的な黒い髪と黒い瞳は私の持っていた『色』。

何よりも日本人である事を証明するその色は、私を喜ばせた。

（同族

!!）

相手側にとってはいきなりの事態に混乱してこんな風に思われるのは迷惑かもしれないがとにかく嬉しいぞ！

しかしよくよく見ると青年は物凄い美形顔だった。切れ長な瞳がクールだ。

いかにもな勇者オーラが出ているようである。

「ここは……？」

驚きと戸惑いの混じる声。懐かしい、私もここに来て初めて発した言葉がそれだったよ。

「我が召喚に応じてくれて礼を言おう、勇者よ。ここは、君にとっての異世界だ」

「……は？」

「受け入れられないのも無理は無いだろうが、君には勇者として我が国を救ってもらいたいのだ」

「いや、あのちよつと……」

「ああ、いきなり事が起こり疲れているのだな？ 今、部屋へ案内させる。詳しいことは明日にしよう」

「え、あ……ちよ。はあああ！！？」

皇帝の『勝手に話を進める』攻撃には同情するよ、勇者。
あれはカウンター攻撃が入られない最強技だよ。

「案内は………ん？」

今、目が合ったのはきつと気のせいだよ。皇帝様が私なんかを視界に入れてくださるなんて勘違いも甚だしいな。
うん、下を向いておこう。

「おい、その君」

皇帝の声が誰かに向けられて発せられる。
私はきよろきよると辺りを見回してその誰かを探してみる。

「君だ、裾を引きずってる」

おっかしいな、裾は引きずるものじゃないよ。
誰だ、身の丈に合わない服なんか着てるのは？

「隣の君達、その子に教えてあげてくれ」

皇帝が溜め息をつくとき、私の隣にいる神官二人が私の袖を掴んで前に引く張る。

ちょちょよい！！

ペイッと皇帝の前に放り投げられた私は冷や汗ものですよ。

「丁度いい、勇者と同じ年頃だろう。勇者を客室に案内してやってくれ」

ええ確かに私は15歳ですよ。ですが同じじゃ無いです。女性の年齢を大雑把に見るのはいけないことですよ。

それでも高年齢ばかりで構成されている神官の中では確かに同じくらいですね。

私を選ぶ理由は十分ありますね。正直、面倒くさいので嫌ですが皇帝にそんな事言えば公開処刑間違いないし。

「…分かりました」

逆らえるなんて奇跡が起きるわけがありません。

私は、皇帝の先にいる勇者同族に視線を向けました。

私も異世界人だとばれれば厄介事間違いないし。ばれないように極自然にこちらの世界の住人を装いましょう。

いざ、勝負！！

第一話：見習いは異世界人（後書き）

よかったら次回もお立ち寄り下さい。
感想お待ちします。

第二話：勇者は化け物（前書き）

タイトルが少し物騒になってしまいましたが、流血表現などはありません。

第二話：勇者は化け物

「えっと……。初めましてー、勇者様？」

皇帝から案内という形で神殿から出た私と勇者の間に流るるのはひたすらに長い沈黙。

とりあえず勇気を振り絞って話しかけてみましたよ。挨拶は日本人として当然です。

けれど同じ日本人であるはずの勇者からは反応が一切返ってきません。どつかでしくったつけ？

勇者は険しいお顔をして下を向くのみ。あーさすがに状況整理の時間はあげた方がいいよね。

「……ここはどこなんだ？俺は学校の帰り道にいた筈なんだが…」

なるほど、だから服装が制服なんですね。青いブレザーとはかつこいいい。

それにしても青いブレザーって私の知ってる超有名な進学校のものと似てるなあ。

偏差値80を超えてるとか一般人に喧嘩を売ってるとしか思えないよ。

「ここは勇者様から見て異世界ですよ。近年我がセーヴル大公国は魔族の脅威に晒されており、非常に不味い状態なのです。ですから最後の頼みの綱として貴方が召喚されました」

よし、噛まずに言えた！

服の中に入れておいた本の1ページ目を見ながら言い切る。

勇者は私の後ろについて来ているといった感じなので本を見ている

ことは多分ばれていないと思う。

「それって……俺にこの世界を救えってことか？」

「平たく言えばそうゆうことです。意思を無視されて強制的に召喚された上にこちら側の問題を押し付けてしまつて申し訳ないと思っています」

「本当に…その通りだな。俺は元の世界には帰れないのか？」

私は進める足をピタリと止める。

結論から言つならまず帰れない。帰れるなら私は今ここにはいないけれど勇者マニユアルでは、帰れますと明記してある。こつやつて書いてある意図なんていくらなんでも分かつてしまう。

勇者の協力を失わないためだ。帰れないと言えば勇者は怒り、協力はなくなつてしまうだろう。

しかしまだ帰れると分かるならば帰す事を条件に魔族討伐の協力を仰ぐことが出来るからだ。

さて、どちらを選ぶうか。個人的には帰れませんよと真実を告げてあげたい。

けど告げたら告げたで後々厄介だ。ここは日本人特有の曖昧作戦を貫こう。

「…私は一介の下っ端ですからそのような事は存じ上げません」

後ろを振り返り、半年間培つてきた笑顔を勇者に向ける。

勇者は、目を見開いた後に眉を寄せて怪訝そうな顔を見せた。美形だから一枚の絵画に書かれた一種の表情のように思える。

「そうか…。じゃあいい」

「そうですか。ではお部屋に着きましたのでお入り下さい」

私が足を止めた横にある部屋は国賓VIP専用の部屋。

未だに一回も中に入ったことが無い部屋に入るのは勇気が入る。

私は、震える手で扉を開き勇者を中へと促す。

勇者は躊躇いも無く中へ入った。

「今晚はこちらでお休みを。何か御用がございましたらそこら辺でうろつろしている女官に声をおかけ下さい。ただし部屋を出ないで下さいね」

「分かった。……なあ、まだ質問があるんだがいいか？」

「答えられる範囲でならよろしいですよ」

「もしもの話だが逃亡を図ればどうなる？」

私は一瞬固まってしまった。まさか勇者から見て異世界人である私に堂々とそんな事を聞くとはい思わなかった。

鎌をかけてるのが、それとも只の馬鹿なのか。

どちらにせよ、様々な驚嘆事実にも動じなかった私を驚かせたんだ。褒めてあげましょう。

「…そうなつてしまえばこの国が終わるだけです。最も、この国の人はそんな気がさらさら無いようですが」

「どうゆう意味だ？」

「気づいていませんでしたか。勇者様の体には、束縛魔法が施されています」

「束縛……！？奴隷かよ……」

「まあ、救世主に対してのおもてなしとは言えませんがこちらに召喚された際に自動的にかかる仕組みだったようですに手遅れですね。もう解けない位まで魔法が進行しています」

「それじゃ……」

「はい、勇者様はこの国を救うしかここで生きていく方法が無いという事です」

終始笑顔のまま会話を続けた。

勇者は流石に堪えたようで顔に翳りを見せた。

束縛魔法というのは本当だった。勇者を召喚するために作られた魔法陣の中には束縛魔法と追跡魔法の混合魔法の術式が組み込まれていた。

私もこれには同情する。

これじゃ本当の奴隷となっている。

「それではこれで失礼します。明日からこの国を救うために頑張ってください」

私は扉を閉めようとドアノブに手を掛けると、勇者の手がすっと伸びてきて私のドアノブに掛ける腕を掴んだ。

勇者の方を見ると何か言いたげな顔をしていた。

「何ですか？」

「…まるで他人事なんだな」

「……はい？」

「だから、この国の事。君はこの国の人だろ、なのにもうこの国がどうなってもいいって言ってるような口ぶりだ」

いやあ、他人事ですから。

しくったな、墓穴掘った。もうちょいこの国を思わなきゃいけないかったようです。

「…そんな事ありませんよ。私だって、魔族の侵攻に平静を装うことが精一杯なんですから…」

肩を小さく震わせて、下を俯く。

勇者は慌てて謝ってきた。

悪いね、これもここで生きてくために学んだ事なんだよ。

私はさりげなく勇者の腕を外して、俯きながら扉を閉めて廊下に出た。

（中々勘の鋭い勇者だったな。けど詰めが甘い。あれだけの演技でころつと騙されるなんて）

服の中に入れておいた勇者マニュアルを取り出す。

勇者マニュアルを初級魔法『火^{ファイア}』で燃やすと、廊下の窓から捨てた勇者とはもう関わらないようにしよう。

隠し通せる自信はあるけど何よりも厄介事を運びそうなタイプだね、あれは。

私は私で元の世界に帰る方法を探しますか。勇者召喚の魔方陣を調べれば何か分かるかな？

廊下を歩く足をふと止めると、窓から星を見上げる。

日本とは違って、輝かんばかりの星が無数に見える。

初めの頃はただ綺麗だと感じていたが、いつの間にかここが私のいるべき所ではないという事を示しているような戒めに感じてしまっていた。

私は星を睨みつけてから再び歩き出して、自分の部屋へと向かった。部屋に入ると着ているぶかぶかの神官服を脱ぎ捨てて、ベッドの下にある新しい服を取り出す。

冬用に作っておいた自作のワンピースであり、中に綿を詰めておいたので暖かい。

けどこれはあくまで部屋着なので外ではあの薄いワンピースを着なくてはならない。

私は自作ワンピースを着ると、特にすることも無いのでベッドに入った。

シーツのような薄さを誇る上布団は寒さを素通しして、夜は眠りに

くい。

数時間くらいじっとしているが中々眠気は襲ってこず、仕方ないのでベッドから上体を起こした。

(…暇だし、せつかなら魔方阵を覗きに行こう)

私はこっそりと部屋を抜け出して、部屋着のまま神殿へと向かった。夜なので部屋に常備してあるランタンを持っている。

神殿に着くと、裏口を開けて中へと入る。

神殿の中は静まり返っていて、少々不気味に感じる。

(えーと、魔方阵発見！)

ランタンの光で僅かに見えた魔法陣の側に駆け寄る。

しゃがみこんでランタンの光を魔法陣全体に当てて見てみる。

魔方阵は何度見ても飽きないような惚れ惚れとした出来で、見入ってしまう。

しかし、そこである事に気づく。

(これ……束縛と追跡の他に人体強化と魔法能力付加も組み込まれてる…。どっちも禁術…、それを大勢の中でやるなんて大胆にも程がある。けどこんなに小さいんじゃ誰も気づかないね。カモフラージュのために祝福の術式を大きくしてるのか)

人の体は普段脳の活動を16%ほどに抑えているが、それを無理に外して脳の活動を60%にまで上げる人体強化に魔法を行使できるように膨大な情報量を脳に送り込む魔法能力付加。

どちらも人体を破壊しうる危険な魔法。

しかもそれに気づかれないように祝福で痛みや違和感を消している。用意周到。恐ろしいね、この国は。

勇者本人を化け物に仕立て上げた。

（おいおい…嘘でしょうに。よりによってこれも組み込んだのか…
『^{ドラゴレイク}竜化』。人を何だと思ってるの…）

竜は古代から世界の支配者と呼ばれる種族。固き鱗は刃を通さず、大空を自由に駆け巡る翼と火を吐く息吹は正に王たる風格を漂わせる。

そんな竜に憧れ、人が開発したのは人を竜にすることが出来る竜の血を使った『竜化』。

けれど、人ごときが竜の力に耐えられる訳も無く大抵は力に負けて死ぬ。

勇者は知らず知らず体のリミッターを外されてるから耐えているのかも知れないが長くは持たない。

確実に勇者は死んでしまっただろう。

私は流石に危険だと感じ、勇者にせめてこの事だけでも伝えてやろうと立ち上がった。

その時、カッンと誰もいない筈の神殿から足音が鳴り響く。私ではない。

「そこで何をしているんだ？リン＝ヒヨード」

フルネームを唐突に呼ばれ、体が固く強張る。

聞き慣れた声だった。いやいや、まさかあの人がここにいる訳ない。今は深夜だよ？

「…あゝ、どうして貴方様がこちらへ…」

振り返って嘆息をつく。

見慣れてしまったその顔は出来れば今は見たくありませんでした。

師匠、ガウス。

「帰って来たらどっかの馬鹿が神殿に入っていくのを見たからな」

「ほんつと気配消すの好きですね」

「ふん、で？何してる」

「…勉強？」

「勉強か、感心だな。場所がここでなければ」

「あ……はは……」

「ははは。……ついて来い」

「…いえっさー」

引きずられて神殿を出ると、ガウスの部屋まで一直線。

ああ、今度こそ死刑宣告の予感。今度からしないんで今回だけは勘弁して下さい。

「ったくお前は問題を起こすのが得意というか……。常識が無いのか？」

「失礼な！ありますよっ。まず…不正をやるなら出来ないように…とか！」

「どこが常識だ！非常識を堂々と胸を張って言うな！」

「どこが非常識ですか！我が家の家訓になんて言い草……！」

「家族自体常識が無いのか！？」

「にしても弟つてばいっつも家訓と正反対の事をするんですよ。どう思いますか？」

「弟は唯一の常識人か。お前は弟を見習え」

「家訓破りまくったら庭の木に吊るされるんですよ。弟はしょっちゅうです」

「なんて家だ」

珍しくガウスの取り乱す姿を見てしまった。ここに携帯電話があれば

ば今すぐ写メりたい。

そして全国に配送してやりたい。

「まあいい、いや良くないが。実はな娘に嫌いと言われた」

「限りなくどうでもいいです」

「聞け。衝撃が走った、愛してやまないそして可愛すぎて目に入れても痛くない程の娘に嫌いだと言われた。これ以上の悲しみがあると思うか？」

「そこら辺にごろごろありますよ」

「いや、無いだろう。それを聞いた瞬間、私は4階の窓から落ちて頭から打った」

「何で傷が無いんでしょうか？」

「それはホラあれだ……。とにかく私は今とてつもなく死にたい」

「じゃあ死ねばいいんじゃないですか。ナイフ持ってますよ」

「けどここで死ねばもう二度と娘には会えないんだ…うおおおおお
おおお！！」

「良い大人が泣かないで下さいよ」

「これが泣かずにいられるかああああああ！！」

「じゃあ泣いていて下さい。私が死刑宣告かと思って身構えていた
ら娘話を延々と…。失礼しましたー」

私はガウスの部屋の扉を開けて深々とお辞儀をする。

その時、ガウスから真剣味を帯びた声がかかる。

「…魔方陣。勇者には伝えてやるなよ、余りにも酷だ」

私は机に突っ伏しているガウスから漏れた声に一言返事で返した。
それから自分の部屋に戻り、今度こそと思ってベッドに入った。
寒さを噛み締めながら私は眠りについた

と思ったらいきなり活動開始の鐘の音が鳴り響

いた。

まさかと思い、ベッドから跳ね起きると部屋の刻量を見る。
刻量の指す時間を日本時間になると、朝の6時。活動時間だった。

（一睡もしてない

！！）

冬のためにまだ6時は陽が昇っていない時間帯なので油断していた。
私は悲しみを抱きながら服を着替えて再びガウスの部屋へ行った。
中に入るとガウスが嫌な笑いを浮かべながら待っていた。

（分かってて言わなかったのか…！この悪魔めえ…）

目の前のドSを睨みつけると逆に睨み返された。こっわ！！

「よく眠れたのか？」

「それ、分かってて言ってますよね。人の悲しみを何だと思ってるんですか」

「快感？」

「うわーお。見事なるドS発言。さっきの泣きは嘘ですか」

「馬鹿いうな。娘に嫌いと言われたんだぞ」

「さいですか。で、今日は何を？」

「今日は今から全員玉座の間に集合。勇者の事で」

「…はあ。分かりました」

私とガウスは朝食も無しの状態で玉座の間と呼ばれる皇帝のいる場所に向かった。

ガウスの部屋から玉座の間までは歩いてすぐといった距離。

これはガウスが皇帝から信頼されていることを示している。

私達はもちろん玉座の間にも裏口から入ると、玉座へと続く赤い絨

毯の両端に整列して並ぶ。
待つのは皇帝と勇者の登場。

「皇帝陛下。並びに勇者様のご入場です」

どこからともなく放たれた言葉で玉座の間の扉がゆっくりと開く。
すると皇帝陛下とその隣に並ぶ昨日の勇者の登場。

皇帝陛下と勇者は美形だからヤバイほど絵になってしまふ。すでに
この場の女性は全員見惚れている。

私以外。私は目の保養だなんていう感じかな。

皇帝は玉座に着き、勇者は絨毯の中央に佇む形となった。

「さて、勇者よ。名を聞かせてもらえるか？」

皇帝の威圧感満載の声にも顔色1つ変えずに勇者は答えた。

たちはな りゅうてい
「橘劉斗」

「リユートが名前だな。本題だが、リユート。率直に問おう、この
国を救ってくれないか？」

「…俺にとつての利益はあるのか？」

「もちろん褒美はやるし、元の世界に帰す事も誓おう。後はこの世
界の財宝を持つてかえってもらって構わん」

「ふーん…分かった。引き受けてやる」

おいおいそれだけの条件で引き受けるなんて随分と軽いね。

「ただし、仲間をくれ。一人じゃきつそうだ」

「仲間なら初めからつける予定だったから決めてはいる。どれも精
鋭だ」

「へえ？」

「まずは騎士団副団長のアーリアに、神官長のクレア。それから魔法士のミリーと我が娘の皇女ラルアだ」

おお、物凄い精鋭の集まりだがハーレム化しそうだな。いや確実になるな。

勇者よ、頑張つて醜い女の争いの餌となれ。

勇者の前に呼ばれた4人が前に出る。誰もが目も眩むような美人。しかしその中にミリーも混ざっていたのは少々驚いた。彼女は殿下と恋人だと思つてたし。

「この4人は我が国の誇る精鋭だ。不満はあるか？」

勇者は顎に手を当てて、黙りだす。

そして意を決したように言った。

「一人、仲間に入りたい者がいるんだがそいつは駄目か？」

緊迫感が広がった。勇者自ら引き入りたい人物、誰だろ？

「…誰だ？」

その場に静寂が訪れ、皇帝が固唾を呑む。

皇帝の言葉を受けた勇者は口元に笑いを含ませながら言った。

「昨日、俺を部屋まで案内した魔法士見習いのリン＝ヒョードだ」

第二話：勇者は化け物（後書き）

良ければ感想をお願いします。

第三話・見習いは勇者の仲間になる（前書き）

少々短めです。

楽しんで頂けたら幸いです。

第三話：見習いは勇者の仲間になる

静寂。 。それだけの言葉でしか言い表せられない程の静けさが皇帝の座る玉座の間に流れる。

この場にいる全員が口を開けて固まっている。皇帝は流石に口を開けてはいないが目を見開いている。

もちろん私も固まっている。はずだった。

なのに何で勇者が目の前で倒れていて、私は息を切らして勇者を見下ろしているのだろうか。

この状況を誰か説明して下さい。お願いします。

出来れば私の頭に浮かぶ最低の答えでないのを望んで。

「……また会えたのは嬉しいがいきなりすぎるご挨拶だな」

目の前で笑みを浮かべながら呟くように言った勇者に答えを聞いてみようか？

私にそんな勇気があるわけないね。

とゆうか聞かなくても分かっているのに認めたくなかったただだね。自分が

勇者を咄嗟にナイフで切りつけ

てしまったなんて。

いやあ、私自身驚きだね！

何言ってるんだこいつ。！みたいな感じで切り付けちゃったし。しかもほぼ無意識で。

よく元の世界の友達から言われてたっけ？

『凜って混乱すると人を攻撃する癖があるよね。それって家

柄？』

友達の言うことは信じるべきだったみたいです。思いっきり流しました。

しかも家柄って。友達は私の家族をどんな風に見てたんだろう？

確かに我が家は少し一般家庭と比べて違う所もあるみたいですよ！
一般家庭では、両親に命を狙われるなんて事無いみたいですし。
じゃあ我が家は何なんだって話ですよ。友達曰く、常識を超えた
家族らしいです。けど弟だけは別のあだ名があつて、非常識の中の
常識といわれてるみたいです。さっぱりな意味ですが。
さてさて、こちら辺で現実を見つめてみましょうか。
目の前、倒れた勇者。周り、全員固まってる。どう打開すべきか皆
目見当がつかないね！
とりあえず言葉を発しようか。

「…え、いきなり切りつけたりしてすみませんでした。痛み
ますか？まあ、痛まなかつたらおかしいという問題なんですけどその
辺は置いておいて本題に入りますと貴方何言ってくれちゃってるん
ですか、コノヤローとかいう訳ですよ」

とりあえずで発した言葉がおかしかったような気がしますますが良しと
いうことで。

私の今の気持ちを3割は伝えられたはずだ。
残りの7割は精神衛生上良くないと思うので伏せておきます。

「簡単な話だ。俺はお前を仲間に入れたと思った。だからそれを
言っただけだろうが」

「本人の許可無しですか。面白い方とは思ってましたがそこまで
行くといっそウザイですね。私の名前は教えていないはずですがど
こでお知りに？」

「聞いた」

「あはは。個人情報を出したのはどこの誰でしょうかねえ？師匠
！！」

私は皇帝の面前にも関わらず、勇者に詰め寄る。

いやこうなったらもう引けないじゃん。引いたところで痛い視線バリバリだよ。

今、もう受けてるけどね！痛い視線を！！特にハーレム要員確定のお姉さま方から！

私はこっち来てから何度も痛い視線なんか受けてるからその程度どうって事無いけどね！

嘘だけど、めっちゃ痛いけど！！

今は無視してガウスだあ！！

情報を流すなんてあの人以外いない！あの人以外ありえない！！

私はさっきまでガウスのいたであろう場所をみるがない！！逃げたぞ、あの人。

「どこ消えたあ、師匠！！出てこないと娘さんにある事無い事、無い事中心に嘘八百並べ立てますよ！！」

『それはやめろ、頼むからやめろ』

部屋全体にガウスの声が響いた。

魔法を使っているようで場所の特定が出来ない。

しかし娘さんの事を言ったので無視を決め込む事は出来なかったようだ。

何を隠そう、ガウスの娘さんは何かと私に優しくしてくれて妹のようについてくれてるらしい。

だから私の言うことを大抵は信じてくれるのだ。

「いつ何で勇者に私の個人情報流したんですか？私の驚く顔が見たかったとか抜かしやがったら二度と娘さんと会えないようにします」

『悪かったからとりあえず落ち着け。ここは皇帝のいる場だぞ？場所を変える。陛下、申し訳ありませんが勇者をお貸し願えませんか？正式な発表はまた日を改めてからお願いします。今は馬鹿弟子を

落ち着かせたいので』

皇帝が戸惑うように返事を返すと、ガウスから場所移動を告げられた。

場所は、勇者に与えられた国賓専用の部屋。

普段なら入ることすら戸惑う部屋に今回は混乱してるために戸惑うどころか蹴り開けて入る。

後ろから付いてきていた勇者はそんな私の行動に驚くことなくむしろ笑いを浮かべて部屋に入った。

「師匠、会えて嬉しいですよ。さて、理由を聞かせてもらいましょう」

部屋の中では中央のテーブルに座っているガウスがいた。

私はガウスに詰め寄った。

今は豪華な内装や小物なんて目に入らない！

売ったらいくらだ？

あの壺

「だから落ち着け、確かに悪いとは思った」

「何秒くらい？」

「2秒ほどだ。しかし今はそんなことよりも話す事があるだろうが」

「……確かにそうですね。とりあえずは娘さんに師匠が浮気中と話しておきます」

「やめてくれ。娘と妻が逃げる」

「一生冷や飯ですね。ざまーみろです」

「いつもに増して毒舌が凄いのは気のせいでは無いようだ。それよりも、だ！本題に入らせる」

ガウスが私の頭を軽く小突いた。

骨がゴツゴツしてるので地味に痛い。

浮気嫌いの一途な美人奥さんとお母さんっ子の娘さんはこの人には勿体無い。

ガウスは魔法でお茶を入れると、勇者と私に座るように言った。私の前にだけお茶が無い事はきっかり娘さんに告げ口させて頂きます。

「あ、で本題なんだが…勇者よ。そこは説明頼む」

「だからこいつを仲間に連れて行きたいと言ったんだ」

「そりやまた何でこいつなんだ？^{ウチ}セーヴル大公国の精鋭じゃ不満か？」

「不満なんてたくさんあるが、昨日会ったときに思った。こいつは私情を挟まずに物事を見られるタイプだな、余計な偏見を持ってそうな精鋭よりかは大分マシだ」

そんだけの理由で私を肉食獣の檻の中に放り込むつもりか。^{お姉さま方}

こんな事になるならもう少しこの国を思ってるような口ぶりにするんだった、過去に戻って私を殴りたい。青いネコさんの持つてるピンク色の乗り物が天から降って来ないかな？

「まあ、確かに精鋭共は偏見を持つてるが腕は確かだぞ？」

「腕だけなら傭兵でも良い。俺は感情に流されない奴が欲しいんだ」「こいつはしょっちゅう流されてるが？」

「戦闘では冷徹に物事をこなすタイプだと見た」

「あ、それはあながち間違ってる。無駄に冷静に俺を殺^ヤりに来るからな」

「だろ？だから欲しいんだ」

「けど体裁つてもものもあるからな。勇者の仲間には魔法士も入ってる、魔法士を二人も。しかも見習いじゃキツイ」

「じゃあ魔法士の精鋭はいらない」

「おいおい、陛下の事も考えてくれ。そんな事されたら陛下も魔法

士の女も名誉丸潰れだ」

「じゃあ二人でいい」

何故だ？本人を置いて話を進められている。

私は一度もこの間喋っていないよ、入られる雰囲気ほぼゼロに近いです。

さつきからテーブルの上にあるお菓子を頬張ってます。

さすが国賓専用の部屋なのでお菓子も最高級品です。ほとんどお菓子を食べにきたようなもんですね、これ。

「分かった…、陛下からは伝えておくが本人の許可は？」

「無許可だ」

「分かった分かった。リンは勇者パーティに加盟な」

「って待て、師匠。無許可つつてんでしょうが」

「おお、リン。良かったな、勇者の仲間なんて名誉だぞ？」

「黙ってください。私は嫌です」

「何でだ？」

旅になんて出れば元の世界に帰る方法を探せなくなっちゃうじゃないですか。それに何より勇者と関わりたくありません、この人、気のせいかな昨日とキャラ違いますよ。と言いたいのに言えないのは悲しきかな。

理由は本意でなくても作ってしまえばいいか。

「師匠と離れたくな……」

「理由がお前の性格的にありえない」

「チッ」

これはやはりベタ過ぎたか。最後まで言わせてすら貰えないとは。ならば次はどうしようか。

「リン、せっかくの機会だし世界を見て廻ってきたらどうだ？お前は世界を見たこと無いだろう？」

「師匠……」

聞こえは弟子思いの良い師匠。

が、私には分かる。この言葉に隠された本当の意味を！

『いいから行けつつってんだろ？。そして常識を学んで来い』
という風に。

常識を学んで来いとは失礼な、私は家族に常識を褒められた程だぞ。弟には軽蔑された事しか無いが。

「けど……私はまだ未熟です。勇者様の足手纏いとなつてしまいますから私はここで勇者様を見守るだけにしたいと思います」

「リン……」

ふ、どうですか。ガウスよ。

勇者思いの良い弟子でしょう？

本意では『絶対ここに留まる。私の帰る方法探しの邪魔はさせん！』
てな感じですが。

ガウスも言葉の意味を前半のみ汲み取ったのでしよう。若干睨んできてます。

「未熟でも良いから仲間になれ」

勇者の横槍。黙ってなさい、一応こっちは異世界での先輩ですよ。

「拒否権を発ど……」

「お前に拒否権は無いと思うが？」

「こっちだって嫌なものは嫌と言える位の権利はありますよ」

「皇帝と話している時に聞いたが勇者の命令は絶対だと聞いた」

何言ってる、皇帝め。

勇者が権力行使で来るとは。昨日はお人好しタイプの勇者かと思っていたが全然違った。

こいつ、ドSだ。しかも物事を計算して見る奴だ。一番食えない奴だったとは誤ったな。

「今なら打ち首覚悟で皇帝を暗殺できる気分です」

「落ち着け、リン。勇者の命令を聞け」

援護射撃でガウスが撃ってきやがった。

ここを回避するために選ぶ選択肢は最もな理由を付けることだ。

「…いいですか？私はこれでもか弱い女の子です」

「どこがだ」

「黙らっしゃい、師匠。……つまり、魔族と戦うのは恐ろしいんです！」

い、言い切った！

よし、これで勇者に付いていく事は出来ないという最もな理由になる。

それでも女子だって事を思い出して良かった。

「俺が守ってやる」

はい、今誰だ。凄いかっこいい言葉が聞こえたけど今は一番聞きたくない。

聞こえない聞こえない。

「戦うのが怖いなら戦わなくていい。ただ付いてくるだけでいいから仲間になってくれ」

勇者と目が合う。

甘い声に切なげな顔。女子なら誰しもが頬を赤らめる場面。私も胸の鼓動が高まる。

「勇者様…」

「頼む…」

ドラマならここで甘く蕩けるような音楽が流れ始める。

しかし私は希望しよう、ここは恐怖を味わうときに流れる音楽を！
だって、勇者怖い！

甘い言葉囁いてるけどこれ逃げ場無くしてきた！

もう八方塞がつて、完璧に逃げ場を埋められた。現に今だって何か黒いオーラ出してる！！

やばいぞ、これは。

ここはもうリアルに国外逃亡しかないか？

有休をとって勇者が国内から消えるまで国外で生活しよう、うんそれしかない。

「良かったな、リン。これで安心だ。陛下には伝えておくからな、心置きなく討伐に行つて来い」

撃沈。

陛下に伝えられれば行かざるを得なくなる。

もう、私に逃げ場は無いということか。DSの二人を相手に勝とうとした私が愚かだったようだ。

初めから選択肢なんて1つだけだったということか。
けど、最後に言わせてください。

第三話・見習いは勇者の仲間になる（後書き）

勇者はキャラがまだ謎です。

とゆうか勇者っぽくない勇者ですね。

感想お待ちします。

第四話：勇者と見習いの手合わせ（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

第四話：勇者と見習いの手合わせ

「ちよつと貴方。お時間を頂けないかしら？」

えつと、どうゆう状況ですか。これは。

あの後、私は逃げるようにしてあの部屋を出ました。そしてあわよくば皇帝に伝えられる前に国外逃亡なんて考えも抱いてましたよ。

なのに勇者でも師匠でも無い第三者　　ハーレム要員確定のお姉さま方に捕まるとは。

全員美形だからこの状況で無ければわーいとか思えたけど思える状況じゃないです。

とゆうか何故私はこの人達に絡まれているのだろうか。

「あ　　、忙しい身ですので手短にお願いします」

顔が引きつるのが分かる。

けど笑顔は忘れない、笑顔さえしとけば大丈夫！多分。

「大丈夫よ。用件は1つだけなの。あのね、悪いことは言わないから勇者様のお話をお断りしなさい。貴方みたいな見習いが勇者様のお仲間になつてなつたら勇者様の品位が落ちてしまうわ。痛い目に遭いたくなければ引くことね」

あ、正論。

私も断りたいですよ？けどあの勇者話聞かないんです。

出来れば直接向こうに直談判を。

既に一目惚れな感じのハーレム要員のお姉さま方。

「分かりました。丁重にお断りしておきます」

「物分りのいい子ね、嫌いじゃないわ。じゃあそうしておきなさい」

お姉さま方が高笑いをしながら去っていくと、頼もしい味方が付いたので私は再び直談判をしようと部屋に戻る。

これで私は自由だ！

ハーレム最高だよ、ナイスハーレム！

「勇者様あ！先程のお話ですが…」

私は勢いよく扉を開けると、その場で固まった。

「やっと話を受ける気になってくれたんですね。私はとても嬉しいですよ」

目の前で優雅に佇む金髪の美形は誰だろうか、部屋を間違えた？

「あ、すみません。間違えました」

私はぎこちなく一礼をして部屋を出ようとしたが、腕を掴まれた。

「間違えじゃねーよ。俺が勇者だ」

掴んだのは金髪の美形男。先程の笑みとは一転して不機嫌そうな顔がある。はて、いつの間に勇者が変わった？

奥を見ればガウスがにやにやしながらこちらを見つめている、なるほど貴方の仕業ですか。

「どうだ、勇者っぽくなっただろ？金髪に染めて口調も変えれば良い感じだ」

「元々金髪にはしてみたかったから良い感じだ。あとは演技だが得意だから問題はないな」

「味方は付けて損はない。どうせなら本性は隠した方がやりやすいだろう？」

「そうだな。お前らにはばれているが問題ないだろう」

勇者はどうやら心の奥まで真つ黒のようだ。

この国の人全員を騙すつもりか、ドS勇者め。

それにしても金髪はかっこいいな、美形が更に映えて目の保養度倍増だ。

「本性が真つ黒なのを隠して魔族討伐するつもりですか。ある意味魔族よりも真つ黒の貴方に倒される魔族が可哀想です」

「じゃあその可哀想な魔族を守ってやる為にも俺と付いてきた方がいいんじゃないか？」

「くッ……。逆手に……」

「もうお前の同行は決定事項だから諦めろ」

「ふっ……。最後まで諦めないのが私という人間です」

「俺も妥協はしない」

勇者との間に火花が散る。

今なら気合で目からビーム出せるかな？あの綺麗な顔に穴を開けたいんだけど。

「しかし残念ですね、勇者様。私は貴方に付いていけないという理由を手に入れたのです」

「……………どんな？」

何故か部屋の温度が下がったあ！

原因目の前だ、勇者から冷気が出ている。

「そ、それは……他のお仲間がですね……」

「じゃあ無視しとけ。理由は却下、認めない」

だから最後まで言わせて下さいってば。

無視できる状況じゃ無かったんですから。

「まあ、リン。もう諦めるよ、もう分かってんだろぅが」

ガウスは黙ってくださいませんか？

「おとなしく着いてだけで良いんだぞ。勇者の仲間なんて名誉だろ」

「メリットだけ押し付けしないで下さいよ。肝心なデメリットは伏せまくりですか？」

「デメリットなんて戦うことだけだろ。お前は強いし良いじゃないか？」

「何言ってくれてるんですか。この程度の力で強いなんて本気で言ってる訳じゃ無いですよね」

「……お前の言っている強いってどのくらいだ？」

「両親です、未だに勝てたことがありますから。いつも挑むと意識が堕ちてるんですよね」

「お目にかかりたくない両親だ」

ガウスが渴いた笑いを漏らす。

私の両親は昔から強くて憧れでもある存在。

私も二人のようになりたくて手合わせして貰ったこともいくつがあるが、勝てる見込みが無い。

気づけば適当にあしらわれて意識が堕ちてる。

「とにかく、主張させて貰います。行きたくありません!!」

「主張が通らないことぐらい分かりきってるだろうが」

「痛いところを……。こうなったら国外逃亡でも……!」

「国内を出るには総務部省に申請してから3ヶ月後に可能だ。その時にはとつくに旅に行ってるだろ」

「だったら申請をせず……」

「捕まって一生幽閉か。短い間、楽しかった」

逃げ道が無い! 私はこのまま旅に行くと?

私の夢にまで見る『帰る』ことが遠ざかってしまう。

早く帰って平凡ライフを楽しみたいと言うのに。

「そういえば勇者、出発はいつにする気だ?」

「当面は修行らしい。騎士団団長とかいう厳つい男が稽古をつけると言っていた」

「ああ、ウェルズか。あいつの訓練はきついらしいが確実に力はずくぞ」

「そうか」

修行かぁ。私もやったな。

いきなり来たのが草原、しかも魔物と呼ばれてる凶暴な獣の縄張りだったから死ぬかと思った。

草原を抜ける約1ヶ月間危険すぎる修行相手だった、いやもう死ぬってあれ。

草原に落ちてる細い木の棒で応戦してもすぐ折られるし、逃げても逃げても追ってくるし。

運よく魔物の死骸に出会って武器を作れたから良かったけど牙は駄目だね、べたべたしたから。

結局爪や骨を使って相手し続け、重傷を負ってこの国に駆け込んだのがつい昨日のことみたいだ。

長かった上に辛かった。よく生き延びたと思うよ。

国に着いて安堵してたところに追い討ちをかけたガウスの修行も辛かったけど死にはしないような修行だったからまだマシだった。いや、それでも十分辛かったけどね。

「そういえばリンも修行をしたな。不眠不休で4日間だったか？」

「そうですよ。スパルタ教官が」

「お前も修行？どんなだ？」

「まず魔法の成り立ちと理^{ことわり}の綴つてある書物の数百冊を読破、その間後ろで鬼が殺気を漏らして睨んでいます。終われば頭に入ったのを確認するためにテストを数十回以上受けさせられます。ちなみに1問、間違えるたびに剣が飛んできます。そしてその次は実践。やらなければ殺すぞの一言で初級魔法をマスターさせられました。師匠は見本とか言いつつ、初級魔法の連発を繰り返して爆音を轟かせ私の眠気を覚まし疲労を蓄積させました。それが4日間に詰めこめられ、5日目からは下っ端としての通常業務開始……といった感じですよ」

「聞いた俺が悪かった」

「そうですね。海よりも深く反省してください」

「リン、とりあえず顔が怖いからやめろ」

「誰のせいだと思ってるんですか、師匠」

ついつい長く語ってしまいました。

勇者は少し口元を引き攣らせて、ガウスは無表情でした。

ガウスは頼むから表情を変えろ、犯人お前だから。

「悪いとは思ってない、おかげで初級魔法をたったの4日でマスターできただろ」

「そこは感謝してます」

「急に素直になれるのも不気味だな」

「怒っていいですか？」

「冗談だ。とにかく今後だが、勇者が修行を終えるまでお前は荷造りしとけ。逆らったり逃げたりしたら……分かってるな？」

目の前に魔族よりも怖そうな男がいるぞ。

もう私に拒否権は無いと。そうですか。

私の人権は何処に消えたんでしょうかね、こちらに来たときから人権無視ですが。

「ッ分かりましたよ！！付いてけばいいんでしょうが！」

「勇者、了承得たぞ」

「いい性格してるな、あんた」

「この最低師匠が　　！」

私はガウスに怒りをぶつけるがガウスは無視を決め込む。

嵌められたなんて家族に知られたらボコボコにされてたな。

ここが異世界でよかったなんて思ってしまう。帰りたいのに。

「なあ、提案があるんだが」

勇者が唐突に切り出し始める。

顎に手を当てながら言い出すその顔が不敵な笑みを浮かべるので嫌な予感がよぎる。

「手合わせしてくれないか」

「……………は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

いきなり何を言い出すんだ、勇者よ。目線が私という事は私に言ってるんですか？

構わないけど何故そんな事をいきなり言い出したのか分からないです。

「…なんで？」

「自分の力量が知りたい。一応元の世界で剣術を習ってはいたが、こちらでも通用するのか分からないからな。お前は中々なレベルなんだろ？」

「それ、私にぶちのめされろって言ってるようなものですよね」

「何でだ、勇者が最初から強いと決まっているわけではないだろ」

「いや、剣術っただけでも強いのに更に……アレですから」

「アレ？」

「何でもないです。忘れてください、忘れる」

つい失言してしまい、口を押える。

剣術習ってる人に召喚魔方阵の魔法が上乘せされたらどんな化け物になっているのか分からない。

負ける戦はしないタイプです。

勇者は眉を潜めたがそれは一瞬の事ですぐに無表情に戻った。

「ふー…ん。で、受けてくれるか？」

「…お断りしたいですが師匠の視線が突き刺さるのでお受けします」

勇者の隣に佇むあの男が怖いです。

視線だけで人を殺せる能力を持っているに違いない。

「じゃあ訓練場を貸して貰うといい。勇者が使えば、すぐ使わせて貰える」

「今からですか!？」

「今以外にいつがあるんだ。ほら、とつとと行くぞ。……負けたら殺すからな」

「物騒すぎる言葉が小声で聞こえたんですが」

「気のせいじゃないから安心しろ」

「安心できるのは頭がおかしい人だけです」

と言う事で、訓練場に行くことなり部屋を出ました。

足取りがとても重いのは気のせいじゃない。

知らずに大きな溜め息が漏れる。ああ、幸せが逃げていく。

「あ、勇者様だわ」

歩く廊下ですれ違う女官やメイドが勇者を見て頬を赤らめる。金髪に変わってるのに勇者と見破られるなんてすごいなと思っていたら、ガウスに勇者は髪の色を金色に染めるしきたりがあるのだと聞いた。どんなしきたりだ、それ。

勇者もそれに対して笑顔で返す。その笑顔に黒いオーラが一切見受けられない。

本当にこの国ごと騙す気か、勇者。

「着いたぞ、ここだ」

ガウスが足を止めた先にあるのは土煙の舞う闘技場のような所。

ここがさっき言っていた訓練場のようで、中央の所に剣を振る男の人達が見える。

「おい、ウェルズ！勇者を連れてきた！」

ガウスが叫ぶと、中央で剣を振っていた内の一人がこちらを向いて走ってきた。

ガウスよりかは若そうな風貌を持つ中年の男の人で、強面だった。

「おお、そうか。修行を受けに？」

「それもあるんだが、まずは私の弟子と戦わせてやってくれ。勇者の希望だ」

「弟子？……この可愛らしいお嬢さんの事か？」

「ああ」

「初めまして。ウエルズだ」

「リンです。師匠にやらないと殺されるので使わせて頂いていいですか？」

「構わない。使ってくれ」

「どうもです」

ウエルズがニツコリと人の良い笑みを浮かべる。

それから中央で練習する男の人達をどけて貰い、勇者と手合わせをする形となった。

それにしても展開が早い。

出会って翌日で勇者と勝負、これ何フラグ？

そもそも勇者と言ったら騎士団団長と戦って負かして強いってことを見せ付けさせるフラグが有効なはずなのに何ですか、この展開は憂鬱感が半端ない。今すぐ逃げ出したい。

第一、勇者が一介の下っ端を相手にして勝って嬉しいんですか？

ガウスもガウスだ。か弱い弟子を勇者の前に放り出すなんて酷すぎるだろう。

「1つ聞きたいんですが」

「何だ？」

「制限時間3分でどうですか？」

「分かった、参ったと言わせればいいんだな？」

「武器破壊でもいいですけどね」

私は持たされた木刀を見つめる。

この勝負、負けたら殺される、ガウスに。

つまり、負けることは出来ない。けど勇者相手に勝てる筈も無い。何これ、私にどうしろと言うんだ。

私に残された道は引き分けのみ、3分 耐え切るしかない！

私は目の前の勇者に木刀を構え、見つめると勇者が顔を背けた。

いや、何故そこで背ける？

「じゃあ、行く……」

「勇者様ッ！！？」

勇者と私がある場で突然の声に驚き、固まる。

今の声は訓練場の奥の方から響いた。

私は動こうとした体勢で固まったので若干姿勢がキツイ。

それにしても誰だろうか、女の人の声だったみたいだけど。

視線を変えてみると訓練場の奥で綺麗な女の人が剣を持って口を開けていた。

あれは ハーレム要員の騎士団副団長であるアーリアさんだ。

切れ長の赤い瞳に燃え盛るような赤いさらさらの髪の毛が人気の美女で、剣の腕が天才的と言われ若くして副団長を務める人。

騎士団の中では唯一の華で、憧れの的なそうだ。

そんな彼女が焦ったように勇者の方に駆け寄り心配そうな顔を浮かべている。

うん、勇者と彼女は端から見ればバッチリお似合いなカップルだね。

「何をしていらっしゃるんです！？勇者様が何故このような所へ？」

「あ、少し…自分の力量を知りたいと思ったのですが……いけませんでしたか……？」

今だけ勇者に尊敬の念を抱きました。

いきなりのこと動じず演技に笑顔、どこぞの詐欺師か。
演技が本性と違いすぎて鳥肌が立つ。断言しよう、勇者は一流の俳優になります。

「いえ、そのようなことは…。けれど何故この者と？他にもマシな相手がいたかとは思いますが」

私とアーリアは一度廊下で会っている。

会話こそはしていないが睨む力だけは以上に凄かった。言動と行動から勇者に一目惚れですか。恋愛に興味の無い鉄の女といった噂は嘘？

「いえ、私から頼んだのですよ。彼女は快くも引き受けてくださったので」

勇者は笑顔を崩さないまま、答える。

1つ訂正をお願いします。快くはないです、嫌々です。

そして勇者とアーリアさんで二人のワールドを展開しないで下さい。私、空気化してます。

この場から抜け出したいのに抜け出せないこの気持ちを察しろ。日本人はこうゆうプレッシャーに人一倍弱いんだぞ。

「けれどこの者では勇者様と対戦させるのは失礼に当たってしまいます。どうか、やるならば私と対戦してくださいませんか？私ならば副団長を務めておりますのでまだ相手になって差し上げられるかと……」

「でも、私は……」

「お願いします。一度だけでいいのです」

「いえ、それでも……」

「私ではやはり戦力には欠かしますか？」

「そういう訳ではなくて……」
「ならば致しましょう！おい、木刀を貸せ」

私の手元にあった木刀がアーリアに渡る。奪うように取られたので不覚にもよろめいてしまった。

その時勇者がこちらを見て驚いたような顔をしたがまあ当たり前でしょう。

いきなり副団長との戦いにシフトチェンジしたんですから。私は助かったんで嬉しい事この上ありません。

アーリアの言動にツツコミたい事がいくつかありましたが。

勇者、頑張れ！仲間との初対戦ですよ。

私は内心ウキウキしながらその場を離れてガウス達のいる観覧席へと向かった。

訓練場は屋根の無いドームのような造りをしているので観覧席がちゃんと存在する。

私は訓練場の奥にある階段で観覧席のある2階へと昇り、ガウス達に会う。

「師匠！と言うことで今回の対戦は無しです」

「チッ。仕方ないか……。じゃあ座って見てろ。勇者と騎士団女との対戦か、悪くない組み合わせだがつまらなくなっただな」

「つまらなくなっただ？むしろ楽しくなるのでは？」

「……………はあ」

「なんですか、その溜め息。地味にダメージですよ？」

「いいから座ってろ……………ったく」

「は〜い」

私は観覧席に着いて、下にいる勇者を見下ろす。

勇者とアーリアが何かを話しているらしいが声は聞こえない。話がついたのか二人のが離れてお互い木刀を構え始めた。

さて、勇者はどれ程の強さなんだろうかね。出来れば人間内である事を希望して。

第四話・勇者と見習いの手合わせ（後書き）

色々な展開をすっ飛ばしてるような気がしますけどどうか温かい目で見守ってください……。

第五話：勇者の仲間（前書き）

勇者の仲間がやっと全員出てきました。

第五話：勇者の仲間

本日は冬とは思えない程の暑さが照りつける。

降り注ぐ陽光が暑さのみを運び、体が少し汗ばむ。

炎天下とはいっても過言ではないこの暑さの中で、金属音が鳴り響く。

不快感を思わせるような音だが、私はこの音がどちらかと言えば好きである。

金属音を鳴り散らかすのは訓練場の中央で向かい合う勇者と騎士団副団長の肩書きを持つ勇者の仲間。　　もといハーレム要員。

剣の打ち合いを見続けてもうすぐで3分を切るが決着はまだ着かない。

着かない　　というか着けない。

圧倒的に勇者の方が剣技や能力は上なのだが、決着を着けようとはせずに只打ち合いを続けている。

一方でアーリアはもう疲労困憊しており、打ち合いを続けるのがやつと云った感じである。

そしてそんな戦いを見続けている私が思った事は、騎士団団長が怖いという事です。

副団長のあまりにも情けない姿に観覧席に座る団長がお怒りの様子でさつきから顔が怖い。

ただでさえ強面で怖い顔がさらに迫力を増してもはや鬼と化している。

（ウェルズさん怖あ……。もう人一人殺^ヤつてるようなオーラが出てるよ……）

私は勇者の試合よりも団長の顔の怖さに意識が持っていかれていた。その時に大きな笛の音が鳴り響く。

どうやら勇者の試合が時間切れで終わったようである。

それと同時に団長が観覧席から立ち上がり、ゆっくりと階段を下りていった。

私とガウスも下へ降りて勇者のいる中央まで足を進めた。

「馬鹿者！お前は副団長という役職に就きながら何という体たらくだ！勇者様に勝てない事は十も承知の上だとしても良い勝負すらも行えんのか！！」

団長がアーリアさんに怒鳴りつける声が響いていた。

アーリアさんは顔を伏せ、じっと動かずに聞いている。

「まあ、ウエルズ。そこまで怒らずともいいだろう」

「良い訳があるか！ガウス！貴様の弟子であればもつと良い試合を行えたのであろう！？」

「え……あ　　どうだろうか？」

「渋らずとも良い。それを取った上に無様な戦いを見せてすまなかつた」

「いや、そこまで……」

私が物凄い団長に過大評価されてる。

評価されるのは嬉しいけど身の丈にすぎる評価は有難くないのでやめて貰えますか？

あ、ホラ。アーリアさんがこっちを睨んでくるんですって。かなりの眼力で。

「すまないが勇者様。修行は明日にして頂けませんか？こちらの馬鹿を修行し直さなければ勇者様の仲間とはいえませんが。失礼します」
「別に構いませんよ。では」

勇者が最後まで笑顔で団長が去るのを見送ると一気に顔が無表情へと変わった。

演技終了。

「自分の力量を測ろうにも測ることができなかったな、あの女の実力は分かったが」

「勇者の仲間としては少し力量が足りなかったか？」

「まあな。さて、今度こそ相手をして貰おうか？」
リン

「断らせて頂きます。副団長ですら勝てなかった相手を見習いがどう勝てと？」

「お前ならいけると思うんだがな」

「どんだけ皆さん私を過大評価してるんですか、師匠の弟子だからですか」

私が言い放つと勇者とガウスが大きく溜め息をついた。
いや、溜め息をつきたいのはこっちなんですが。

「ま、いいか。勇者、皇帝陛下のところへ行くぞ」

「……いきなり何だ？」

「いや、何か成り行きで忘れてたけどリンを落ち着かせる名目で皇帝の間を退席しているんだぞ。戻らなきゃやばいだろうが」

「そういえば忘れていました。ナイフで切りつけて出てきてしまったんです」

「お前はいつもいきなりの行動だからな。あれでよく不敬罪にならなかった」

「いやあ、無意識で体が動いてて……」
「その反応が怖いな」

という事で城の中を進み、黄色い声が上がrittつ玉座の間の正扉の

前に辿り着いた。

ここに来るまで勇者が女の人達に囲まれて足止めをくらったので大変だった。本来なら3分もかからなかったような道が20分もかかったとはどういうことだ、イリユージョン？

さて、扉前まで来たのは良いけれど入りにくい。

だって下っ端が正扉からですよ！何様って話なわけですよ。

けど裏扉からは入れません。こそこそ入って皇帝へのご挨拶は出来ない上に不敬罪で打ち首確定になってしまいます。

ガウスが指を動かして金の装飾で造られている重そうな正扉を魔法で開けて行く。

（そもそも皇帝の前なんかに一介の下っ端！絶対おかしいって！！私はどこで選択肢を間違えてこうなってしまったんだよ！）

心の中での葛藤を繰り広げながらも目の前の扉はゆっくりと開いていきます。

分かりました。この世界は私を苦しめたいんですね、受けてたってやりますよ。

扉が完全に開き、中に入ることを余儀なくされると勇者とガウスの後に続いて私も中に入る。

赤い絨毯の先には玉座に優雅に佇む皇帝が。

私達は玉座の前にまで歩いていくが、その間皇帝の側に控える重臣達の視線がめっちゃ痛かった。

今この玉座の間にいるのは皇帝と重臣達だけみたいだった。

玉座前にまで来ると膝を折った。

「……リン＝ヒョードだったな」

皇帝が開口一番に発したのが私の名前だったので心臓が跳ねた。

「落ち着いたか？」

「……………え？あ…はい……………」

皇帝の予想もしていなかった言葉に一瞬固まってしまった。

勇者を切りつけた事や何で私が仲間となるのかを聞かれると思っていたので少し拍子抜けしてしまった。

予想が外れたのは嬉しいから良いのだけれど。

「ならば良い。…して勇者、何故この者を仲間にする？」

「……………理由はある事にはあるのですが、話す気はございません」

勇者が爽やかな笑顔で言っただけ。

「…そうか。仲間の件はいいのだが話したいことは今後の事についてだ」

「今後…とは？」

「まずは勇者の修行は良いとして、その前に勇者の仲間と自己紹介だけでもやって欲しい」

「そういえば騎士団副団長とお会いしましたよ」

「そうか。ならばそちらはいいな。後は神官長のクレアと魔法士のミリー、我が娘のラルアだ」

「そうですか。近いうちにお会いしたいですね」

「その憂いは必要ない。この3人は既に別室に集めてある。ここを出た左の客室だ」

「……………分かりました」

皇帝がそれだけを言い残して重臣達と去ると、勇者が舌打ちをした。

「舌打ち！？」

「面倒くさいな。わざわざ会いに行けと言う事か」

「…待ってくださってるみたいですし、早く行った方が良いのでは？」

「他人事のように言ってるがお前も付いて来いよ」

「いえ、私は……」

「お前も仲間だからな」

勇者が不敵に笑う。

語尾が強調されたのは気のせいではないらしい。

「じゃあ私は帰る、そろそろ仕事に戻らんとヤバイ」

「え…ちょ、師匠！待ってくださいよ」

「しばらくは私の部屋に立ち入り禁止だ、リン」

「し、師匠
！！」

「諦めろ、行くぞ」

去っていく薄情者の背中を見つめながら勇者に首根っこを掴まれて強制連行。

仲間と会う？会った瞬間かき氷が作れそうな予感がするほどの視線を受けますよ。

だって、勇者の仲間になることを断るって言ったんですよ！？

なのになんか流れて仲間になっちゃいました、テヘ。 ってか！？

嫌だ、死亡グラフ！

私は逃れようと必死に体を動かして逃げようとするが勇者の引っ張る力が強くて抜け出せるに抜け出せない。

勇者はそんな私を見てただ微笑を浮かべるだけ。

かっこいいけど嫌味か！哀れな子羊を見てあざ笑いやがって！！

玉座の間を出てすぐ左の客室の前まで来ると、勇者はやっと私を放した。

首根っこを掴まれていたので少し咳き込む。

私は既に逃げ出せない状況まで来てしまった。ブリザードの視線を受けるまでタイムリミットはもう無い。

勇者が躊躇いも無く扉を開けて私も中に引きずりこまれる。

「初めまして、皆さん。挨拶が遅れましたが勇者として召喚された劉斗と言います」

中に入った勇者は眩し過ぎる笑顔で自己紹介を述べると日本文化の一つであるお辞儀をした。

お辞儀も優雅すぎて、分度器で測れば45度ピッタシでは無いかと思うほどの完璧なお辞儀だった。

そんな勇者を中にいた仲間は見惚れていた。

頬を薔薇色に染めて瞳は甘くつぶらか。まさに恋する乙女そのものだった。

「あ、貴方が勇者…様……」

呟いたのは神に身を捧げ、純潔を貫き通す神官長のクレア。

白き巫女と呼ばれる彼女は、衣服を穢れの無い白で統一し金色に輝く髪と瞳はまるで女神だと言われている。

凜々しい顔付きは今ピンク色に染まっていて更に魅力を生んでいる。

「やっぱり…… かつこいい……」

ふっくらとした赤い唇からその言葉を漏らしたミリー。

くるくる巻いてある茶色の髪に大きな紫色の瞳で可愛い系の顔立ちをしているミリーは性格が男のようなのが玉にキズと言う事らしいがそれでもギャップがあるからと求婚を絶えず受けているような子同期と言う事で仲は良いほうだった。だからこそミリーの事を少しは知っている。

彼女の憧れは野性味の強い男らしい男なそうだったはずなのに正反對の勇者に一目惚れとは驚いた。

「……………はう」

勇者の顔を見て守りたくなるようなよろつき方をする皇女ラルアは、140あるか無いかほどの小ささで華奢な体つきをする守りたくなる女の子。

王族特有の銀色の髪に透明感を持つ白色の瞳は小顔に合い儚さを感じさせる。

王道には定番と言える皇女だった。

（これがハーレムを作ることのできる男の能力か！？）

一気に3人の美女を落とした勇者に尊敬の念を抱いた私は呆然としていた。

笑顔1つで女を落としてハーレムを作り上げるのが王道の勇者。この勇者は全く持って王道を突き進むらしい。

それを見ていかなければならない私はどうすればいいんだろう。

「よろしく願いますね」

首を少し傾げて言う勇者は計算でもしてるのか完璧だった。

可愛さを生み出しながら、それでいて男らしさを失うことの無い仕事草。

ハーレム3人はもうめろめろだった。

え、私？勇者の本性を知ってしまったので恋愛対象外ですよ。目の保養だとは思いますが美形はテレビの中でいいです。

「は、はい！あの……私は神官長を務めているクレア＝トレイルと

申します。これからよろしく願いますね」

顔を真っ赤にしながらも平静を装おうと声音は冷静さを保つクレア。

「あ、俺はミリーって言う！よ、よろしくなッ」

気恥ずかしそうに言うミリーはいつもの調子じゃない。

「私は……ラルアって言います。治療術が使えるので今回の同行を希望しました……。足手纏いにならないように頑張りますッ……」

もじもじしながら言うラルアは勇者の方を上目遣いで見つめ上げる。勇者は何気に身長が高くて、私も見上げなければならぬほどの大きさだ。上目遣いはやばいでしょ。

そう思っで見上げてみると勇者は私の視線から顔を逸らした。耳が赤い。

勇者め、さっそく王道の皇女との恋愛ストーリーを始める気か。

「では自己紹介も終えたので失礼します。……おい、行くぞ」

耳元で囁かれて驚く。

無駄に美声だから心臓に悪い。

「いや、私は何のために来たんですか。せめて自己紹介しますよ。あの、リン＝ヒヨードです。では」

腕を勇者に掴まれながらも一応自己紹介をする。

3人は勇者にずっと見惚れていて私の自己紹介など微塵も聞いていないようだったが。

ま、いいか。

私は成すがままに勇者に引っ張られて部屋の外へと出る。

（それにしても全員美人だったな。日本じゃ絶対にお目にかかれ
ないね）

私は一人そんな事を考える。

「…面倒くさい挨拶は終えたし、部屋に戻るか」

「そうですか、ではさよならですね。お部屋への道は分かりますか
？」

「は？お前も来るんだよ」

「へ？いやいや私は用事がありまして…」

「用事？」

「はい、日課で図書館へ」

「……ふーん。じゃあ俺も行く」

「何故……！……まあいいですが…」

毎日図書館へ通う理由は単純明快。

いざ、元の世界へ帰るため書物を読破している。

魔方阵から空想のジャンルまで幅広く読み漁り探しているものの有
力となった情報は1つもない。

この国は別名『文明の塊』と呼ばれ、図書館にはそれを証明する
のごとく書物がある。

記録によれば図書館には約5000万冊もの蔵書があるらしい。

だからこそ可能性を信じて毎日通い詰めているのだ。

図書館は城の中にあり、行く事が簡単なので通い詰められる原因に
はそれも入っているが。

ガウスから暇も貰ったことですし、今日は読みふけるぞ！

っと思ったのはいいんですが、勇者がついてくると言い出すなんて
予想外でしたね。

図書館に行つて人が騒ぎ立てなければいいんですがその心配は要らないでしょうか？

人は滅多に居ないし、居ても静かな方ばかりですから。ただこの勇者が書物に興味があるとは少し意外でした。

外見をこの際詳しく説明させて頂くと、金色に輝く髪と正反対に鋭い瞳に染まる黒色が整った顔に映え、スタイルも少し引き締まっている感じでどちらかといえば運動系で文化系には見えない。

眼鏡を掛ければ別だと思っけれど。

基本見た目はクール系美少年だけど演技中は紳士になるとはどんな裏技なんだろうか。

とか考えてる内に図書館へ辿り着きました。

「こんにちは、リンです。新しい本がまた入ったと聞いたんですが……」

いつも通りに図書館の扉を開けて、中に居る人に声を掛ける。

「やあ、リンちゃん。入ってるよ、パッド先生の新作『未知の魔方阵』が」

人の良さそうな優しい笑顔を浮かべて出迎えてくれたのは図書館の管理員をしている通称『図書館の主^{ぬし}』。

図書館にある本で知らない本は無く、ずっとここで管理員をしている。

明るい亚麻色の髪と薄い水色の瞳は決して悪印象を抱かせない30代の男の人。

「本当ですか！？それ下さい！！」

「毎度あり、2000Lだよ」

「た、高い…。ここは…1000Lで！」

「しょうがないなあ、常連さんだから1800Lでいいよ」

「1500L!」

「1750L」

「1600L」

「1700L」

「………分かりました」

私は結局300Lしか値切れなかったことを悔やみながら1700Lを差し出す。

ん？普通は図書館なんだから借りるはずなのになんで値切って買ってるかって？

ここが地球とは違うところなんです。

こちらでは図書館は読めるところであって借りるところではないらしく、借りるには買わなければならないんです。

もちろん買ったんだから自分の物になります。が本を買わずに図書館から持ち出すことは禁止とされています。

ちなみに『L』とはお金の単位で『円』とあまり変わりません。100Lは100円といった感じです。

一応お城で働いてはいるので雀の涙ばかりのお金を貰ってます。

だから値切らないとリアルに餓死するのです。

私は受け取った本を抱きしめて早速読もうと席に向かおうとしますがそこで大事な事に気づきました。

勇者を忘れてました。

「ありがとうございます。あ、それと一応紹介しておきますね、こちら勇者様です」

「へえ、リンちゃんか勇者の仲間になったって本当だったんだね」

「何故それを…」

「うん？ガウス様が場内に放送を……」

「あの師匠、絶対殺す」

「……………うん。それはまあともかく勇者様、リンちゃんのことお願
いしますね」

「……………はい」

勇者の紹介を終えたことでガラガラの図書館内に数多くある席に着
いて本を読み始める。

本を読むだけなら買わなくてもいいのに買った理由は本の処分の速
さと図書館の開館時間の短さが原因となる。

毎日増え続ける蔵書のために新作であつても僅か3日で処分され
たり、開館時間が毎日2時間だけなのでとても買わなければ読むこ
とが出来ないのだ。

私はそんな理由で買わざるを得なかった本の1ページ目を開いた。

第五話：勇者の仲間（後書き）

勇者が旅に出るまで後数日？数十日？はたまた数ヶ月間か。

どちらにせよ魔族が修行終わるまで律儀に待つてくれるなんてあるはずが無いですよ

第六話：見習いの危機（前書き）

お気に入り登録と評価をありがとうございます。

第六話：見習いの危機

私がこの世界に来てからもう半年間が過ぎた。

初めはただ何が無だか分からなくて追い掛け回す魔物から逃げ惑うだけだった。

けどそのうちここが『違う』ところなのだと気づいて、元の世界に帰りたいと願った。

そして元の世界に戻るための方法を探して半年が経った今、ようやく見つけた。

手がかりとなる情報を。

私はゆっくりと目の前に開いている本を閉じる。

喜びのせいか手が震える。

何千冊も読み漁って今日見つけた本に書いてあったのだ、帰る方法の手がかりを。

『未知の魔方阵の中でも、一番未知とされるのが異世界へ渡る術です。しかし長年の研究結果で少々分かる部分が生まれました。すなわちそれは、魔族の王が持つ最も大切な物が必要だという事です』

魔族の王

それは魔王。

定番すぎる定番。

魔王を倒して帰る方法が手に入る。

私は思わず椅子から立ち上がり、ガッツポーズをした。

「……何してんだ、お前」

目の前で本を読んでいたらしい勇者が呆れたような声を出す。

「…いえ、長年の夢が叶ったかと思うと嬉しくてついはいでしまいました」

「長年の夢？」

「はい、半年間ほど夢に見てました」

「長いようで短い月日だな」

「ええ、それはもう」

「で、何を？」

「………あ、新しい魔法陣の発見です……」

「……ふー……ん」

大雑把には間違えていない！

すみません、勇者。魔方陣が作れたら一緒に帰りましょう。

そのためにも、魔王退治頑張ってください。

陰ながら応援しますのです。

「もうすぐ閉館みたいだ。帰るな」

「分かりました。では」

「明日訓練場だから」

「……私、明日は通常業務が」

「休め、訓練場に来いよ」

「いやいや、無断休仕は給料が貰えないんで………って逃げた……」

物凄い速さで図書館から姿を消した勇者をやっぱりこの世界に置き去りにして行こうかなとか思いました。

私のお小遣いのピンチですね、現在の貯金4300L。

あつという間に消える額です。

どうしましうか、勇者に慰謝料請求でもしてやりくりしますか。

そんな勇気が無いので却下ですが。

ああ、本当に餓死するかも。

（明日は訓練場…。行かなきゃ駄目かなあ？）

ぶっちゃけ行きたくない。

勇者怖いし給料が消えるし。けど行かなきゃ勇者怖いし。

明日が来ない魔法って無いのかな。

そんな馬鹿なこと考えても無駄ですよ。お金の方は後で考えましょう、いざとなればガウスから請求してやります。

私は一人また本を読み始める。

（…えっと、さっきの続き……。あ、ん？…？。なお、魔王は強靱な生命体であるために奪い取ることは不可能と考えていい。これを手に入れるためには、魔王に取り入るか魔王よりも強い生命体を戦わせることである。参考にすると勇者ぐらい。倒すなら頑張ってください）

何、この投げやり感は。

私は溜め息をついて本を再度閉じると、図書館を出ようとした。そして扉の手を掛けるとふと優しい声がかかる。

「リンちゃん。魔族と出会ったらすぐに逃げるんだよ」

「主さん……」

「君が命を落とす理由はないんだから」

「…ありがとうございます」

「またね。リンちゃん」

「またね、主さん」

引き止められた私は挨拶をして図書館を出て、廊下を歩いた。

さっきの主さんの言葉が少しひっかかりながら。

私が命を落とす理由はない。なら勇者は？

勇者だって命を落とす必要なんて無いはずだよ。主さん。

なのに何故勇者には何も言わなかったの？
何を思ってたそう言ったの？

（この国は勇者は死んで当然だと思っている……？）

勇者マニュアルなんてあったくらいだ。

勇者を只のゲームの駒としか思ってたないんだ。

そんなこと私が知っても可哀想ぐらいにしか思わないけど、なら私は？

私は異世界から来たけどこの国の人間として溶け込み、生活している。

なら私はさしずめ物語でよくある大勢その他の一人だろうか。

（ま、それなら有難かったんだけど……。大勢その他が何故勇者の仲間入りを果たしてるのかな？）

私は何のために異世界へ来たんだろうか。

理由も無くただ飛ばされたのか何か理由があって飛ばされたのかすらも分からない。

もし理由があるとするならばこんなところだろうか。

勇者の仲間になり、魔王を倒した際に魔方陣を構築して元の世界へ帰れ。といった感じ。

あれ、これ私必要か？

魔方陣を構築するのなら元々こちらの世界に居る魔法士でいいはずだ。
あ、駄目だった。めろめろのお姉さま方が勇者を帰すはずが無いや。

とするとマジでそれが理由かな。

（はあ、そんだけの理由で私は瀕死に追い詰められたり無駄に本を読んだりしてたのか）

今までの苦勞は何だったんだろうか。

私はテンションが下がって足取りが重くなっていくのが分かった。

（こんな時は城下に行こう。うん、買い物して気分を高めるんだ）

お金が危機的状況だというのに城下に行こうとするのは何故だろう。
いわゆる買い物中毒かもしれない。

治したいとは思っけど買い物は楽しいからやめられそうに無い。

私は城を出て、門番に挨拶した後城下に着いた。

城下には頻繁にくるので門番とはすっかり仲良しの顔見知りになってしまった。

城下は夕日に照らされながら人が大勢行き通い、賑わっている。

上手に客を呼び込む商売人や井戸端会議中の奥様方。それにはしゃぎ回る子供たちで賑わう城下はいやなことを忘れさせてくれる。

私はいつものように城下を歩き回り、品物を見ていく。

「お、リンじゃねえか！今日は何を買う気だい？」

「おっさん！ふ…今日は買いに来たわけでは無いのです」

「めっずらしい！リンが買わないなんて、病気か？」

「病気って…失礼ですね。貯金が危機的なんですよ」

「あっはっは。まあ、あんだけ買つてりゃあな」

「口車に乗せて上手く買わせる商売人に言われたくないです」

「…おう、相変わらずの毒舌っぷりだ。おい、皆！リンが来てるぞー！」

雑貨屋を営む商売人、おっさんと呼んでいるがおっさんとは結構な顔なじみである。

おっさんだけでなく城下にいる人とは大抵顔なじみで、仲が良い。

「え、リン！」

「あゝリンさんじゃないっすか」

「リン！仕事はいいのかい？」

「リンねえちゃん」

「遊んでよ、リン姉！」

おっさんの声で集まってきたのは城下でも結構ひいきにしている商売人や、よく遊ぶ子供たち。

「こんにちは。皆さん相変わらず元気そうで」

「当たり前だろう！商売人は元気がなきゃやってけないよ！」

「いつもどおりのご返答ありがとうございます」

「そっちもいつもどおりの質問をありがとうございます」

「ねえ、リンねえちゃん、遊ぼお！」

「そうだよ、遊んでえゝリン姉！」

「いいですよ。今日は買い物するとマジメに餓死してしまいそうなので」

「あら、そんなにやばいならウチで雇ってあげようか？」

「はは…雇われてると死にそうなので遠慮して置きます」

「失礼しちゃう。ちょっと多忙すぎるだけなのに」

楽しく賑わう会話が異世界にいるという不安を消してくれる。

私は何度もこの人に救われている。

話に区切りをつけるとそれを見計らったように子供達が私の袖にしがみついた。

私は子供達に袖を引っ張られて、城下の中央にある広場まで連れて行かれる。

決まって遊ぶときは広場になっている。

「よし、では何をして遊びますか？」

「リンねえちゃんのお話！」

「馬鹿！歌がいいよ！！」

「えーじゃあお歌」

「また私にあの醜態を晒せと？」

前にもせがまれて小声で歌ったことがあったが、広場だったので人に見られて凄く恥ずかしかったのだ。

しかも地球の歌だから音楽なしの状態はきつかった。

せめてまだ話の方がいい。地球のものしか知らないが。

「今日はお話にします」

「わーい」

「えー」

「はい、黙る。ではお話：何にしましょうか」

「前に言ってたオリジナル話！！」

「……あれですか。適当に考えたものなんですか」

「いいよ。リン姉、話して！」

子供の無邪気な笑顔に押されて私は考える。

前に話したのは異世界にちなんでの勇者と魔王の戦いだった。

今日はどんな話をしようか。

「昔々、あるところにお爺さんとお婆さんがおりました。二人の夫婦は大層仲の良い夫婦でしたが、ある日お婆さんが病で亡くなってしまいました。悲しみに明け暮れたお爺さんはある1つのことを思いつきました。それはお婆さんを生き返らせるという事でした。お爺さんは研究に没頭し、人を生き返らせる方法を突き止めました。人を生き返らせる方法は、生き返らせる人と同じ血を持った者を全員殺すことでした。お爺さんは自分の子供と孫を殺し、更にはお婆さんの血縁者を全員殺しました。血に塗れたお爺さんはお婆さんの

ためとはいえ、人を殺してしまったことを後悔し自らの胸にナイフを突き刺しました。しかし、お爺さんはその残酷さを見初められた魔王に自殺を阻まれたのでした」

「おじいさん、悪い」

「これ、知ってる！狂った愛！！だよ」

子供達に話すには少々早すぎる物語かと思い、当初は話そうとは思わなかったがこの世界の子供達は物語に関してはありえないほどシビアになる。

地球で話す幼児向けの物語なんか話した途端に総スカンをくらう。とゆうか狂った愛なんて言葉を何処で覚えた。

「止めた魔王はお爺さんにこう言いました。『貴様の死ぬ命を私に寄越せ』お爺さんは魔王に呟くような声でこう言いました。『いくらでもくれてやる。こんなわしは生きてる価値などない』すると魔王はお爺さんの頬を殴り飛ばしました。『生きてる価値がないだろ？ではそんな事をいう貴様に殺された者たちも生きてる価値は無かったというのか』魔王の言葉は怒りに満ちていました。『貴様は生きる、死ぬことなんて許されない。殺したものの分まで生きて苦しみ、それがお前に与えられた罰だ』魔王はそう言つとゆっくりと消えていきました。その時お爺さんには何故か魔王の姿が老婆さんと重なりました。『馬鹿な亭主だね。あたしや死んじまったけどそれまでの間は十分幸せだったって言うのにお前さんは分からなかったのかい？生き返りたいなんて微塵も思わなかったさ。あんたと出会ったことであたしや死んでもいいと思うほどに幸せだったんだからそれは紛れも無くお爺さんの愛したお婆さんの声でした。ゆっくりと消えていく魔王を見ながらお爺さんは呟きました。『魔王となつてわしに会いにくるなんざ洒落とるわ』お爺さんはその後、自首をして死ぬまで牢屋の中で過ごす事となりますが、死ぬときまで笑いを絶やさなかったそうです」

「無駄に感動的だよ！！リンねえちゃん！！」

「相変わらず良い話を持ってくるね、リン姉！！」

話終わると、目の前の子供2人は号泣していた。

よ、よかった。合格点は貰えたらしい。本当に当初なんか不合格ばっかりだったから。

元々の負けず嫌いもあつたせいかな寝ずに考えた話とかもあつた。

「そろそろ夜になりますね。もうお家へ帰ったほうがいいですよ」

私はすっかり見慣れてしまった夜を肌で感じながら、子供達に帰るように言った。

「うん！またね！！」

「バイバイ、リン姉え！！」

2人は走っていくと薄暗くなった夜道に溶け込むようにして消えていった。

私も帰ろうと、広場から城の方へ歩き始めた。

するとその時、ふと後ろから殺気を感じ思わず隠していたナイフを後ろに放つ。

金属がぶつかる音が鳴り響くとナイフが結構な速さで帰ってきて、避け切ることができずに頬をかする。

何が起きているのか全く分からなくて、薄暗い広場の中を目を凝らして見渡す。

「…ッ。何者ですか……」

武器が後ろの方まで飛ばされ、今は丸腰状態。応戦どころではない。いや、そもそも何故私が。

私をただの民間人としての攻撃かそれとも勇者の仲間となったからか。

どちらにしろ殺気は明らかに私に向けて放たれていた、今は逃げるしかないか。

私はジリつと後ろに後ずさる。

するといきなり口元が覆われ、体が動かなくなった。

(ツ！？、こいつ…！！？)

いきなりの事で頭が追いつかないが危機的状況というのは分かった。私は暴れても無駄なのでなるべくじつとし、相手が動くのを待つ。

力強さから、男だ。力では勝てない。

考えて理解するのは後だ、とりあえず逃げない！

「…暴れないのか。頭は回る方らしいな、リン＝ヒョード」

私の名前を知っている。

ということは誰でも良くて狙った反応ではなく、確実に私と分かかって狙った犯行か。

勇者の仲間っていう理由の線が濃いかな？

「まず状況の説明をしてやろう。お前を狙った理由は至極単純、勇者の仲間とやらがどれだけのものかを見てみたかった」

やっぱりか。

勇者の事はまだ国民にすら知られていないどころか私が仲間になっただなんて事は知られる余地も無い。

考えられるのは城の内部の人間。

「私が相手でなければ仕留められていたかもしれんな、中々の腕前

だ。……ッ！」

相手が私から手を離して飛びのく。

話していると人はどうしても油断を生む。

私は覆われていた手を噛んで離れたところで広場に立つ木の枝を折り構える。

すっかり暗くなってしまったせいで相手の顔は見えない。

「…油断を突くとはな」

「いい言葉を教えてあげましょう。油断大敵という言葉があります」

「……覚えておこう」

「そんなことよりも、ただ試しに来た訳では無いようですが本題は何でしょう？」

「…率直に言えば話をしたかったただけだ」

「それは平和的なものでしょうか、正直厄介事の話ならば御免ですね」

「ふむ…、どちらかと言えば平和的だな」

「なら、窺いましょうか。まずは顔を見せてください」

私がそう言つと、暗闇の中から相手が現れる。

私はその時、目を見開いた。

何故なら彼は、流れるように足元まである漆黒の髪をたずさえ、血色に底光りする赤色の瞳を持つ事の特徴とした
魔族だった。

第六話：見習いの危機（後書き）

この世界の子供は遊びに関して超シビアです。
生半可な物はぶった切られます。

感想お待ちしております！

第七話：魔族の話（前書き）

くあらすじく

前回、いきなりお命頂戴と狙われた主人公の前に現れたのは魔族の男だった。その男は話があると言い出すが。

第七話：魔族の話

漆黒に艶めく髪は地面に着くほど長く、赤黒く煌く瞳はとても綺麗と感じてしまう。

その色を持つのは、勇者召喚を行う要因となった魔族。

私の前に現れた彼は、紛れも無い魔族でとても綺麗な色を持っていた。

羨ましいことに顔も端整で勇者と同じかそれ以上の美形顔だった。

「……この国は美形出現率が高すぎますね」

ついそんな言葉が漏れてしまい、目の前の魔族は訳の分からないといった顔をする。

美形には分らないでしょうね。平凡顔の辛さなんてリア充なんて爆死したら良いと思いますよ。

「失礼しました。それで、現在この国と対立中の魔族が何の御用でしょうか」

「……お前は魔族を怖がらないんだな」

「いえ、怖いですよ。何せ得体の知らない種族ですし」

「……だが怖いと言ったような口ぶりではない」

「単に変な先入観を持つことが嫌いなだけです。それに怖がらなければいけないという法則なんて存在しません」

「そ、そうなのだが……」

「とにかく！用件を早く話してください。無駄な時間割いてる暇なんてないんですよ」

「あ、あ……。私が話したいことは魔族と人間との和平交渉なのだが」「和平交渉？あ、私には無理ですね。他を当たって下さい、では」

厄介事と判断を下した私は全力疾走でその場から逃走を図る。
が、魔族に逃げ道を塞がれた。早いんですけど。

「待て、確かにお前には荷が重いと思う話だが城の人間で滅多に出
てこず、出てくる人間などお前しかないのだ！」

「それだというのにいきなり殺気を放って殺そうとしたのは何処の
誰でしたかね。礼儀も弁えず厄介事のみを押し付けようとする失礼
な方と話すことなんてありません。とりあえず叫ばれなくてはなら
なそこを退いてください」

「わ、悪かった。つい勇者の仲間だということが分かって実力を知
りたかったのだ。それに和平交渉だぞ、そちらにとつても良いこ……」

……

「とでは無いですね、和平交渉？舐めるのも大概にして下さいよ。
そんなの和平講和を行うために顔を合わせた瞬間殺される可能性
がありますし、何より結ばれれば魔族が国に傾れ込み魔族に怯える
民が増えます。第一、私は下っ端！！そんな話はトップンと言っ
てください！！何なんですか、皆さん下っ端だというのに勇者の仲
間にされるわハーレム軍団に睨まれるわ変な期待を受けるわ拳句の
果てには魔族！！下っ端に何を求めていると言うんですか！？」

一息も入れずに一気に話しこんだせいで息が切れる。

魔族は目を見開いて驚くような顔をしている。下っ端なんですつて
ば、私は。

「……驚いたな」

何ですか、下っ端は愚痴すらも言っではいけないんですか。

「確かに和平交渉を結ぶとなればそのような事も考えうるな……。お
前はそこまで考えているのか」

あれ、そこ論点違いませんか？

「お前に話して正解だったようだ。持ってきた和平条件を見直そう」

いや、あの貴方はあの私の怒涛の愚痴を聞いていなかったんですか？

何ですか、都合のいいところしか聞こえない耳でもお持ちなんですかね。魔族というのは。

それとも貴方は天然ですか。頼みますから愚痴の方に耳を傾けてください、そしてさっき前半に言ったことは忘れてください。

魔族は独りでに領きながら懷から紙束を取り出して私に差し出してきた。

え、何ですか。この紙束。

「…何ですか、これ」

「和平交渉の条件なのだが、お前の考えを参考にしたい。お前が条件を書いてくれないか？」

「いやいや、無理ですよ！？何故私が！！」

「魔族にはお前のように考えられるものはいないし適切な考えを持ったお前の書く条件の方が人間共も納得しやすいだろう？」

「~~~~~ッ！だからって人間に任せるのもどうかと思いますが！それ以前にどうして魔族が和平などを？状況的に有利に立っているのはそちらでしょうに」

「お前は何か勘違いをしているようだ。魔族は戦いが好きなわけには無いぞ。人間は侵略などと言っているが我らは元々和平を結びに来たのだ。その際に人間が魔族というだけで警戒心を持ち、中へ通そうとしないから短気な魔族共が暴れているのだ」

「……なるほど。侵略はこちらの勘違いと……。分かりました、どうも早とちりをしていたようですみませんでした」

「分かってくれたか。ならばこちらの和平条件を…」

「丁重にお断りさせて頂きます。いい加減理解して下さい、和平は国の問題でありそうゆうのは政府の重鎮が決めることです。一般人の私に言われても困るだけです」

「しかし話を聞いてくれると…」

「ええ、話を聞きました。では私は役目を果たしたので失礼します！」

「あ！ま、待て！！」

「そう言つて止まるのは素直な馬鹿だけです！」

「おい、止まれ！！」

「止まりません」

「止まれと言っている！」

「止まるか、馬鹿　　！！」

城へ続く道へ歩いていくが、後ろから魔族が五月蠅く呼び止め腕を掴まれた。

いい加減、腹が立つてきたんですけど。

厄介事には遭遇しなきゃ駄目だし、変な魔族に絡まれるし。

思えばこの数日間最悪だらけだ。勇者は傍若無人のドSだし師匠は私の人権を無視するしハーレムには無意味に睨まれた。

厄介事を運ぶ魔族にも会うなんて、呪われてるとしか思えない。

そもそも始まりは訳の分からない異世界トリップ。

一体私が何したつて言うの、学校ではちよつと変な普通的女子高校生だったし家では少し変わった家族の一員だった。

けど悪いことなんてした覚え　　ないっけ？

つていやいや！無いよ無い。私は善良な一市民なんだから。

ああ、改めて考えてみたら本当に理不尽な異世界トリップ過ぎるよ。私はその場に足を止めて屈みこむ。

「……………ふえ」

「ん？おいどうし

！？」

魔族が急ぎ足を止めた私の顔を覗きこみ、驚きに顔を染める。
理由は、私の頬を伝う冷たい滴が原因だろう。止め処なく溢れ出して来る涙が頬を濡らしていく。

「……私は……只の一般人……ひつく……なのに……ひつく……どうしたら……いいって……言うんです……か……ひつく」

「あ……すす、すまない！た、確かにお前は勇者の仲間といえ一般人には違いがなかった！！悪かった！私が悪かったから泣き止んでくれ！！」

魔族がおろおろと慌てたように言う言葉に私は僅かに口角を上げた。私は俯いていた顔を勢いよく上げて魔族に視線を合わせると満面の笑みを浮かべた。

「本当にその通りですよ。では今後一切私の前には姿を現さないで下さいね、和平交渉頑張ってください」

私がそう言い放つと魔族は文字通り固まり、呆然とした。

駄目ですね、女の涙くらいで取り乱すなんて。

それも本物の涙じゃないのに。

え？どういう事かって？もちろんドラマでは定番といわれる魔法の涙アイテム、目薬ですよ。

カラーコンタクトとセットのものです。

涙を出すってどういうことか分からないので目薬を使って一芝居打つてみましたがこうもたやすく出来るものなんですね。

さて魔族が正気を取り戻す前に退散しましょう。

私は魔族に挨拶を一方的に告げるとその場から本当に全力疾走で逃走した。

厄介事は勇者だけでお腹いっぱいです。
全速力で走っていると城の門が見えてそこに駆け込む。

「門番さん！リンです、中に入れてください！！」

「……ん？リンさん、どうしました？」

「変な人に絡まれて全速力で逃げてきました」

「そいつは大変だね。けど中には無理、あと10分待つて」

「ど、どうしてですか！？」

「今は真夜中。そして後10分程で夜が明ける」

私はその場で崩れ落ちた。

なんて事だ、まさかの今日まで不眠だと。

そっいえば忘れてしまっていたけどこの世界は夜が凄く短いんだっ
た。

こっちの世界に来てからはすっかり生活リズムがこっち側になつて
て忘れてた。

本来ならこっちの夜は24時間でいうところの5時間。

私はただ魔族と話し込んでいたんだろう。そこまで話し込んだ
つもりはなかったんだけど。

まさか今日は。

「門番さん…、今日って……」

「うん、瞬夜。勇者が現れたから」

「…やっぱりですか」

瞬夜。まさしく名前の通りに瞬間しか夜が訪れない現象
の事。

この現象は自転が早くなることで起きる現象で、星に影響を与える
ほどのエネルギーがない限り起きないのだが勇者が現れた時にそれ
は起こる。

といつても私も見るのは初めてで、本を読破中に知っただけでまさかこんなに早く夜が明けるなんて。

勇者を召喚する際に膨大な魔力を用いたために星に存在する磁気に影響を与えて磁気を変化させた。

磁気を変化させるという事は星にも何かしらの影響を与える事となる。それがこの世界では瞬夜という訳だ。

勇者の召喚後、数日以内に発生するのでこの瞬夜は勇者が現れたという事を世界中に知らしめる事となる。

「で、リンさん。どんな男に絡まれたんですか」

「死ねばいいんじゃないかと思うほどの美形男です」

「なるほど、人相を教えてもらえますか。指名手配しますので」

「ウザイほど長い髪の毛と真っ黒な服です」

「はいはい、分かりました。手配しておきますよ」

私はその後門番さんと話しこみ、10分程話し込んだところで中へ通して貰える事となった。

最も、既に日は上がり睡眠をする時間など無く、私は軽く身だしなみを整えてガウスの部屋へと向かった。

これで48時間寝てないぞ、あはは、夜更かし最長記録更新しちゃったよ。って全然笑えない。

私は体の疲労度と眠気を振り払うようにガウスの部屋の扉を力強く押し開けた。

「師匠！！もう散々です、考えてみれば私がこんな目に遭う理由って何処にも無くないですか!？」

「……お、リン。今取り込み中だ、後にしろ」

「はあ?.....し、シツレイしました……」

ガウスとガウスの奥さんとが熱烈キス中現場に遭遇。

うわーお。朝っぱらから何してやがんだ。

慌てて目を手で覆って、自らの視界を塞ぐ。

何故、ここに奥さんがいるのかはつつこみません。ややこしくなりそうです。まあ、奥さん成分が足りなくて呼んだんでしょう。だから私に入るなと言ったんですか。

「…いきなりお邪魔してしまった事にまずは謝礼します。しかし話を聞いて頂きたかったので師匠の命令を破りました。そしてその話を今からしたいなとか思ったり思わなかったりとかしながらもやはり聞いてもらいたいという意見の方が票数が多かったのでここはとりあえず話を聞いてもらいたいです。ほら人の話を聞く事って大切じゃないですか。聞く事で自分の人生が大きく変わる話とかもあったりするわけですから。あ、別にそう言っただけからって私の話がためになる訳では無いんですが可愛い可愛い弟子の愚痴を聞くのも師匠の仕事だと思っんですよ。ですから早くキスをやめて服を着るのおおおおおおおおお！！」

上半身裸のガウスと全裸なのだろうがシーツを被っている奥さんの濃厚過ぎるキスシーンはアメリカ人じゃあるまいし見てるのは辛いんだよ。

咄嗟に視界を塞いだものの見ちゃったものは見ちゃったんだから！混乱して物凄い支離滅裂な事を言ってしまったが、意味は通じて二人は恐ろしく鈍い動きで服を着始めているのか衣擦れの音がし始めた。

異世界での異文化をこうゆうところで痛感してしまうなあ。

「リン、目を開けていいぞ」

ガウスから声がかかったので私は覆う手を外す。

2人は軽い緩めの着物を羽織り、素肌は胸元以外は隠れる姿となっ

た。

胸元を隠せよ、そこ隠さなきゃ駄目でしょうが。

「ごめんなさいね、リンちゃん。刺激の強い所を見せちゃったわね」

ガウスの奥さん

イリアさんが苦笑を浮かべながら言う。

相変わらずガウスと同年代というのに20代にしか見えないんですけど。

艶々してる肌とスタイルが良すぎでしょう。

見た目は大人しめな方なのにキスシーンを見られても平然と対応するって凄いよなあ。

これがデキル女ってやつかな？

「いえ、お久しぶりです。イリアさん。いきなり叫び声などを上げてしまつて申し訳ございませんでした」

「いいえ。それよりも聞いているわ。勇者の仲間になつたつて。大丈夫？」

「大丈夫と見栄を張りたいのですが流石に今回は少し出来そうにありません。すみません」

「いいのよ。むしろそれが普通だわ、いきなり勇者の仲間になんて大変すぎるもの」

ああ、ここに天使がいる。

こんな状況になつて初めて優しい言葉を受けた。

「ありがとうございます。イリアさん。…あ、そうそう知つてましたか？師匠つてこの前の夜にこっそりと何処かへ出かけてたんです。どうも女の人と会つてる会つてるみたいで」

「なッ！？リンー！！」

「…女の…人？それ本当なの、リンちゃん？」

「はい、女の人と会う約束があるってバツチリ聞きましたから！」

「ば…ッ！…ち、違うぞ、イリア！！た、確かに女だが娘だ！！娘、リリースとだ！！！」

「ふ…ふふ…。浮気現場の言い訳に娘を使うなんて……………最ッ低！！！」

イリアさんの右拳がガウスの頬にクリーンヒット。

ガウスは首が変な方向に向いて倒れた。

私は根に持つタイプなんです。日頃の恨みを思い知りなさい。

ちなみにガウスが最後に叫んだリリースは言葉通りのガウスとイリアさんの一人娘。

イリアさん似のおっとり清楚系美人でガウスが溺愛する女の人。
嘘はついていませんよ。

「もう！しばらくは家へ帰ってこないで！！反省するまで許しませんから！リンちゃん、悪いけど私は帰ります！！！」

イリアさんは力強く扉を開いて出て行った。

さて、私はどうしようか。ガウスはイリアさんの攻撃で気絶中ですし久しぶりに食堂へ行こう。

そういえばご飯を最近食べた記憶が無いぞ、おかしいな。

私は倒れたガウスを放置したまま部屋を出ると、食堂へ向かった。

食堂は値段が安く美味しいものばかり取り揃えてあるのでいつも満員状態なのだが今は早朝でまだ人もまばらなはず！

案の定、食堂は人がガラガラで私は朝食セットを頼んだ。

朝食セットは小さめのパンに味の薄いスープの食事で僅か300Lなのだ。

運ばれてきた固いパンを頬張りながら私はぼんやりと空を眺める。
まだ少し薄明かりが照らす程度の空は世界遺産に登録してもいいよ
うな美しさを放つ。

紫色の雲に眩しい陽のコラボレーションは最高だと思う。

と当初は思っていたが今では見飽きてしまった。どうも感動し続ける事は無理みたいだ。

「……もう帰れないのかなあ」

最近、よく唇からこんな言葉が零れ落ちてしまう事がある。

流石に半年間も帰れなければ帰る方法すら難しいとなると堪える。

魔王の大切な物なんて書いてあったけどそれが何かも分からない上にそう簡単に取りれるものではないと思うからかな。

まずあの本に書いてある事が正しいのかも分からないし。

考えるほど不安になっていくなあ、私の心。

「リン！」

いきなり耳元で声が響く。

私は驚いて椅子から転げ落ちた。

な、何だ！何が起きた！？

「お前はいつになったら訓練場に来るんだ、とつくに時間過ぎてるんだが」

視界に入っただのは不機嫌そうに目を細める美形

勇者。

いつの間に近くに来てた！？こいつ！！

「い、いきなり驚かさないでよ！！心臓が止まるかと思ったじゃない！！！」

途端、勇者の顔が驚きが変わったかと思うと喜びの入り混じったよ
うな笑みに変えた。

何だその笑みは。 まさか私、混乱してて忘れてたけど敬語使わずに素で話しちゃった？
うわ、最悪。

「ふーん。敬語が素ではない訳か。いい事を知ったな」

「……………確かに素ではありませんがこれが基本^{デフォルト}状態です」

「あ、戻った」

「黙れ、馬鹿！」

「あ、また戻った」

「五月蠅いです！！」

「おー。また敬語だ」

「……………ッ！！」

その後も小一時間からかわれ続け、挙句の果てには食堂のおばちゃんから追い出されてしまいしぶしぶ訓練場に歩いていった。

第七話：魔族の話（後書き）

くその頃の魔族く

「女って…ああなのか…？」

人間不信に陥りかけていました。

第八話：旅立ちとデスルーレット（前書き）

空気を読まない連中〃魔族

第八話：旅立ちとデスルーレット

静寂の漂う訓練場。

訓練場に着いた私が目にしたのはただ驚きだけだった。

「……勇者のくせに地獄絵図を作るとは」

視界に映るのは勇者を中央に倒れる兵士の数々。

どうしたら 僅か30秒で兵士50人を倒せるんだよ。

訓練場に着いた瞬間に突然襲い掛かってきた兵士を勇者は驚きもせず、近くに立てかけてあった木刀で薙ぎ払っていった。

その剣さばきは騎士団面々でも構わず圧倒し、襲う兵士に涼しい顔をして勇者は打ち倒した。

剣術をかじつてるとは聞いたがここまでとなると師範か家元かと疑いたくなる。

しかしこれだけの剣術に召喚魔法が入ってくるとなると勇者の体は大丈夫なんだろうか。

まあ、私が言えた事では無いけど流石に不安だ。

「まったくいきなり襲ってくるとか無いだろう」

その割には凄い冷静に対処してましたね、貴方。

勇者が木刀に着いた返り血を振り払いながら私に近づいてくる。

返り血？あ、よく見たら何故か一人だけぼろぼろになつてる血まみれの兵士が。

他の兵士は打撲とかで終わってるのにあの兵士だけ怪我だらけなんですけど。

何故だろうね。

「お疲れ様でした。流石は勇者の名に恥じぬ豪腕っぷりで」

「…確かに剣術を習っているからこのくらいはいけると踏んだんだがそれでも傷を1つ位は負うと思っていた。それなのに……何故か体の動きがしやすい……？体が思うように動きすぎる。これは異世界のオブションか何かなのか？」

「……多分そうだと思いますよ。言語も普通に出来ているでしょう？それは召喚陣に仕組まれた言語変換の魔法です」

「ふーん。やっぱり魔法は便利だな。俺は使えないのか？」

「分かりません。使えるとは思いますが魔力を感じられないんです」

同じ異世界人だというのに驚いた点はたくさんあった。

まずはその美貌と性格。

どっちも色々とあり得ないんだけどね、一番驚いたのが魔力を持っているいなかったこと。

少しコツを掴むと見習いであれど他人の魔力を感じ取る事ができる。すると魔力のある人 とうかこの世界の人は誰しも少な

からず持っているんだけど魔力の波動を感じられる。

しかし勇者は魔力を持っていない。空っぽ。

けど対照的に私には魔力がそこそこある。ガウスにも匹敵するほどの量を持っているからもっと訓練すれば上級魔法も使えると言われた。

同じ世界の住人なのにどうしてこうも違うんだろうね。同じ世界の住人なはずなのに違う世界の住人みたい。

「残念だな、異世界と言えば魔法が憧れなのに！」

「…そうなんですか？」

分かるよ、その気持ち！私はこの世界に来て魔法が使えたときキラが崩壊しそうなほどに喜んだもん！

やっぱり架空の存在であつた魔法には憧れを抱くよね。

「元の世界では魔法じゃなくて科学が発達してたからな。科学も魔法みたいなものだったがやっぱり魔法は懂れるからな」

ふと唐突に勇者は純粹な笑みのみを顔に浮かべる。

こんな顔も出来るんじゃない。勇者。

「…使えるといいですね。頑張つて特訓すればきつと使えますよ！」

何の思惑も無い、只私も純粹な笑みを顔に浮かべて勇者に向けて言う。

すると勇者は途端に顔を赤くさせて片手で顔を隠すように顔を覆いこんだ。

え、どうした。

「えっと…どうかされましたか？」

勇者の近くに寄つて顔を覗き込む。

「…何でもないからとりあえず離れる」

「あ、はい。分かりました」

「…離れすぎ」

勇者から3メートルほど離れると今度は手招き。
どうゆうこと？

「…とりあえずこれからどうするんですか。兵士を薙ぎ倒しちゃつて訓練場にはもう用がありませんが」

「皇帝に呼ばれてる。訓練終わったら来いって、仲間はまだ来てるらしい」

「まさかそれって私も行かなきゃならないパターンですかね？」
「ああ、来い」

冷え切った私の右手を勇者が迷う事無く掴む。
勇者の手は暖かくて私の右手も暖まっていくな。
何で冬なのに勇者の手が暖かいのは不思議だけど。

「手… あったかいですね」

「お前が冷たすぎるだけだろう」

「いやあ、この寒さではこれが当たり前だと思っんですけど」

「確かに冷え込むな」

廊下に入っても風が吹きぬけ構造なので外と寒さは全く変わらない。
とゆうか勇者、手でこれだけあったかいなら体はカイロ化してるんじゃないだろうか。

何気に薄着なのに。

廊下で足を進めるたびに寒さが体を突き刺すから結構私の体は冷え込んでいる。

こうゆう時は皇帝に呼ばれて良かったと思ってしまう。

玉座の間には魔法士が数人構えて部屋を暖める。

おかげで玉座の間のみは城の中で唯一暖かい。

そう思いながら長く続く廊下を歩いていると一人の侍女に遭遇。

私はその姿を見ると、思いつきり嫌な顔をした。

侍女はこちらに気づいたようでこちらに寄ってきた。

「あら、お久しぶり。リンさん。相変わらずの平凡顔ね、見ても何の得にもならないわ」

「じゃあ見ないで貰えますか？ アンジュさん」

目の前に現れた嫌味ったらしい侍女は、キツイ薔薇の香りを放ち濃

すぎる化粧は見て嫌悪感を抱く。

薔薇も適量つけばいいのに、いつも会うたびに香水を2プッシュ押してる上に歌舞伎みたいなメイク。

家が伯爵家である彼女は花嫁修業で侍女を務める皇女つきの侍女、アンジュ。

髪を紺色に染め、瞳はギラギラと茶色が鈍い光を放つ。

何かと私に構って嫌味や言いがかりをつけてくるので苦手な人だ。

「ふん。私だって見たくないわよ、貴方が視界に入るんでしょう。入ってこないで頂戴」

「被害妄想も大概にして下さい。見たら話しかけずに無視すれば済む話でしょう？」

「生意気！どこの出か分からない平民のくせに！」

「平民と分かってるんですからどこの出か分からないなんて付けられませんよ。花嫁修業よりも言語の勉強をなさったらいかがですか？」
「~~~~~ツツ！！生意気だし失礼だわ！！ごめんあそばせ！！」

アンジュは激昂すると私の足を踏んで去っていった。

高いヒールでも履いているのかダメージがでかい。

しかも小指とか狙っているのか？

私は平静を装って再び歩き出す。勇者は心底不思議そうな顔だった。これが平民と貴族の差別ですよ。

「さっきのは？」

「皇女つきの侍女です。貴族至上主義者なので何かと平民に文句を付けるんですよ」

「…よく腹が立たないな」

「貴族に逆らえば問答無用で打ち首ですから」

「…さっき思いつき反論してたけど？」

「あれは正論を言ったまでです、それを理由に打ち首となるのは理

不尽というものです」

「…なるほど」

「納得をいただけたようで何よりですがこれがこの国の現状です。同じ人でありながら生まれで人を判断する、最も醜い蛮行ですね」

「……………」

「…失礼、忘れてください。今のはただの平民の愚痴だと思ってください。それと着きました、玉座の間です」

大きく重厚な鉄の扉の前に立つのは2度目だろうが威圧感が凄すぎる。

鉄に威圧されるのもどうかと思うけど。

扉は独りでに開き、中から暖気が漏れてくる。

ふわりと包むような風が冬の寒さを払ってくれているようで暖かい。扉が開ききると、中に入り皇帝とのご対面。

中には案の定皇帝とハーレム軍団がいて、こちら側に視線を向けた。

「来たか、勇者。早速で悪いが深刻な知らせがある」

皇帝の瞳が細められ、その奥にある瞳に真剣さが揺らめく。

こんな皇帝の目を見るのは勇者召喚を行うと決意したとき以来だ。思わず息を呑む。

「魔族が…動き始めた」

戦慄が背筋に走る。

今まで動かずに攻防一体だった魔族がついに動いた。頭にあの城下で出会った魔族の姿が浮かび上がる。

和平交渉するんじゃないかったのか、あの馬鹿魔族！

それとも諦めて本気で落としに来たのか？

どっちにしる魔族が動いたのなら勇者が動かざるを余儀なくされた。

修行が始まったばかりなのに、出番速すぎでしょう。

まあ、勇者なら修行が無くてもそこそこはいけると思いますがそれでも魔族に対抗できるのか？

「…それは、私に動け…」と言う事ですね」

演技が入って勇者の口調が変わる。

ただセツトの笑顔だけが無く、無表情である。

「動いて…くれるか？あまりにも早すぎる初陣に」

皇帝の額から冷や汗がひと筋流れる。

「…私は、そのために呼ばれたはずですよ。皇帝に問われるまでもありません」

ドラマにでも出てきそうにないかつこよ過ぎる台詞に私の口から笑みが零れる。

自信満々っていう感じだけど策でもあるのかな。
精々後衛で見守らせて貰います。

「……ありがとう、勇者。では準備をしてくれ、出立は正午からだ！」

相変わらず早すぎる！！正午からって、あと3時間なんですけど！？
この人余裕もって行動って言葉知らないの！？誰か皇帝の頭にその言葉を叩き込んで！！リアルに！！

「なお3日後辺りに勇者の正式発表を予定していたが、時間が無いため省く。国民に知られず活動して貰う事となるため魔族のいる国

の辺境に辿り着くまでに村や町の恩賞は受けられないだろう。一応王族の証を渡しておく、困った事があれば大抵の事は回避できるだろうが基本王族は民に嫌われている。民には通用しないと考えるれ」

言っちゃったよ、皇帝。嫌われてるって自覚はあったんだ。

この皇帝自身が民に嫌われてるわけではなくて嫌われてたのは前皇帝らしいんだよね。

美形だったけど女遊びが悪くて酒癖もあつたらしくて独裁者っぽくて民に嫌われていたらしい。

クーデターを起こされて今の皇帝が皇位に着いたらしいけど前皇帝の直子だったから子供も独裁政治を行うんじゃないかと民は懸念している。

それとは裏腹に皇帝は政治能力に長けているし民のことを思うからいい人なんだけど。

「：分かりました。では準備を致します。集合は門の前にしてそのまま出立します」

「見送りが出来ないのは心苦しいが頑張ってくれ。財力と装備の方はこちらで用意する」

「分かりました。では皆さん、3時間後に門の前をお願いします」

勇者が無表情から演技の笑顔に切り替えてハーレムを見ると、ハーレムは顔を赤らめて部屋から退室した。

私も一礼して部屋を退室しようとする側控えていた重臣に引き止められた。

「これを渡しておく。勇者の制御装置だ、暴走したら止める」

彼の言った言葉に不思議なくらい何とも思わなかった。

あ、そうなんだ。くらいにしか。
確かにあれだけ禁術魔法を詰め込んだら不安だよ。未知の魔法を試したわけだし。

「……何故私に」

「君以外勇者に惚れこんでるようだからだ。この制御装置は勇者の体の動きを完全に止めることができる、もしあいつらが使ってみる勇者に貞操の危機が訪れるぞ」

「あ、そこは考えてあげてるんですね。分かりました、いいですよ」
「…頼んだ」

重臣が去ると私は受け取った制御装置を見つめた。
多分、これから勇者に渡す装備とかの中にこれの受信機があって体の動きを止めるのかな。

腕輪のような形をするその制御装置は中央に紋様が刻まれていてそこに魔力を流せば起動する仕掛けのようだ。

私は右手首に嵌め込むと何も無かったような顔で部屋を退室した。
だってこれ、使う事があるなんて考えられないよ。

あの勇者が禁術ごときに負けるはずが無いと思うから。

私はそのまま城を出て門に向かった。

用意するものなんて無いし、私物なんていらぬものばかりだしね。けどこれから旅をするんだから必要なものは揃えとかないとね。

さびしい懐が一気にさびしさを通り越して冷え切りそうだ。

城下に着くと、暗い路地を通り曲がり角の突き当たりであまり知られていない寂びたお店に入っていく。

そこは旅人専用のお店。暗い路地奥にあるもんだから知る人ぞ知るといふものだ。

ここの店主は少し変わった人だが気が合うので付き合いを続けている。

「こんにちはー。ザクロさん、リンです」

「おや、リンちゃんじゃあないかい。ほほ、何のご用だい？」

鐘を鳴らして入った店内には埃を被った商品に煤だらけの床が広がり、カウンターには店主である老婆が佇む。

「旅に出る事になりました。必要な商品を下さい」

「おや？リンちゃん、旅に出るのかい？まあそう。ならウチの商品を買うんだね、いいよ。今回の御代は2000L、ただし！この私に勝つ事ができたらね！」

そう言つてザクロが取り出したのは6本のナイフ。

この内の1つには猛毒が塗られていてもし刺されば即お陀仏となる。何故こんなものを取り出したかというと、これこそがザクロが変人認定された原因だからだ。

ザクロは良質な旅装備を破格の安さで提供してくれる代わりに自ら考案したゲームをクリアしなければ渡さないというゲーム好き。

しかも決まつてザクロの考案するゲームは死と隣り合わせの危険なゲーム、本人曰くスリルを求めてなのだそうだ。

けれど本当に死ぬわけではなくて死ぬばザクロが生き返らせてくれるというもの。それでも死ぬほどの痛みを味わう事となるが。

人を生き返らすことなんて出来はしないが、あらかじめゲーム自体に手を打つてあるため心配は無用という。

「今回は名付けて『デスルーレット』！見たとおりこの6本のナイフの中には毒が塗られているよ。それを箱の中に入れて分からなくする。それからこの穴からナイフを取り出していき、自分にさすのさ！ああ安心おし、ナイフはゴム製だから痛くないよ、ただ毒の塗られたナイフは真正正銘の鉄製だけだね！さあ…やるかい？」

「愚問ですね。やらないなんて言う訳ないでしょう。それにこれを

3回ほどやって未だ無敗の私ですよ？」

「ほっほっほ、じゃあスタートだね。リンちゃんお先にどうぞ？」

ザクロははの中にナイフを入れると箱を差し出してきた。

私は箱の穴に手を入れて探る、これに勝てば本来10万はくだらない品が2000で手に入る。

手で探り、指で中のナイフを叩いてみたりしても全て金属音が響く。魔法で五感の反応を狂わせているらしい。

最初に触ったナイフを掴みだすと箱から取り出して迷い無く自分の腹に突き刺す。

するとナイフは私の腹に刺さっていく
事無くグニヤリと曲がった。

「勝ちですね。では次、ザクロさん」

「やっぱり初戦は成功かね。まあ、そうじゃないと面白く無いがね。そうでなきゃ……私が3回も負けたことが情けなくなっちまう」

「今回も勝たせて貰いますね」

「ほほ。私が見すみす4回も華を持たせると思うかい！？これで終わりだよ！！えいさ ！！」

結果 、良い勝負になる事無く初めの一回で毒付きを引き当てたザクロの負けで勝負は決した。

「では私が勝ちましたので商品を包んでください」

「……ぐふッ。な、何故また……細工しておいたというのに……！」

「いいから早く商品を包んでくださいよ。今度はもっと面白いゲー

ムを考案してから挑むんですね」

ザクロは毒で体力が限界に近いのか息を切らしながら商品を包み始める。

ザクロが箱に細工をしていたのは毎回の事なので分かっていた。いつもはその細工を外してザクロを負けさせるのだが今回は逆に仕掛けを利用して自分は安全な物を選びザクロに毒つきを選ばせた。

えげつない？馬鹿言わないで下さいよ。最初に仕掛けたのは向こうです。

ちなみに箱の仕掛けは極単純なもので音の違いです。

全て金属音に聞こえるように細工してありましたが私が金属の音を見分けられないはずありません。

僅かにトーンの高い金属音とゴム製の似せた鈍い金属音で私を騙す事なんて出来ませんよ。

ザクロは狡賢いから自分には五感遮断魔法を使わずに触って確かめると思ったので魔法の上乗せをして金属をゴムに変えてゴムを金属に変えました。

普通は金属の方が数が多くなってしまったから疑いますけど一番安全なゴムに変わった金属を選ばざるを得ませんよね。

「包み終わったよ。旅、気をつけるんだね」

「ありがとうございます。さようなら、ザクロさん」

「怪我しないようにね」

重い荷物を抱えて私は城の門へと一足速く向かった。

第八話：旅立ちとデスルーレット（後書き）

正体の掴めない勇者と主人公。

二人が近づく時に謎は明らかになる。

第九話・見習い、一人旅の決意（前書き）

旧友登場。

第九話：見習い、一人旅の決意

「リンちゃん!!」

城の門へと続く石畳の上を重い荷物を持って歩いている途中で唐突に私の名前が城下に響き渡る。

私は手に抱えた荷物越しに前を見る。

すると視界に入ったのは汗だけで息を切らす一人の少女。忘れる事なんてできないその顔は少し黒色に染まり、そばかすが鼻の頭に広がっている。

陽の光で脱色した薄い茶色の髪は私よりも少し濃い。向けられる黄色の瞳は何かを伝えたがってるような瞳だ。

私は荷物を石畳の上に降ろして向かいあい、微笑む。

「…どうしたの？ トト」

敬語を使わずに普段の私の口調で話す。

トトは私が声を発すると急に目に涙を溢れさせる。

溢れた涙は目だけに収まりきらずに頬の上を滴り落ちる。

「……ここを出てくつて、本当…なの？」

トトの瞳は既に聞かなくても確信してる。私がここを出て行くという事を。

多分ザクロから聞いたんだろう。あの人はお喋り好きだから。

「…うん。行かなくちゃ駄目みたい」

私は緩みそうな涙腺を唇を強く噛む事で押さえつける。

トトはこちらに来て初めて友達になってくれた人でありながら恩人でもある。

そんな彼女と別れる事が辛いわけではない。

「もう…会えない？」

「そんな訳ないよ！」

「嘘、つかなくていいよ。リンちゃん…帰る方法を見つけたんでしょ…？」

トトの顔が涙で濡れて、声も掠れ始める。

トトと会ったのは私がこちらに来てすぐの事。

1ヶ月かけて草原を抜けて体力が限界に近かった私に食事や水をくれたり街にいられるようにしてくれた。

そして私が異世界人である事を知っている唯一の友達。

孤独だった私に光をくれた。

帰りたいとは思っていたが彼女とは別れたくないという思いもあった。

「…分からないけど、手がかりは見つけたよ」

「……………そっか」

「…でも帰れるって分かったわけじゃないよ！だから…！」

「いいよ、リンちゃん。私の事心配してくれてありがとう」

「トト…！」

「異世界に帰っても私の事忘れないで欲しいな！バイバイ、リンちゃん…！」

「トト…！」

光る滴を零しながら走り去るトトの姿を止められずに私はその場で固まる。

馬鹿だ、私。

元の世界に帰る覚悟があつたならこの事も分かつてた筈なのに。
後悔してる、自分がいる。

「トト」

トトの消えた裏路地を見つめてその場に立ち尽くす。

これで良かったのかと心の中で葛藤するがそんな物は意味が無い。
けれど少なくともトトを傷つけてしまう理由にはならなかった。

最近では会ってなかったけれどそれでもこちらに来てからは心の支えとなってくれたし、私の一番の理解者だった。

勇者に無理やり仲間になれたとはいえ、断りきれなかったのは私だし魔王が帰る方法を持っていると分かってからは拒む事無く仲間になる事を受け入れていた。

結局は自分の事しか考えてなかった。

「…馬鹿みたい。勇者に…仲間になってくれと言われたから仕方なくだとか言つて結局は自分の為じゃない。トトの友人ぶつてつたって結局は自分が帰る為にトトを利用してただじゃない」

今頃気づくなんて最悪としか言いようが無い。

私は、荷物を持って踵を返し広場へと向かった。

こんな気持ちで勇者と旅に出るなんて気が乗らない。

広場に着くと、ベンチに腰を下ろし大きな大樹をボーッと見つめる。
さわさわと風が舞い、私の髪を揺らす。

これから、どうしようか。

何食わぬ顔で勇者の言った集合場所へ向かつて元の世界に帰る？それともバックれて城下で過ごしながら違う帰る方法を探す？
それとも。

私は広場の時計台を確認して門へと走り始めた。

今の時間はまだ11時。

誰も門の前になんていないだろう。

息を切らして門の前に辿り着くと、すっかり顔見知りな門番に話しかける。

「こんにちは、門番さん。また会いましたね」

「おや、リンさん。こんにちは。今日も城下へ？」

「…いえ、今日から旅に出るんです」

「あれ、そうなんですか。寂しくなるなあ」

「ふふ、それで少しお願いがあるんです」

「何です？」

「ここに勇者一行が集まるはずなので勇者に言伝を」

「……ん、いいよ。何でかは聞かない事にする、何かあったらしい顔してるしね」

「ありがとうございます。では」

その時風が葉を運び、頬を撫でる。

「…分かった。伝えておくよ、恐れ多いけどね」

「すみません。ではさよなら、門番さん」

「君に神のご加護があらんことを」

私は門番に言伝を頼むと街の依頼屋ギルドと呼ばれる所へ向かった。

依頼屋 通称ギルドと呼ばれ、その名の通り依頼を頼んだりこなしたりする場所である。

世界各地に存在し、冒険者や旅人は絶対に加入するこの世界では定番の店。

私がこの店に行く理由はただ1つ。

私は、『一人で旅をする』ことを決めた。

これなら勇者を利用しなくても済むし、そうゆう戒めを感じる必要

も無い。

初めからこれを選んでれば良かったんだ。

出来ればトトにもう一度会って話したいけど、もう正午まで一時間切った。

勇者よりも先に旅に出ないとあの勇者のことだから色々と言われそうだ。

「ギルド…か。縁の無いものだと思っていたけど」

ギルドは旅をするなら加入は欠かせない。

旅のためのサポートももらえるし、何より依頼をこなす事でお金を稼げる。

私は城下で一番目立つと思われるレンガ造りの建物の扉を開けた。

すると、中はお酒の匂いで充満している上に男の奇声や叫び声が上がっていた。

どうやら依頼の祝勝会でもやっているらしい、嫌な時に来てしまった。

けれどその喧騒もあつという間に静まる。

多分場違いな女が入ってきたからだろう。

普通、女は旅をせず家で夫の帰りを待つという古いしきたりが根付いているらしくこうゆう所に来る女は大抵自殺に来るものだという言つとくけど死ぬ気なんてないですよ。

私は集まる視線をもともせず業務全般を行うカウンターへと向かう。

（おい、何で女が…？）

（自殺か？まだわっけえのに何があつたんだ）

（ありゃあ王宮の制服じゃねえか？大方良いとこのお嬢様が家出つて事じゃないか）

（ああ、ありそうだな。じゃあ無謀なお嬢様がこの世界で生き残らねえのに5000Lかけるぜ！）

（俺は10000Lでいいぜ！）

（ひゅー。面白そうだな）

言いたい放題の後ろはとりあえず放って置こう。

私はカウンターの受付嬢に加入希望を申し出る。

「加入希望ですね、分かりました。加入の際の注意事項の説明は御必要ですか？」

「お願いします」

「ギルドでは依頼がランク分けされ、簡単な仕事からE→Sとなります。初心者の方は初めはEランクとされてEランクの依頼しか受けられませんが成績を上げていくことで高レベルの依頼を受けられるようになっていきます。しかし途中で依頼を断念するときは成績が下がりますのでご注意ください。なお、依頼遂行中に死亡された場合自己責任となりますのでご了承下さい。これらが主な注意事項です」

「分かりました。加入を希望します」

「承知しました、ではこちらのシートに記入事項をお書き下さい」

渡されたシートに名前と年齢だけを書く。

本当にこれだけでいいのかと思っただが、名前と年齢しか書く欄が無い。

私書き終えたシートを返すと受付嬢は透明なカードを取り出した。ガラスみたいに透き通って見当たる限り汚れが1つも無い。

「こちらはギルドカードというものです。ギルドに居る際に必ず必要なものです。まずこちらで血を一滴垂らしてください」

血？

差し出されたのはマチ針。これを指に刺せと？
数秒固まってゆっくりと人差し指に突き刺す。

自分で自分を傷つけるという事が無いから未知の事で怖いんですけど。

ぷすりと指に針が突き刺さると、チクリとした痛みと共に血が一滴
透明なカードの上に滴り落ちる。

すると透明なカードが淡く発光して文字が浮かび上がってくる。

おお、これがファンタジー！

「文字が浮かび上がりましたか？」

「あ、はい。…ってあれ？貴方には…」

「はい、見えません。これは特殊な素材で作られていまして血を持つご本人の許可が無ければ他人は見る事ができません。ちなみに他人に見せたいときは願っていたければ」

「そうなんですか。…これで加入は済んだんですか？」

「はい、もう依頼をこなしてもらっても、旅に出て頂いても結構ですよ」

チラリとギルド内の時計を見てみるともう11時30分を超えていた。

のんびりしている暇はないらしい。

ザクロの所で買った商品の中には地図もあるし、一先ずは街の外に出よう。

勇者が出るのと反対の方向で、会うのは気まず過ぎる。

「旅に出ます。南の方向に街はありますか？」

「そちらなら、音楽都市『ルーメン』が。ちなみにここは首都『セトルブルク』と言われています。意外と皆さん、知らないんですよ。知ってましたか？」

「知りませんでした。ありがとうございます」

これで当面の目的は決まった。

魔王を倒せる情報を探しながら旅をして行こう。

そういえば、他の街へ行くのは初めてだ。考えてみればこの世界の地理なんて魔物のいた草原かここぐらいだし。

そう考えると少しわくわくする旅だ。

私は重い荷物を抱えなおしてギルドを後にした。

後ろでバタリと扉が閉まる音を確認すると、手元にあるギルドカードを見てみた。

透明なカードに黒い文字が浮かび上がっていて、色々小さな文字で書いてある。

『名前：リン＝ヒョード（15）

ギルドランク：E

二つ名：

素性：不明』

素性は確かに不明だけれどこれだと怪しげな感じに見える。
ん？まだ何か裏に書いてある。

『異世界の気を纏いし純粹なる影』

全く意味不明の文が。

異世界人だけどさ、影って何？

これでも学校では明るいキャラで通ってたわ！

家柄はそれほど明るくないけど。

私はギルドカードをポケットに突っ込むとザクロの所で買った旅用マントを取り出して羽織る。

黒色のマントで着心地はそれほど。

着てみるとあつという間に旅人が怪しげな不審者となった。多分後者。

そのまま早歩きで街の出口まで歩いていき、門番に話を通す。

「すみません。ルーメンに行きたいんですが」

「身分証明書」

「ギルドカードでいけませんか？」

「ギルドカード？駄目駄目、ほとんど何も書いて無いじゃない」

「じゃあ、どうすれば……」

「持っていないなら駄目だね。まだあんた子供だろ、家帰りな」

「家なんてありません」

「……あす、すまん……」

「いいですよ。それよりも通して貰えませんか？」

ねだるような声音で言いながら、腰に手を回してナイフに手を回す。通して貰えないなら強行突破しかない、ごめんなさい。

「駄目だつて。こつちも規則だから！」

その瞬間、ナイフを抜いて門番の頭を狙って振り下ろした。

そして肉に刺さる変な感触が

無い？

「危ないな、お前。今の速度、俺にですら見えなかったぞ」

ナイフが弾き飛ばされ、目の前にあるのは少し焼けた肌の色。

少し目線を上げると、さらりとした長めの黒色の髪が目に入り、その奥にある顔は整い、紫色の瞳がぱくりしている。

一番目にいったのが端整な顔立ちではなく、と、虎耳？みたいなモノが頭に生えていた。

目線を下げればふわふわそうな縞模様の尻尾が浮いている。

この驚き要素満載の今、思うことはただ1つ。

「萌え要素まで出してきやがって平凡に対する嫌味か!!美形がぁ!!」

ありったけの力を込めて目の前の男を叩いた。

美形に会うとろくな目に遭わない。最近学んだ異世界教訓です。会ったら逃げるべし。

私は男の頬に赤い手形の跡をつけると、全速力で逃げた。

重い荷物が凄く憎い。これのせいで速さと体力が急激に下がっていき、後ろを見てみるとさっきの男が凄いい剣幕で追い掛けてきていた。女に殴られた事がショックだったのか、アイツ!?

そこは見逃せよ馬鹿あ!!

スピードの出ない私は男にすぐに追いつかれ、捕まる。

「ハッ…何ッで…逃げる…?」

「追いかけられたら…普通逃げます…よ!」

「お前が…逃げる…からだろうが!」

「何なんですか…一体!少し殺っちゃおうって思っただけじゃないですか!」

「いや、十分犯罪だからな。それは」

「はッ。犯罪なんてやってこそ!法は破るためにあるんです!」

「悪い事は言わん。今すぐ足を洗え、お前みたいな少年が人殺しなんてやるな」

今、こいつ何て言った?

「…………少年?」

「ん?ああ、すまん。青年にしておいてやる。お前ぐらいの年だと大人びたくなるよな」

訂正になってませんよ。

「……です」

「は？」

「女だ、この節穴男があああ！！」

男の両方の頬に綺麗な赤い手形がくつきりついた。

第九話：見習い、一人旅の決意（後書き）

早くも勇者が物語から退場して違う新キャラ登場してしまいました…。

（退場させる気はさらさらありませんが…）
逆ハ－展開になりそうな予感です。

第十話・見習いの国内脱出（前書き）

勇者は物語からしばらく退場して貰います。
ごめんよ、勇者。

第十話：見習いの国内脱出

「ほら、食べる」

目の前に差し出されるキャンディを受け取ると、口の中に転がし始める。

甘い味がじんわりと口の中に広がり、気分が落ち着く。

「で、何があつたんだ。一体」

目の前の美形虎男は、どうも獣人と呼ばれる種族みたいで見た目どおり獣と人間の特徴を持つ種族らしい。

失礼発言をぶちかましたこの男の名前はリカルド・ベラフォルトと言うらしく、首都にはある目的があつて来たらしい。

さつきから『らしい』しか言ってない。だって怪しさ満点じゃん。

失礼発言後、謝られたら色々と激昂してせきとめてたものが溢れ出して最終的に泣いてしまった失態を犯した私は、連れられるままに広場に来た。

泣いたというか目が潤っただけだが、泣きそうになっちゃった。

そして、今に至る。

「…色々と耐え切れない事が一度に起こったので国外逃亡をしようとしてました」

ざっくり省いて事実を述べる。

こうゆう時はちゃんと話とかないと怪しまれる上にもつと絡まれる。とりあえず時間が本当にやばいから逃げたい。

するとリカルドは目を細めて怪訝そうな顔をして見せた。

「だからって門番を殺そうとするか？」

「切羽詰ってたんですよ。時間がもう無いので失礼します！」

黒いフードを被ったまま広場を出ようとした。

けど腕を掴まれて止められる。

最近ほんつとに多い、止められる事。

他人の行動を制限するなよ。

「まだ話は終わってない。未遂とはいえ罪を犯そうとしたんだ、悪
いが騎士団にちゃんとその所を教えてもらえ」

そう言つて城の門の方に足を進め始めるリカルド。もちろん私の腕
を掴んだままで。

ちよつと待て！そつち勇者、勇者いるから！！

それに騎士団つて！？補導されるってことでしょ！前科なんて持ち
たく無いよ！

「ちょッ…！放して…下さい…！」

「まだ見た所、お前は子供だ。軽く注意を受けるくらいで済ませて
貰える」

「ッ…！そういう問題じゃ無いんです…よ…！」

「前科は付けて貰わないように俺からもお願いしてやる。就職が難
しくなるだろうしな」

「そういう問題でもありませんッ…てば！」

「こら、大人しくしろ！」

腕を振りほどこうと暴れまくり、逃げようとするが出来ない。

いつもの私ならこんな事無駄だと分かって何か策を考えるだろうが
今はそんな余裕が無い。

改めて思うと凄いな、いつもの私。

しかし暴れまくっていると掴む本人は対策をするもので、両腕を完全にホールド。

こいつ腹立つわああ!!

「放してくださいってば、お願いですから!騎士団へ行くならせめてもう少し時間を置いてからがいいんです!!」

「訳が分からん。いつ行ったって変わらんだろう」

「変わります!凄く変わりますから!!」

「はあ…何でそこまでして時間にこだわる?」

「今、門の前は危険なんです!!」

「……ったく。俺もそこまで懇願されてまで連れてくつてのは気が引けるから今はやめて置いてやる。だがちゃんと行くんだよな?」

「はい!勿論です!」

「…分かった、じゃあどつかで暇を潰すぞ」

「あ、ありがとうございます…」

リカルドが体の向きを変えたのに安堵して、全身の力を抜く。

こ、これが九死に一生を得たって事かな?大げさだけど。

「どこ行く?」

「…出来れば裏路地で」

「……人気の無い場所で俺を殺す気ではないよな?」

「さあ、どうでしょう?」

「……まじか?」

「嘘です。…人目につきたくないんですよ」

「わ、分かった。なら…行くか」

国外に出られなかったのは計算外だった。が別に勇者が出てくまで街にいればいいだけだ。

どうせ仲間の1人が来なくても出立してくれるだろう。

そこまで律儀な男ではなさそうだし。

連れて行かれるままに裏路地へ行くと、気にせずにもその場に座り込む。

フードを被っているからこれなら誰も私と気づかないだろう。

そんな私を怪訝そうな顔で見つめる男もいるが。

「何してるんだ？」

「…座ってるんですよ。安心してください、ちゃんと騎士団には行きますから。…行って良いですよ、何か用事があるんでしょう？」

「あることには…あるが、用事って程でも無いからな…」

するとリカルドは隣に座り込み始める。

あゝあ、ヤバイこれ。首を突っ込まれるタイプのフラグだ。

厄介事はごめん、何としてでもここから去らせないと。

「…何してるんですか？」

「んゝいや、何となく…？」

「聞かれても知りませんよ。早く立ち去ったらいかがですか？」

「…お前、放って置くと何かしでかしそうな予感がするんだよな」

「余計なお世話です。いいから放って置いてください」

「…そうだな、フード取ったら立ち去ってやる」

「はあ？」

「まだ素顔見せて貰ってないだろ。折角知り合っただから顔くらい見せろ」

「はは、平凡顔を見て得すると思えませんよ。それとも貴方は平凡を見て嘲笑いたいタイプですか？」

「は？何言ってるんだ、良いから取れ」

嫌な笑いを浮かべながらフードを取ろうと迫るリカルドに殺意を覚えたのは無理が無い。

これ以上絡まれないためにもフードを取った方が良いでしょうが、従うのが何となく癪に触る。

「嫌です！良いからさっさと立ち去ってくださいよ！これ以上絡まないで下さい！」

「悪いが俺は天邪鬼でな。やるなといわれる事はやるタイプだ」

「最低ですね！」

「何とでも言え、良いから取れ」

「触るな馬鹿、とりあえず死んでくださいその耳と尻尾を筆ってから」

「…やっぱ言うな、お前の言葉って心の急所に寸分狂わず刺さる」

「言われたくなければ消えてください」

リカルドは私のフードを掴んで取ろうとするが私はそれを押さえ込み一進一退の攻防。

それが続き、うんざりしてきた私は半ばヤケになってフードを思いっきり剥ぎ取る。

「…これで、満足ですか？」

視界に流れ込む茶色の髪が腰の高さにまで滑り落ち、今まで視界を覆っていた影が消え去る。

目の前のリカルドはいきなり攻防を止めた私に驚いているのか余りの平凡顔に驚いているのか目を見開いている。

しかし改めてみるとリカルドは本当に平凡とかけ離れている顔をしている。

それはリカルドに限らず、勇者もあの魔族もそうだがこちらの世界に来てからはむしろ平凡に会うことが少ない。

勇者は俺様系のクール美男子である魔族は天然で静けさを漂わせる美青年。

リカルドは虎耳と尻尾を付けたもっふもふな要素入りの野性味を感じさせる風貌に引き締まった体躯。

胸元の開いた服に少し緩みを持つズボンが男の魅力を引き出している気がする。

それだというのに平凡顔を見て喜ぶ残念なイケメンだったとは。

フードを取ってしばらくの静けさが訪れ、そろそろいたたまれなくなってきた。

「あの、何とか言ってください。何を期待していたのかは分かりませんが無言って一番傷つくんですよ」

そう言うとりカルドはようやく言葉を紡ぎ始めた。

「す、すまん。いや、やっぱ…女だったんだな…」と

「ふふ、殺されたいんですか？」

「いや、謝る。謝るからその手に持つ石を置いてくれ」

「冗談ですって。全くもう…冗談の通じない人ですね」

「現実に殺そうとした場面を見てるからな」

「ですからあれは急いでたんです。それに門番なんて職です、死の覚悟くらい持ってやって頂かないと」

「そこまで重くない仕事だったと思うんだが？」

「そうでしたっけ？」

「断言する」

リカルドは呆れたように溜め息をつくと唐突に話題を切り替えてきた。

「…1つ聞きたいんだが…」

「はい？」

「お前って、城の人間で間違いないよな？」

「……どこでそれを」

「悪いがこうして会ったのは偶然じゃ無いんだ。城から出てきたお前を付けていた」

「……なるほど？何故ですか」

「……俺がここに来たのは勇者に会うためなんだ」

その瞬間、動揺から心臓の動悸が早まる。

まさか城から出て勇者の名がついてくるとは。

「極秘に勇者の召喚を耳にし、確認しに来た。本物なら言って伝えたい事がある。お前が勇者を知っているなら会わせて欲しい」

「……今って何時でしょうか？」

「いや、話を逸らさず聞いてくれ。で、どうなんだ？」

「何時か答えてくれたら良いですよ」

「……もうすぐ12時を回る」

「なら城門へ向かってください。勇者に会えます」

「……は！？本当か！！」

「大声出さなくとも本当です。早くしないと勇者に会えなくなってしまうですよ」

「な、何でそんな事を知ってる？」

「極秘情報です。さあ、早く向かってください。ぐずぐずしていると勇者に逃げられますよ」

「あ、ああ！分かった、ありがとな。あ、後で礼をするからここで待ってる！」

「はいはい」

リカルドが物凄い勢いで門の方へ駆けていくと、またフードを被り直して座り込んだ。

ここで国外に出てもいいが迂闊には動きたくない。万が一の事を考えて。

だから、正午が完全に過ぎるまではここにいる。
そう考えて3分くらいじっとしていた。

けど、何もしないというのも余りに暇だから、どうせならギルドへ
行って簡単な仕事でもこなそう。

うろろる動き回らなければきつと大丈夫。

僅か3分で『動かない』ということを放棄した。

私は腰を上げて荷物を再び持つ。

それにしても荷物が邪魔だな。まだ開封してなかったや。

大きな紙袋から旅一式セットをどさどさと出す。

出てきたのは様々なもので、ある一枚の紙切れまで出てきた。手に
取ると書いてあったのはこれらの説明。

『大容量異次元ポーチ：何でも入るよ！

調理セット：これは欠かせないね！

黒マント：これを被れば旅人氣分

武器セット：ザクロご用達、短剣10本・針石2個

携帯食料：干し肉

煙球：リンちゃん用に作つといたよ』

最後の文字が手書きで書かれている。

これらは日本人としては少ないような気もするけどしょうがないよ
ね。

ひとまずポーチを腰に巻きつけ、調理セットや携帯食料、煙球を放
り込む。

あり得ない容量がすっぽりとポーチの中に収まり、思わず感嘆する。
最後に武器セットをマントの下に忍ばせる。

私の武器はこちらに来てからはすっかり変わり、一番使いやすい短
剣を使用している。

そしてたまに使うのがこの針石。
軽く叩いたりすると針状に割れ、硬度は鉄並なので武器として用い

れる。

所詮は針だから本当にたまにだが。

私は大きかった荷物がすっかり無くなりスッキリしたので何か安堵する。

それから裏路地を出て、ギルドへ向かおうとする時だった。

突然、黄色い声が城下に響き渡ったのだ。

鼓膜が破れるかと思うほどの女性達の甲高い声にフードの上から耳を押さえつける。

一体、何かかと思い城下を見渡そうとすると後ろから手を急に引かれた。

「へ…？」

「すまん！まさかこんな事になるとは思ってた！！逃げるぞ！」

後ろを振り返るとリカルドが荒く息をしながら、急に走り始めた。
本当に何が起きてるの！？

「ちょ、リカルドさん…！何が…！？」

「後で説明する！とりあえず今は逃げたほうがお前にとっては良さそうだ！！」

「ッ！？まさか…勇者ですか！？」

「そのまさか！お前、あいつに何した！」

「何もしてないと言えは嘘になりますけど大事ななるような事はしてません！」

「お前の言い分は後で聞く！今は逃げないとヤバイだろ！」

リカルドが一旦止まり、私を抱え上げる。

「ふえッ！」

うわーい、憧れのお姫様抱っこだー。

の次にいきなりエレベーターが急に上に上がっていくような気持ち悪い感覚が体を襲う。

リカルドはあり得ないほどの高さまで跳躍し、民家の屋根に上がる。こ、これが獣人…？

「悪いがこのまま行かせてもらうぞー！」

横抱きにされたまま、民家の屋根をリカルドは駆け渡り、街の出口近くにまで来るとまた止まった。

そして、民家の屋根から見ても軽く20メートルは超えてそんな門を見てから私に笑いかける。

「しっかり捕まってるよ」

ま、まさか…！

ぐつと腰をかがめ、次の瞬間リカルドはヒュオっという風の音と共に門よりも高い空に体が浮く。

跳躍の最高点で体が空に留まり、周りは一面青い空のみが広がる。

先には緑茂る森や湖が見え、日本では絶対に見られないような光景が目の前に映りこむ。

普通なら感嘆する程の美景に今は恐怖しかない。

冷たい空気が肌に刺さり、下からは強風が吹き上げる。

そこから一気にフリーフォール。

耳には風斬り音のみが響き、落ちて行く。

下手な高層ビルから飛び降りるよりも怖いと思うダイビングに目を瞑り、リカルドの首にしがみつく。

それが数秒ほど続いた後に突如訪れた衝撃が体を走り抜ける。

地面が抉れるような轟音と共に訪れたのは衝撃と浮遊感が消えた感

覚。

「もう目を開けていいぞ」

リカルドの声がすぐ側で聞こえ、ゆつくりと開けると、視界に映ったのはリカルドの整った顔。

それから逃げるようにして辺りを見回すと、地面がある。それだけだった。

ゆつくりと横抱きから解放され、思わず腰が抜けてその場に座り込む。

こ、怖かった。というかいきなりの事過ぎて何が起きてるのか全く分からなかった。

「いきなりで驚いただろ、悪かったな。だが流石にもたまたしてる余裕は無さそうだったからな」

「い、一体本当に…何なの…？」

「話すのは後って言っただろ、今もこんな風に余裕を持つ暇なんて無いぞ。…こっちはルーメン方面だから、このままルーメンへ向かう。そこに着いたら話す。いいな？」

「わ、分かった…」

分からないけど頷く。

真剣そうな瞳を向けられたら逆らいにくいです。

空中時に取れたフードをリカルドに被せられ、視界にまた影が入り込む。

リカルドに手を繋がれると、音楽都市『ルーメン』の方向へと走り出した。

第十話：見習いの国内脱出（後書き）

状況が分からないまま『ルーメン』に向かう主人公。

感想お待ちします！

第十一話：見習いと傭兵（前書き）

〳 前回のあらすじ

首都を訳の分らないまま出てきた主人公はそのまま音楽都市『ル
ーメン』へと向かう。

第十一話：見習いと傭兵

中央に聳え立つ細長い建物を中心に様々な様式だが明るいい色の装飾が施された建物が並び、絶え間なく音楽が流れている。

見渡す限り、吟遊詩人や音楽隊が街に溢れ音楽を奏でている。

心を穏やかにさせるようなのかな光景、それがこの音楽都市『ルーメン』だった。

そこに辿り着いた私とリカルドは、息を切らしながら奏でられる音楽を聴いていた。

私は引かれるままに走り、すっかり熱を持ってしまった体を冷やすために黒マントを脱いでいる。

下は王城所属の制服のままだったので少し視線を感じる。

王城仕事は王族が嫌われているためかなり嫌われているのでやや視線が冷たい。

私はある程度体が冷めてくると黒マントを再び羽織るがフードだけは外しておく。

ある程度落ち着いたためかりカルドが口を開けた。

「ここがルーメン…か。来るのは初めてだな」

「そうなんですか、私もです」

いかにも音楽を表したような色合いが辺りに溢れている。

淡いピンクを主として黄色や黄緑なども混じっている。

「けど今は普通に観光したいという気持ちがありませんね、とりあえず！何がどうしてこうなったんですか！？」

「俺が聞きたいんだよ！何でこうなった！？」

「知りませんよ！」

「俺も知るか！」

突然追われるように出てきた首都での出来事の把握が出来ないまま、ルーメンに来てしまったので心がどうしても落ち着けられない。

ああ！私らしくない！！

こんな事慣れっこだったはずなのに！状況が分からないなんて日常茶飯事だったのに！

いつの間にか状況が分かるものになってしまってる。

「……とりあえず話し合いしませんか？」

「……そうするか、宿にでも入ろう。勇者の事を公で話してたら捕まりそうだ」

「どうしてですか？」

「勇者なんてまだ正式には発表されていないんだ、それを話してたら怪しまれる」

「……そうですね」

もう、本当に馬鹿だ。頭を捻ればそんな事分かりきってる事実じゃない。

この半年があまりに平和過ぎたのか危険に対しての警戒が疎かになってる。

リカルドもこの街が初めてだったと言っていたのに迷わず宿へと向かっていく。

……はつきり言いましょうか、リカルドって怪しすぎます！

城の人間である私をつけてまでの勇者に面会したかった理由に獣人といえども20メートルを軽く越す跳躍力。

ガウスのスパルタでこの世界で使われる全ての言語と種族の事を頭に叩き込まれたために覚えている。

獣人は人間よりも身体能力は高いものの、20メートルなんて軽く

跳べないしあんな速さで駆ける事も無理だ。

ある1つ

の可能性を除けば。

その1つの可能性はかなり信じたくないので認識を拒否します。

リカルドを怪訝な顔で見つめていると、その視線に気づいたリカルドは私の頭をくしゃりと撫でた。

子ども扱いですか。

「着いたぞ。おい……あゝえっと……」

「名前ですか？そう言えば私はまだ名乗っていませんでしたね。リンです、リン＝ヒヨード」

「……はあゝ、やっぱりかよ」

リカルドは私の名前を聞いた途端、溜め息をつく。

え、失礼じゃないですか？

「……気にすんな。あと俺の事はリドでいい。リカルドってなんか長くて面倒臭いだろ」

「別にそう感じませんがそう言うのでしたらリドさんと呼びます」

「いやだからリドでいい」

「……分かりましたよ、リド」

「出来れば敬語も止めて貰いたいんだがな。他人行儀って好きじゃない」

「そんな事を言われても困りますよ。これが私の普通ですから」

「だけど普通であって素じゃないんだろ？」

「まあ……そうですねが何故それを……」

「ここに来るまでの間、一度だけ敬語が取れてたからな」

「は！？何処で……！」

「門を抜けた後」

「あ、あり得ない……」

確かに大ジャンプの後で放心していたが敬語が抜けていたとは。とゆうかよくそれに気づいたな、こいつ。

「で、敬語外すか？」

「…外さないと言ったら？」

「首都に連れ戻す」

「そこまでしますか!？」

「冗談だがそれに近い事はしてやる」

「そこまで敬語が嫌いですか？」

「ああ、大っ嫌いだな。嫌な思い出しかない」

顔を陰しくさせていうので少し怖いと感じてしまった。

まあ、外してどうかするものじゃないしいんだけど何故かどんどん決心が崩れてく。

敬語を使つてた理由ってあまり世界に未練を残さないために距離を残しておきたかったんだよね。

もしも離れたくないと思うような理由ができる事を恐れて。

そんなの作れるわけないけど元の世界に帰りたくないという甘えは作りたくなかった。

戻りたいというのは本音だけど戻りたくないという気持ちが無いといえは嘘になつてしまふ。正直ご免だと思ふ出来事も向こうでは多々あったしね。

そんな事を考えて使い慣れてなかった敬語を使い始めてたわけだけどもう帰れるとわかったなら大丈夫、帰れるよ。

最後にトトに一目会いたいけど。

「…分かった、もう使う理由は無いに等しくなつた訳だし外す」

「ん、よし。じゃあ宿入るか」

リドが中に入っていくのに着いていき、宿のチェックインを済ます。

大部屋か小部屋が聞かれて迷い無く大部屋と二人して答えたら受付のおばちゃんが少し引いていた。
別にやましい事がある訳では無いし、大部屋の方が話し合いもできる上に料金も安い。当然でしょ？

「じゃあまず確認な」

「うん？」

「お前はリン＝ヒヨード。勇者の仲間の魔法士でいいんだよな」

「正確には魔法士見習いだよ」

「で、今日が出立の日。だな？」

「そうだよ」

「こっからが質問だ。なんでそれにも関わらず国外逃亡を図ろうとしてた？」

「勇者の仲間になりたくなかったの。元々嫌々だったし」

「…勇者の仲間って名誉な事じゃないのか？」

「よく考えてみて、勇者って結局は都合のいい捨て駒。死んでも国は痛くも痒くも無い、また召喚すれば良いだけの存在だよ」

「……まあ、そうゆう考えも無い事は無いが…」

「その考えしかないよ。召喚される前に勇者マニュアルなんてものが配られたくらいだし」

「…まじか」

「うん。勇者の取り入り方や操り方がびっしり。面白いくらいに」

「よくやるもんだな、首都の奴らも」

「勇者も馬鹿そうでは無かったから気づいてるとは思っただけど…」

「勇者が馬鹿だったら世界なんか救えないだろ」

「お人好し馬鹿って事の方。そうゆうのって絶対気づかない鈍感なのが相場なの」

「…そ、そこまで言うか」

「だって本当のことだもん、お人好しは動物を殺したりして心を一々痛めそうだし周りのハーレムの気持ちにも気づかないで良い様に

振り回すの。そうゆうのって大抵は馬鹿」

「し…辛らつだな」

リドが若干引き際に顔を歪める。

地球の物語で語られる勇者は正義感たつぷりのお人好し勇者。敵に人質を捕られたら絶対に反撃できない。

あの勇者様は人質を捕られても迷い無く攻撃しそうだけど…。

「…って話が逸れた。それで？ 一体首都で何があったの？」

「あ、ああ。実はあの後、無事勇者と会うことが出来たんだが

」

リドが気まずそうに首都での出来事を話し出す。

語り出された内容は、少し驚くものだった。

リドが勇者に会いに行くと、4人の美人に囲まれた勇者が居たそうだが物凄く近寄りがたいオーラを出していたらしく話し掛けづらかったらしい。

けど意を決して近づき、私から勇者の事を教えてもらって話したいことがあると伝えた瞬間勇者が凄い剣幕で私の事をリドに問い詰めてきたみたい。

まあ状況も分からないリドは当然混乱し、勇者をとりあえず宥めようとした。

しかし勇者が腰に刺した剣を抜いて迫ってきたため、逃げ出した。その際に勇者が私の事を叫んでいたため、ヤバイと感じたリドは私も連れて首都脱出と言っわけたそうだ。

うん、勇者が分からない。

たかが仲間が1人減ったくらいで取り乱す？ どんだけ仲間に固執してるんですか。

むしろ足手纏いな私にまで変な期待をありがとうございます。

とゆつかリドにはとにかく感謝。首都から脱出させてくれてありが

とう。

「…いや、まじで怖かった。勇者のくせにめっちゃ黒いオーラを出してた」

リドが顔を曇らせる。

見てないけどそんな勇者と会わずに済んで良かった。

「勇者って正義の代名詞で少なくとも悪の代名詞では無かったとは思っただけど…」

「そうだな、もうあれが魔王でいいんじゃないかって思ったからな」

「いや、呼び出した勇者が魔王とかだったら本末転倒でしょ」

「けど勇者っぽいオーラなんて微塵も放ってなかったぞ」

「あ、それは同感かな。なんかもう全体的に黒いもんね」

「勇者というよりかは魔王だな」

リドが感慨深そうに頷きながら話す。

いやどれだけ怖かったのさ、勇者。

「…それで、勇者から逃げて来たまではいいけどこれからどうするの？」

「ん？俺は勇者に結局伝える事を伝えられなかったから勇者にもう一度会わないとな」

「私は情報都市『キープス』に行かないと」

「情報都市？首都の情報量の数百倍もの情報が保管されてるっていう？」

「うん、首都で欲しい情報が見つからなかったから情報都市と呼ばれるほどの街にならあるかなって」

セーブル大公国には、いくつかの街が点在する。

首都『セトルブルク』を中心とした音楽都市『ルーメン』に情報都市『キーパス』の三大都市に加えて小さな町や村が存在する。文化に富んだ国だからこそその三大都市だ。

「何を調べてるのは知らないが見つかるの良いな」

「ありがと。それでさ、キーパスに行くまでに旅資金溜めないといけないんだよね。この街のギルドってどこ？」

「お前ギルドに入ってるのか!？」

「うん、旅人志望だし」

「女のくせによく入るなんて気になったな……」

「そこ、差別は禁止。女であろうと利用できるものは利用すべきだよ」

「であろうとギルドは危険だろ。今すぐ解約して来い」

「リドなら分かるでしょ。旅に危険は付き物だって」

「確かに分かるっちゃあ分かるが、それは男の場合の話だ」

「男は危険を求めて女は危険を求めちゃいけないなんて決まってるんだよ」

「お前の言い分も最もだがこれは暗黙の了解っつーか駄目って決まってるんだ」

「だったらそんな決まりは破るまで」

「……はあ。口論で勝てる気がしねえ」

女の取り得の1つが口だよ？当たり前じゃない。

「それで、ギルドはどこ？」

「……教えるよ。ここは危険な依頼は比較的少ないしな、全部音楽関係が多い」

「詳しいね。この街初めてって言ってたのに」

「……疑ってるか。まあ、当たり前だな」

「うん、けどいいよ。別に興味ないし」

「助かる。こつちも諸々事情があつてな」

「いつかは聞くかもね」

「…お前は人を落とすのが上手いな」

「それ褒め言葉」

にんまり笑つて見せるとリドが呆れたように溜め息をつく。
溜め息はついた数だけ幸せが逃げるんだぞー。

「ギルドはこの街の北西にある」

「ありがと。私は当面お金稼ぎかー。リドは勇者に会いに行くって言うならこつち反対方向だけどいいの？」

「…も、もう少し時間を置く事にする」

「そこまで怖かったの…、勇者？」

「何というか…絶対に避けられない大災害に会いに行くようなものだからな？あれ」

「…まあ、ご愁傷サマ？」

「助けてくれる気は全く無いんだな」

「関係ないからね。私は厄介事には関わらないタイプだから」
「ああ、そうゆうタイプみたいだな」

リドの隠す素性に興味は無いけど知りたいと思わない。
知ってる事は獣人で勇者への伝言を持つてるって事だけ。

後分かるのは腕が立ちそうという事だろうか。

武器なんかは見当たらないけど、手を繋いだときに手のひらの固さが剣を持つ手だった。

おそろくは…大剣？
クレイモア

「ねえ、リド。聞きたいんだけど」

「何だ？」

「リドってさ、もしかして…傭兵？」

この世界で大剣を使うのは傭兵のような世界を又に駆ける戦争屋。軍隊では効率が悪くて使わないし、旅人でも異様に目立つ大剣を使うものはいない。

傭兵はこの世界では結構毛嫌いされている。

金さえ払えば簡単に人を騙す非人道的行為を行う奴等だと。

リドの顔が驚きに染まる。

「なんで…気づいた？」

「あ、本当だったんだ。手だよ、手」

「…手？」

リドが自分の手を見て不思議そうに首を傾げる。

「傭兵の武器に限られる大剣を持つ手の固さだった」

「…お前は分析者か？」
アナライザー

「残念。魔法士見習いだよ」

「そういえばそう言っていたな。で、確かに俺は傭兵だ。騎士団に突き出すか？」

「何でさ？」

「は？何でって…俺は…傭兵だからな」

「悪い事をしたの？」

「いや…してないと言えば、嘘になるが食ってためだし…」

「人は生きるためには破らなければならないルールもある。仕方ない事もあるでしょ」

「破ってはいけないルール、殺人。俺は人を殺してる、犯罪者だ」

「じゃあ軍隊も犯罪者だね」

「そ、それは…違う…だろ」

「どこが？違いなんてほとんど無いよ。あるとすれば軍隊は主にも忠実な戦争屋、傭兵はお金に忠実な戦争屋ってことでしょ」

「確かにそうだが…」

「だから私は選ぶなら傭兵が良い」

「…は？」

私はずっと考えてた事がある。

一人旅を決意したとき、この世界の事を知らない人間がどうまともな情報を手に入れるのか。

書物で大まかな情報を知っていても詳しくは知らないこの世界。騙される事がないなんて言いきれない。

けど私は世界を回る事を決めた。

だから私はこの世界を知る『案内人^{コンダクター}』が欲しい。

世界を回り、世界を知る者が。

「リド」

巻き込んだじゃうかもしれない。

私自身厄介事は嫌いだから悪い事だと思ってる。

けど君が良い。

だから…。

「私に、雇われてください」

私を元の世界に案内して下さい。

第十一話：見習いと傭兵（後書き）

いくつか謎の単語が出て来てしまいました。が説明を次回に回させてもらいます。

第十二話：見習いはギルドへ（前書き）

感想お待ちします。

第十二話：見習いはギルドへ

「…それは、依頼か？」

しばらくの静寂の後、リドの口から言葉が放たれる。
若干声のトーンが落ち、真剣さを醸す。

「うん。……といってもお金は後払いになりそうかな？」

貯金ほんとにピンチなんです。
ギルドで稼ぎつつ渡してくパターンでいかがですか？

「…金さえあれば傭兵は誰であろうが雇われる。勿論俺も金さえ貰えるならお前に雇われてやっても良い。だがその前に聞きたいことがある」

あらら、やっぱり疑われてるかな。

まあ、こんな少女が傭兵雇うなんて聞いた事無いもんね。

傭兵は毛嫌いされている上に雇い料が高いからどこかの貴族かお偉いさんくらいしか雇われない。

それが小娘に雇われるっていうんだから驚くし疑われるよね。

何か秘密があるって。

「何故俺のような者を雇ってまで世界の情報を得ようとする？」

リドの紫色に輝く瞳が細められる。

別にそんな風な眼で見なくとも答えるって。

『元の世界に帰りたいから』

その瞬間、リドの顔が驚きに染まる。

理由は私の話す言語が変わったからだと思う。

ちゃんと理由は話した、『日本語』でだけだね。

悪いけど教えられないんだ。話したりしたら厄介事呼びそうだし。

「い、今の…言葉は…？」

「私の故郷の言語だよ、一応理由は言ったからね」

「は！？いや、ずるいだろ！」

「あらあら、傭兵ともあろう方がこの世界の言語すら把握できてないんですか？」

「何だそのキャラ…」

私のキャラは自由自在に変えられるように訓練されてるんですよー。

だからぶつちやけ自分の本当のキャラを見失ってます。

今の自分を本当の自分にしたいけどね。

「それで、リド。雇われてくれますか？」

「……………分かった」

リドの首が縦に振られ、顔がつい綻ぶ。

これで世界の旅は安心かな。懐はどんどん寂しくなりそうだけど。

「ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

「よろしく、雇い主」

さて、旅の道連れもゲットした事だしお金を稼ぐためにギルドに行きますか。

「じゃちよつとギルド行ってくる」

「は…？今からか？」

「今以外にいつ行くの？ほら、雇われたからにはおとなしく雇い主に従いなさい！」

「ちょ…俺もう寝たいんだが！言っとくけど今日は精神的にも肉体的にも追い込まれてるからな！」

「傭兵だったら気力で頑張れ！」

「無茶振りにも程があるだろうが！」

リドの袖を掴んで下まで引つ張ってくと再び宿屋のおばちゃんに怪訝そうな眼で見つめられた。

いや、何ですか…。

後から知った話で宿屋のおばちゃんは昔恋人にぶった切られ、それ以来カップルに腹が立つようになったらしい。

ギルドの方向に向かい続けてやっとギルドと看板のぶら下る大きな建物が見つかった。

ここも周りの建物と同様、明るい色彩で覆われている。

グラデーシヨンのかかった扉を引き開けて中に入ると、今まで騒いでいたであろう他のギルド加入者が一斉にこちらを見た。

ただし、リドにだ。

（おい、あれリカルド…ベラフォルトじゃないか？）

（まじか！？あの『破壊の黒虎』って呼ばれてる…！隣の小娘は誰だ？）

（俺が知るか。大方…雇い主か？）

（馬鹿いうなよ、あんな小娘が傭兵を雇えるかよ）

（どっかの貴族だろ）

（ああ、納得）

おお、一応雇い主に見えるらしくて安心した。

リドも話を聞くからに有名という事は腕が立つんだな。
…お金大丈夫か、私。

周りのざわめきに聞き耳を立てつつもカウンターに向かうとリドが前に出る。

すると受付嬢は途端に顔を赤らめる。

…受付嬢を誑かすんじゃないやありません、美形めが。

「すまないが音楽関係の依頼を一通り見せてくれ」
「ひゃ、ひゃい！こ、こちらですう！」

噛みまくる受付嬢が出したのは数枚の紙。
どれどれ…。

『題：笛吹きが怪我をした！代わりにやってくれ！！』

依頼人：音楽隊隊長、トム

料金：3000L』

『題：僕には実力が無いみたい…。誰かお手本を見せて

依頼人：歌い手、トム

料金：4000L』

『題：音楽についての素晴らしさを語ってあげるから今すぐ来なさい！』

依頼人：音楽評論家、トム

料金：300L』

…全部依頼人同じ？

やばい、正直関わりたくない人かも…。

私は手に取った3枚の紙を置いて、受付嬢に言った。

「このギルドで一番高額の依頼を見せて！」

言った瞬間、ギルドの空気がピシリと凍りつく。

「……い、一番：高額：？」

「そう！見せて！」

「……ちょ！お前何言ってる！？命知らずにも程があるぞ！」

リドの静止の声を無視して、受付嬢がそろそろと出す紙をひったく
るようになして奪う。

『題：最近丘に住み着いた魔物の退治をお願いします

依頼人：商業人、ガーデン

料金：5億L』

料金高ッ！！

た、確かに高額……。

「これって、Fランクでも受けられるの？」

「え……お受けする気ですか！？ま、魔物ですよ！！」

……魔物。

魔物って……あの地獄の一ヶ月間を味わわせてくれた、修行相手……だ
と思うけど違うのかな。

確かに当初は怖かったけど後半からだんだん追いかけることに
腹が立つてきて自ら挑んでいくという愚行もおかしてたな。
今から思えば何頭トチ狂っちゃってたんだ？

「うん、そう書いてあるね。で、受けて良いの？」

「う、受けてもらえるならとても有難い事ですが……FランクがSラ
ンクに挑戦するなんて聞いた事ありません……」

「リン！いい加減にしろ！魔物に挑むなんて自殺行為もいいところだ！俺達傭兵でもそんな依頼を受けることはまず無い」

「おお、今初めて名前呼んでくれた」

「……ッ。そんな事は今関係無いだろうが！とりあえずこれは駄目だ！」

「人生何事も経験だよ。それにお忘れ？雇い主は私だよ」

「今はこの道の先輩として忠告する！やめろ」

「……ふう、埒が開かないなあ」

リドの必死の止めも聞かず受けようとするがそこまで言われちゃうと流石に気が引けるじゃないか。

魔物が私の考えてる魔物と一緒になのか分からないし。

けどお金を手っ取り早く稼ぐならこの依頼でしょ？

私はゆつくりと懷に手を入れてナイフを二本取り出す。

「分かった。じゃあゲームしよう」

「……ゲーム？」

「そ、私が勝てば依頼を受けて負ければ受けない。リドが勝てば大人しく諦める」

「……それしかお前を止める方法がなさそうだ、受ける」

「ルールは簡単。あそこにいる男の1人に当てたほうが勝ち」

私の言葉を聞いた男達が驚き声を上げて逃げようとする。

けど折角の的をわざわざ逃がす訳が無い。

「『閉錠』
ロック」

ガチャリという音と共にギルドの扉が動かなくなる。

男達は今度はギルド内で逃げ回り始めた、さあフィールドは完成した。

「大丈夫。ナイフに魔法をかけて、標的に当たる際に崩れる脆い物質にした」

「…分かった」

「じゃアリドからお先どうぞ、皆さーん、逃げないと魔法を解いて本当に殺しますよー」

崩れる物質と聞いて安堵していた男達は再び逃げ始める。

割と本気で。

リドは男達に狙いを定めてナイフを思い切り放つ。

風斬り音と共にナイフはギルドの壁に深く崩れないまま刺さった。あんだだけのスピード出してたら脆くても立派な凶器だよ。

うん、人に刺さらなくて良かった。

「じゃアリドの負けって事で、依頼を受け…」

「待て！お前がやってないだろうが！お前も外せば依頼は受けない、だ！」

「まったくもう、我侂だなあ。じゃあはい」

私の手からナイフが消え去り、何処かからこつんと音がする。

音がしたのはギルド内のいる男の頭から。ナイフが脆く崩れた後がそこにはあった。

「な…ッ。嘘、だろ…」

「これで私の勝ち。受付さん、依頼を受けます」

「…ヘッはい！こちらですすー！！」

返答のおかしい受付嬢の持つ紙に受印を押してもらい紙を受け取る。これで依頼人の所へ行けばいい。

「ど、どうやって…」

「種明かしはしないよ。とにかく勝ちを勝ちだから依頼受けるからリドはそれに従ってね」

「お前：最初から勝つように細工したわけじゃ無いよな…」

「私ね、ゲームで負けた事って一度も無いんだよね」

「やっぱりイカサマだったのかよ…」

リドは頭を押さえて私の受け取った紙を見る。

あ、そういえば聞いてない事あった。

「リド、リドの武器ってどこ？」

「武器？持ってるぞ、ここに」

リドは空中に手をひらひらさせる。

…どこぞ。

「空間だよ、俺は好きなときに武器を出し入れできるんだ」

「うわ、まさかの魔剣とか…」

「よく知ってたな。俺のは確かに魔剣だ」

「本で読んだからね」

魔剣、使用者自身の魔力でコーティングされ強化された武器。

魔力を覆わせるので魔法は勿論、威力がすごいと聞く。

ただし使用時は常に魔力を放出しなければいけないのでうつかりしとると衰弱死する。

「そんな事よりも今日はもう宿に戻るぞ。依頼は明日だ」
「うん」

流石に今日は私も疲れたので寝たい。今、昼だけど。
あれ、そういえば最近全然ご飯と睡眠取ってなかったな。
ご飯食べてから寝よう。

「受付さん。美味しいご飯の店って知りませんか？」

「それでしたらここからもう少し先に^{ガストロノマー}美食家が店長を務めるお店がありますよ」

「…美食家？」

「はい、世界的に有名な方です」

ギルドにはいくつかの職業と呼ばれるものが存在し、ギルド加入者はそれに分類される。

分類は、戦士・補助・分析者・専門者・案内人だ。

戦士は言うまでも無く戦いを目的にギルドに来る人。

補助はそんな戦士に着いていく人。

分析者は何かしらの分析や研究をするためにギルドへ来るし、専門者も似たようなもので自分の好きな分野を追求する。

二つの違いは規模。分析者はこの世界全てに対して研究をしたい人だが専門者は1つの事だけ。

美食家は専門者に入る。

最後の案内人は私がリドに頼んだ役割に近い。

世界の全てを知り、導くための職。これは戦士とかに雇われる事が多く、別名、知識保持者とも言われる。

ちなみに私はフリーで職には入っていない。

職登録は強制ではないが入れば得する事もある、ぐらいだ。

「ありがとうございます、行ってみます」

「依頼人は丁度その店が行き着けなのでもしかしたら会えるかもしれませんよ」

受付嬢の言葉を背にギルドの扉を開ける。
リドもお腹が空いてるらしく付いてくるらしい。

「ねえ、リド。勝手に無謀な依頼受けて怒ってる?」

「…雇い主はお前だ。お前の決めた事には従う」

「自我を殺すのも良いけどそんなんじゃ心の無い人形になっちゃうぞ」

「お前が言つと本当になりそうで怖いんだが。……言わせて貰うと怒ってる」

「うんうん、人間素直が一番。けど取りやめる気は無いからね」

「じゃあ何で俺の意見聞いたんだ…」

「本当に嫌そうなら強制はしたくないから」

「いや、一応嫌なんだが…」

「だったらあの時ナイフを私にぶつけて止めるべきだったね、リド」

「…はあ、分かったよ負けだ負け」

ギルドの更に奥にある通りを真っ直ぐ歩いていくと小さくひっそりと立つ建物があった。

音楽都市には合わないグレーの壁に少しヒビが入っている。

だがそんなじんまりとした建物からは美味しそうな匂いが香ってくる。

誘われるようにその建物へ入ると、気前の良さそうな店長が暖かく迎え入れてくれた。

「へい、らっしやい!何にします?」

カウンターと座敷が並ぶ店には人が点々という。

店長が手にお玉と包丁を持ちながら料理を作っている。

とりあえず私とリドはカウンターの隅に座り、メニューを聞いてみる。

返ってきたメニュー内容は、正直分からないものばかりだった。城では出されたモノを適当に食べていたので勿論料理名など知る由も無く適当に選んだ。

「あいよ！『グレグコリットの刺身』ね！」

店長が意気揚々に料理を作り始める。

「は！？グレグコリット！馬鹿、何頼んでる！？」

「え…、駄目なの？」

「…いや、悪い。好みは人それぞれだった。…店主、俺は虎肉のステーキで！」

…あれ、幻聴かな。

今、同族の料理を頼んだぞ、こいつ。

いや、気のせいだよ気のせい。

「虎肉って柔らかくてイケルんだよな」

……幻聴じゃなかった。

「共食いとかが痛まないの…？」

「は、共食い？確かに俺は虎の獣人だが虎なわけじゃ無いぞ。別物だ」

「…そ、そうなんだ。違いがよく分からないけど」

私はその後、大人しく店長の料理さばきを見ていながら自分の料理が運ばれてくるのを待つ。

不気味に体が捻じ曲がり、赤いぎよろぎよろとした目を持った節足動物がさばかれてく姿は中々に気持ち悪い。

しかもジユギョアアとか訳の分からない奇声を発してるし。
殻を綺麗に取り除かれて中身を包丁で取り出される間も奇声を発し
続ける謎の生き物は中身を取り出されるのを拒み触覚で店長の包丁
を真剣白刃取り中。

（うぬ…、今回は意気がいいな。だが…！）

（ジユギギョオエエエ…！）

（この私の包丁に大人しくかかれええ！）

（ジユギギ！？ギョオオ）

ズシャツ

（…ふッ、中々の腕だったぞ。お前の事は忘れんぞ、2秒ほど）

…拒む謎の生き物に店主の包丁が刺さり絶命した謎の生き物は中身
をスライスされて皿に盛られていく。

そして綺麗に盛り付けされたと思ったら店長がそれを持って私の方
に近づいてきた。

え…まさか…。

「はいよ！グレグコリットの刺身お待ちイ！」

さっきの謎の生物がグレグコリットかあああ！！

第十二話：見習いはギルドへ（後書き）

『グレグコリット』

種：節足動物

容姿：捻じれた体と赤い目が特徴。これ生き物？と疑いたくなる。
印象：全体的に気持ち悪い。腐臭が漂う。

第十三話：とりあえずご飯と睡眠を（前書き）

思えば主人公がまともに睡眠を取っていない。
これは非常にまずい。

第十三話：とりあえずご飯と睡眠を

完食しました。ええしましたよ、しましたとも！

何故か緑色だった刺身を！

唯一の救いは味がまあまあもだった事です、臭いは腐臭でしたけど。

食べる為に刺すと青色の液体が噴出しました。あれはハーブのソースだとも思いたい。

しかも絶命したはずなのに飾りとして盛り付けられた中身の無いグレゴリットの目がこちらを向いたのは気のせいだ。

「…中々、キツイ戦いだった」

「お疲れ。グレゴリットの身は傷に効くんだが気持ち悪さから誰も食べない」

「…もう少し早く言ってよ。馬鹿…」

「言ったが聞かなかっただけだろ」

「それも…そうだったかも…」

口の中に緑臭さが広がってまじで気持ち悪い。

店長に水の大盛りを頼んで飲みまくると少しだけ和らいだ。

「…き、今日はもう宿に帰ろうか」

「そうだな、店主！代はここに置いてく」

リドが数枚のコインをカウンターに置くと店を出ようとした。けどその時私は誰かと肩をぶつけてしまい反射的に謝る。

「すみません」

「いや、こっちも悪い。大丈夫か？」

肩をぶつけた人はむさ苦しそうな筋肉盛々のおじさん。
黒い髭を伸ばし、ランニングシャツ一枚。…今、冬って知ってますか？

「よお店主！今日も景気が悪いぜ！つたくあいつらまじでうぜえ！」
「まだ依頼をうけてくれそうなギルド加入者は現れないのか？そっ
ちも大変だな、魔物なんかに住み着かれて」

……………。

「全くだ！依頼金にわざわざ5億も出したってのに！」

……………。

「そう怒るなよ、元はといえば丘を手入れしてなかったお前が悪い
んだろ？」

……………あれ？

「知るか！まさか魔物が住み着くとは思ってなかったんだよ！」
「少し落ち着け、激昂したってどうにもならんぞ、ガーデン！」

依頼主だああああああ！

この筋肉男が依頼主！？よく5億も用意できたな！
まさかの展開だが依頼主というなら丁度良いかもしれない。

私は筋肉男にそろそろと話しかけてみる。

「あの…ガーデンさん、っていうんですか？」

「ん？ああそうだが」

「…実は、ですね…。貴方の依頼を受けましたギルドの者です」

「……は？」

「ですから貴方の依頼を受けましたんです。詳細を教えてくださいませんか？」

「え、つええええ！！？あんたが！？」

「依頼を受けてくれて驚いたのか小娘だと思つて驚いたのかどちらですか？」

「い…いやスマン。どっちもだ…」

「ズバツというタイプですね、嫌いじゃないです。何はともあれ受けましたので詳細の方を教えてくださいませんか？」

「…いや、けどあんた…。……分かった、死んでもこっちは知らんぞ。最近俺の保有する丘の領地に魔物が住み着いたんだ。軍隊でも太刀打ちできない魔物が俺らごとき無理に決まつてるし数が多いんだ。3匹も居やがる。このまま放っておくしかあいつらの対処は厳しい状態だが俺はあそこで利益を得てる事もあつてこのままじゃ経営が成り立たねえんだ」

「魔物が3匹もだと…？」

「リド、キツイ？」

「…かなりな」

「じゃあリドは宿で待つてていいよ。私が何とかするから」

「はあ！？」

「依頼主さん、依頼は明日にしますね。今日は色んなことがあつたので」

「あ、ああ…」

「行くよ、リド」

驚きでものが言えないのか素直に引かれていくリド。

店を出て宿の部屋に戻ると、正気をやっと取り戻したリドが物凄い勢いで迫ってきた。

リドって感情の切り替えが激しいな。

「何言ってるんだ、お前！今日が初対面だがお前は非常識が過ぎてるって事がよく分かった！まずはお前に必要なのはお金よりも常識だ！」

「何で師匠と言いリドと言い私の事を非常識扱いするのさ！」

「非常識だからに決まってるだろ！意味の分からない行動に言動、全てがだ！」

くッ…、それは中々傷つくぞ…。

だが言い負かされてるのだけは頂けない！

「ふッ…、リドだって…！」

「非常識が形を現してるようなのがお前だろうが！」

…………ふふ…ふ…。

撃沈。私は地面に臥せた。

中々にキツイ止めじゃないか、リド。

「…………ッ、そこまで言わなくなたって良いじゃん。リドの馬鹿ー！」

捨て台詞を吐き捨ててベッドに潜り込む。

固めのベッドからは太陽の香りがする。

「あ…す、すまん。言い過ぎた…」

「……そりゃちよつとは常識が無いと言われないことも無いけど、気にしてるのに」

「…悪かったな、いくら何でもきつかった」

「……本当に反省してる？」

「ああ」

「じゃあ良いよ。もう寝よっか」

ベッドから顔を出してベッドをぼふぼふと叩く。

「そうだな。……ってその手は何だ？」

「え、一緒に寝るんでしょ？ここ大部屋だからベッド1つしかないもん」

「…俺は床でいい」

「何で？別に寝てる時に襲ったりしないよ」

「……その心配は普通反対だろ」

「全く…、そこまで心配？分かったよ、ナイフも針も抜いとくから安心してよ」

「だから論点が違う…。良いから俺は床で良い」

「床なんかで寝て風邪ひいたらどうするの？明日は依頼があるんだよ、大人しくベッドで寝なさい」

「……ッはあ。分かった…」

リドがゆっくりとベッドに横になる。

私も潜って眠りに落ちるのを待つ。

リドとの間があるので隙間が出来て背中が冷える。リドは向こう向いてるし。

そこまで襲われるのが心配か、傭兵も大変だね。

「リド」

「…何だ」

「魔物ってさ、強いのか？」

「…精鋭された軍隊30人ほどでやっと1匹仕留められるほどだ」

まさかの衝撃事実。

魔物どれだけ強いんですか。

じゃあ私が戦ったあれは魔物じゃないのかな？

「私が知ってる魔物は赤い目に黒い鱗が特徴だったんだけど」

「それで合ってる、そいつが魔物だ」

…あれえ？

つかしいな、確かに強かったけど倒せれたぞ？

魔物なんですよ、あの凶暴な獣。

「俺でも1匹倒すのが限界だ」

…どうしよう、30匹相手取った事もあったぞ。

その時は結構魔物との戦いに慣れ始めてたから普通に切り傷を数個受けて勝てた。

…どうしよう、リドと話が噛み合わない！

「だから…3匹は未知の挑戦だ。腕が鳴る」

クククつと細く笑う声が響く。

この人、戦闘狂だったのかー！！

自分の限界を超えていくタイプだったとは…。

伸びそうだね、リド。

「そ、そう…。頑張れ」

「ああ。…そうだ、聞いておきたいんだが…」

「うん？」

「お前は魔法士と言っていたが俺には戦士のようにも思える。どちらだ？」

「今は魔法士だけど昔はいうところの戦士だったよ」

「そうか、じゃあ自分の身だけは守れるな？」

「うん、大丈夫」

「ならいい。もう寝るぞ、リン」

「お休み、…68時間ぶりの睡眠…」

「…待て、今何て言った？」

「ん？68時間…」

「お前はどんだけ寝てないんだ…」

「勇者が来てから。ずっと…かな」

「…今日はゆっくり寝ろよ」

「ありがとお。…あ、そういえばリド。さっきの事なんだけど」

「さっきの事？」

「私が襲うつて話。襲いたくは無いけど私時々無意識で人を絞め殺すみたいでちよつと保障が怪しくなってきたかも」

「…嘘だろ」

「冗談なら良かったのにね」

昔、弟と雷の日なんかは一緒に寝る事が多かった。

ある日弟と一緒に寝てて朝起きたら弟が私を恨みがましく見てきた。聞くと、夜中にいきなり抱きついてきてあり得ないほどの力で腰を締めたらしい。

弟曰く死ぬ寸前だった。

それ以来弟とは一緒に寝なくなった。

「だからもし私が抱きついたら振りほどいた方がいいよ」

「抱きつくのか！？」

「みたい。弟は精神的にも肉体的にも殺されそうだったって」

「…き、気をつける」

「うん、よろしく」

そういえばガウスに今までのお礼を言っすべてなかったな。

厳しかったけどこの世界で生きる術すべを授けてくれたひとだった。

トト、ごめんね。もう一度だけで良かったから会いたかった。
城下の皆、挨拶もせずに出てきちゃったけど今までありがとう。
貴方達が居たから希望を失わずに済んだ。
そして、勇者。色々ごめん。
また元の世界で会いたいね。

私はそんな思いを馳せながら私は深い眠りへと誘^{いざな}われていった。

突然、小鳥の鳴き声と共に眩しい光が布団に射し込む。

どうやら朝が来たらしい。ついさっき寝たと思っていたのに。

私は上半身を起こして体を伸ばす。

うん、疲れが一気に吹っ飛んだ。

隣を見ると、リドがまだ寝ていた。

少し顔を覗き込むと規則正しい息遣いが聞こえる。

…とゆうか寝顔までまじ美形だな。

まるで精巧に作られた人形のようにでもう逆に人間じゃないと疑いたくなる位整っている。

頭の上に生えている耳は触り心地が良さそうでつい触ってしまった。すると予想通りふわふわで気持ち良い。くせになりそう…。

「…ん…っ…」

リドの唇から声が漏れ、起きたのかと思って更に顔を覗き込む。覗き込んだ顔から瞼が開きリドの紫色の瞳が現れる。

「……………ッ…！うおわあああああ！！」

リドは眠そうな瞼を一瞬にしてかつ開き、大声を上げてベッドから転げ落ちる。

…何してるの？

「…大丈夫？おはよう」

「お、お前…。朝から何してる…」

「何って…、顔覗いてただけだよ？」

「心臓に悪いから止める…」

「はい」

床に転げ落ちたリドは起き上がり髪を適当に整える。

リドの髪は若干つんつんしてる。実際さっきの耳と一緒に触ってみたらさらさらで柔らかかったけど。

私も髪を整えるといつもどおり後ろに流す。

それを見ていたリドがいきなり私の髪を触りだした。

「…どうしたの？」

「いや、結構良い髪質なのにどうしてもっとアレンジしないんだ？
妹はしょっちゅう変えてたぞ」

「妹いるんだ。髪は面倒臭いからね、流しておく方が楽」

「……ちよつと貸せ」

「ほえ？」

ベッドに座らされてリドが私の髪を束ね始める。

髪を結ぶなんて小学校の三つ編み以来かな。

リドは私の髪を上まで持っていき束ねる。つまりポニーテールだ。
その際にリドがふと腕を止めた。

「…リン、お前髪染めてるのか？」

心臓が思わず跳ねる。

何ではれた！？

「…別に」

「本当の事言え。魔力がかかってる」

「染めてるよ。いいじゃん、オシャレだよ」

「…オシャレで確かに髪を染める事はあると聞いたがわざわざ地味な茶色に染めるなんて聞いたことも無いぞ」

「オシャレはオリジナリティが必要なんだよ」

「…そうか」

納得はしていないような声色。

そこまで疑うなよ、私だって結構気に入ってた黒を捨ててまでこの色に変えたんだから。

だから羨ましいよ、黒であれる君が。

「そついうリドは珍しい黒色だよね」

「よく言われる」

「黒って羨ましい。私も黒が良かったな」

「じゃあ何で黒にしなかった？」

「だって私の緑の目と会わないかなと思って」

「そんな事無いだろ」

チャツチャツと手際よくポニーテールに纏め終わるとリドが良しと満足したように頷いた。

いつもは腰まである髪が今日は肩を少し越す辺り。

自分の髪を1房救って見つめる。

魔法のかけられた私の髪は綺麗な茶色を醸し出す。

「じゃあ今日は依頼だね。早速丘に行ってみようよ」

「待て、準備も無しに行く気か？」

「…」

「……とりあえず腹ごしらえだ」

「賛成」

私は黒マントを羽織り、腰にポーチを付けてナイフと針を忍ばせる。
これがこれからの基本だ。^{デフォルテ}

ちなみに王宮の制服は動き易いように切り裂いた。
袖とスカートの丈を切り落とし、スカートの前に切り込みを入れた。
意外と際どくなつてしまい足が大幅に見えるようになってしまった。
もはや王宮の制服だった面影はほとんど無い。

私とリドは宿の料理店に行つて小さなパンとサラダを食べた。
こっちの朝食は基本少なめ。

朝はあまり食べず程々というのがこちらの考え方のようだ。
朝食を食べ終え、チェックアウトすると、ついに丘へ行く事になつた。
ちなみに場所はルーメンから少し離れた街道脇。
馬車を利用する事となり、馬車を馬飼いから借りる。料金200L、
意外とお得。

ゴトゴトと揺れる馬車の中、リドはずっと険しい表情を崩さないで
居る。

…なんとなく話しかけづらい。
それにしても初で難しい依頼を受けた当の私は全く緊張感無し。
慣れてるしね。

「リド緊張気味だね」

「…当たり前だ。むしろ何故お前は緊張しない」

「前衛は任せた！」

「……俺を盾にする気か」

「私も戦うよ、けどギルド初心者だもん」

「…ちよつとしばらく黙つてくれないか？」

「了解」

その後はずっと沈黙する私とリドだったが、雰囲気は全く違った。

リドは険しい表情でピリピリとした雰囲気を発する一方で私は魔法で炎を灯したりして遊んでいた。
リドに水をかけたら滅茶苦茶怒られました。

第十三話：とりあえずご飯と睡眠を（後書き）

くるくる。

「わゝ、リド見て」

「…少しは緊張しろおお!!」

「おおう…いきなり大声出さないでよ、驚くでしょ」

「いいか、今から俺達は戦場に行くんだ。そんな呑気だと死ぬぞ」

「イエッサー」

「馬鹿にしてるのか？」

「滅相もございません」

とかあつたとか無かつたとか…。

第十四話：ギルド依頼

荒れ果てた荒野に佇み、武器を持つ2人の男女。

その2人の視線の先には黒い鱗で覆われギラギラとした赤い瞳を彼らに向ける魔物。

狼のような体躯は威圧感を滲み出し、見ているだけで足がすくむようだ。

そんな2人の恐怖や戸惑いを感じ取ったのか、先手必勝とばかりに魔物は2人の喉元にかぶりつき一瞬にして2人を絶命させてしまった。

その後、絶命した2人の体を余す事無くじつくりと貪り、2人の骨のみが今も荒野に残っているような。

めでたしめでたし…。

「全然めでたくないんだが！」

……あら、リドさん。突然馬車の中で大声を出したりしてどうしたんです？

全く黙ってると言った本人が喋るなんて駄目ですねえ。

「いきなりそんな話をし始めて黙っていれば何だその不吉な話は！？」

「嫌だな、冗談だって。ちょっとあまりに雰囲気がつまらなかったから明るくしようと思って」

「逆に下がる」

「そこは大人の寛容な嘘で上がると言わないと子供は拗ねるよ。子供心が分かんない人はこれだから……」

「訳の分からない理由で人を貶すな。それに子供という年じゃ無い

だろう」

「何歳に見える？」

「……………16？」

「おお、惜しい。15だよ」

「15か、まあ年相応だな…」

「そういえばリドは？」

「俺？俺は18だ」

「そんな感じだね。にしても年頃の男女が一緒とか……………殺し合いが起きそうだね！」

「待てええ！！何故そんな答えが出たああ！！」

「だって年頃っていうのは最も感情が表に出やすくなる時なんだよ、殺人衝動とか起きない？」

「起きるかあ！！少し黙れ、動く非常識！」

「あ、酷い。今のは常識なのに馬鹿にした」

「何処が、何処が常識！？」

「家訓に『年頃になったら男子と離れてね、パパに殺人衝動が起きちゃうゾ』って」

「それ単なる親馬鹿だろうが」

ゴトゴトからガタガタに揺れが変わった馬車内に会話が弾みだす。

それはすぐに収まることとなったが。

そんな時、ふと馬車の揺れが止まる。

「お客さん、着きましたよ。丘でさあ」

御者席から馬飼いの声が聞こえる。

私は馬車から飛び降りて、荒れ果てた丘を目の前にする。

木は枯れて地面には草一本すら生えず大地が剥き出しになっている。ひどく殺風景な寂しい光景だった。

「酷い有様だな…。流石にこれだけ手入れをしていなければ魔物たちにとっては格好の的だろう」

リドが同じ風景を目にして顔を歪ませる。

私は丘の全貌を見極めるためによく目を凝らす。

そうすると、丘の上で蠢く黒い影があった。間違いない、魔物だ。

「リド、丘の上見て」

「……なるほど、確かに3匹だ」

丘の上から私達を見下ろす黒い影が姿を現す。

丁度3対の赤い目がこちらを威嚇するように鋭く見つめてくる。

「警告…してるね」

「だな、だが後には引けないぞ」

「分かってるよ。こうゆう時は先手必勝？」

「疑問系にするな、断定にしろ！」

リドが勢いを持って丘の上まで駆け上る。

それと同時に空間がヒビが入ったかのように割れ始め中からリドの背を軽く越すような大剣が出てくる。

紫色に光り輝く大剣は派手な装飾こそは無いものの、美しいと思えるような細工だった。

リドはそれを掴んで魔物たちに突撃する。

考え無しに突っ込んでったけど大丈夫か、あの人。けど心配は杞憂と化し、3匹の魔物相手に大剣1つで渡り合っている。

魔物3匹に上手く剣を使いこなして傷を負わせている。しかし魔物も負けじと自らの持つ爪や牙でリドに襲い掛かる。

おお、これ私必要ないんじゃない？

魔物が強いって聞いてたから色々と不安要素もあったけど、これならリド1人でも良いかも。

とか考えていたらリドから突然怒鳴るような声がかかった。

「リン、馬鹿！何ボーっとしてる！？」

リドが叫ぶのと同時にリドと相対していた魔物のうちの1匹が私に襲い掛かってきた。

いつの間にこっちに飛んできた、こいつ…。

飛んできた魔物は人間からでも奪ったのか黒い布を体中に巻きつけ、動物なのかすらも分からない。

けど赤い目と黒い肌だけはしっかりと視認できる。まるでそれ以外は隠しているかのように。

四つん這いになって行動する真っ黒い何か、赤い目だけが黒とは違うただ1つの色。

さっきは油断しすぎていたから腕にかすり傷を負う。

「乙女の体に傷を付けるなんて最低ですね。
しますよ？」

殺

自然と使い慣れてしまった癖のせいか敬語が出てくる。

やっぱり素の話し方と言っても本当の自分が分からないんじゃないかと素にはなれないかぁ。

少し威圧するようにして放った言葉は魔物にもしっかりと伝わったようで、魔物は後ずさる。

「さて、1匹で私にかかってくるなんて本当に良い度胸ですよ。その度胸に免じて相手してあげますよ。さぁ、どうぞ。かかってくるてください」

両手を広げて無防備さをアピールする。

しかし魔物は中々腹を決めずに襲い掛かってこない。

当たり前か、殺されるのが分かかって襲い掛かるはず無いよね。

知性は一応存在するみたいで安心した。

…最初は殺すのに必死でそんな事知る由も無かったけど。
来た頃

「…知性があるなら話も通じますよね。今すぐお仲間を引いて消えてください。そうしたら見逃します」

話し合いが通じるならここで引いてくれると助かるけど物事はそう上手くはいかないかな。

「グルウウウウウ…！」

ほら、やっぱり。

退く気は無いみたい。

「……じゃ、お別れです」

ナイフを取り出して、魔物に躊躇無く投げる。

すると避けれる事もできる速度であるのに関わらず、魔物は避けずにナイフを体で受けた。

魔物の体からは、黒い血が流れ落ち地面を黒く染めていく。

正直避けなかった事に驚いた。何で死を分かかって避けなかった？

「……………ジニ…ダイ…。ジニタイ…」

地面に倒れ込む魔物は人間の言葉を発した。

…知性があるから人間の言葉を喋れるのか？

けど、それでは退かなかったのは何故なんだろう。

私は既にこと切れる寸前の魔物に近づく。

「少し失礼します」

私は魔物の体を覆う黒い布を引き剥がす。

すると驚きなど超えてしまっほどの事が目の前で起こる。

黒い布を剥がすと、魔物の肉体が一瞬にして砂と化したのだ。

残ったのは私の手に残る黒い布。………一体、何で。

魔物は未だに解明されていない謎の生命体として有名だがまさか黒い布を剥がすだけで砂と化すなんてありえるの？

「正に…ファンタジー…だね」

「リン!!」

その時、リドの声が聞こえる。

声のした方向には、黒い血に塗れたリドが立っていた。

…2匹、倒したんだ。

「怪我は…無いか？」

「見てのとおり。リドは？」

「黒い血のおかげで分かん」

「そりゃそうだ」

「そんな事よりもう1匹は!？」

「逃げたよ」

「は…、逃げた？」

「うん、逃げた」

「…なんで」

「ナイフを錯乱して投げまくってたら偶然当たって逃げていったよ」

「…そうか、とにかく無事ならいいんだ」

「ありがとっ、じゃあこれで依頼達成だしギルドに行こっ」

「そうだな…」

私は黒い布を静かに燃やし、風で砂を吹き飛ばす。
只の小娘が魔物を倒したなんて知られない方が良く。
余計な詮索はされたくない。
だから、疑わないで。リド。

リドの視線が突き刺さるように痛い。

絶対、疑ってる目だ。

馬車内ではずっとそんな目が刺さる刺さる。

「…なあ、リン」

「……何？」

「おかしくないか？」

「…何が？」

「魔物が簡単に逃げるなんて事が、だよ」

…ああ、やっぱり疑ってるんだね。

「ナイフが刺さりまくったからじゃない？」

「俺の相手をした魔物は俺の剣が何回も刺さっても中々倒れなかったぞ」

「…偶然急所に当たったんだよ」

「俺は急所に刺しまくってたが？おかしいな」

「……はつきり言っていていいよ。何が言いたいのか？」

「お前は本当に只の魔法士見習いなのかって事だよ」

「それ以外に何があると？」

「そうだな……。人間以上の何か？」

「こんなか弱い女の子が人間では無いと？」

「考えてみればおかしい事だらけだろ。一回の見習いが勇者の仲間

だったり非常識だったりな」

「それは全て成り行きだってー」

「成り行きで人間はそこまでズレれるモンなのか？」

「うわーお。今のは本気で傷ついたぞお」

「だったらもつと悲しそうな顔しろ」

これは…ピンチだろうか。

まさか出会って2日目で勘付きはじめるとかイベント展開早すぎでしょ。

もつと順序を踏んでからそうゆうのは勘付きなさい、1ヶ月くらい後にやっと気づき始めるくらいがベストだよ。

まったく…ちゃんと台本を呼んでから出直しな。

「まあまあ、そんな事はどうでも良いじゃないか。2人とも無事だったんだからさ」

「どうでも良くない。話をはぐらかすな」

「どうしても私の事を詮索する気ならリドの事から教えてよ。色々と隠してるでしょ？」

「なっ…」

「ね、お互い秘密事があるでしょ？てゆうか出会って2日で秘密を言うつてというのが無理でしょ」

「そ…れもそうだったな」

「納得して貰えて何よりだよ、じゃこれからはお互いの詮索は無しで」

「…分かった」

そっか、考えてみればまだリドと会って2日だった。

なんか物凄く濃い2日を送ったせいか長く一緒にいる気がする。

うん、思えば濃い2日だった。

とゆうか勇者が来てからは濃すぎる日の連発だな。

それまでは平穏だったというのに……。
ま、勇者に会うのはこれでもう無いかな。

（今頃勇者はお姉さま方とウハウハだろうなー、ハーレムを生で見
てみたかった……）

気づけば未練あったな……、とてつもなくどうでもいいものが。

私はそのまま馬車の揺れが心地よくてうたた寝を

出来なかった。

突然馬車が大きく揺れだしたのだ。

まるで何かにぶつかったかのような衝撃が襲う。

「リド！」

「何だ、一体……!？」

馬車の窓から身を乗り出す。

すると、馬車の周りが魔物で囲まれていた。

ツええええ!!？まさかこんなにも魔物が潜んでた!？

見渡すだけでも20匹位だ。

「これは……私がやった方がいいかな？」

「何馬鹿なこと言ってるんだ!この数は流石に予想外にも程がある、
ここは逃げるぞ!」

「リド……どうやって逃げるの?これは突破口作るには掃討しかない
よ」

「グッ……、だが……」

「大丈夫、この位ならイケる」

私は、馬車の窓から身を更に乗り出し飛び降りようとするがリドに
後ろから引かれる。

「だッ…」

「雇い主を守るのが傭兵だ。雇い主が守ろうとしてんな、逃げ道は俺が作るからお前はその隙に逃げろ」

「ちょ…リド!?」

「だから、ここで少し待ってる!」

私を馬車内に戻したリドは大剣を再び取り出し、馬車の外へ出る。何してんの、リド!

「リドッ!」

私は急いで窓からリドの姿を確認する。

すると、そこにはリドが呆然と立つ姿があった。

リドの向ける視線の先には、悠然と立つ長い黒髪の男。

そしてその目は赤く輝く。

一度見た、その瞳はあの和平交渉を持ってきた馬鹿魔族の姿だった。

「…あの時の…魔族。…何故ここに」

「久しぶりだな、リン〃ヒョード。お前に会いに来た」

柔らかな笑顔を顔に浮かべて、魔族は言う。

ヤバイ、無駄に笑顔が眩しい。美形は全員笑うと笑顔が眩しいな、腹立たしい。

一方、リドは魔族を見て固まったように動かない。

魔族は魔物をちゃっかり手懐けているのか魔物は魔族に向かって跪いたまま一向に動かない。

書物で魔物は魔族と従属関係にあると知ってはいたがこうゆう事か。

「一体何の用ですかね、こんなに魔物を連れて。まさかまた和平交

渉の件では無いですよね」

「それ以外に何かがあると言った？」

…思わず絶句。

馬鹿なのか、この魔族。いや、馬鹿でしょ。

たかが和平交渉案練り直しのためだけにここに来たとか？

「中々面白い冗談を言う方ですね。和平交渉をどんだけ結びたいんですか」

「冗談でここまでは来ない。それよりも考え直してきた、見てくれ」

魔族はあの時と同じように懷から分厚くなつた紙の束を取り出す。ど、どれだけ生真面目なんだ。

「…何故それだけのために魔族を連れているのでしょうか？」

「流石に人間の国の内部にまで入るのには骨が折れる。だから彼らに手伝つて貰つたのだ」

「なるほど、では今は必要ないはずでしょう。散らしていただけますか？」

「ふむ…、だがそうすると後で怒られ…」

「魔物共、邪魔です。散れ」

威圧感込めまくりの声を冷たく響かせると魔物は瞬く間に消えていなくなる。

あの地獄を体験した人間にとってはそんな数蹴散らすのは得意だ。魔物が消えたことに驚く魔族だが、次には笑みを浮かべた。

「面白いな、魔族より劣るとはいえ人よりも強者のはずの魔物をたったの一声で散らすとは。やはり只の女では無いようだ」

「只の女な筈がないでしょう？それでも最強魔法士ガウスの弟子で

すから」

「む…、そうだったのか」

だからこそガウスに弟子志望したんだよ。
なるまでの道が大変だったけど。

私はその時はつと気づく事があった。

リドがさつきから固まりっぱなしだった。

「…リド」

「…リン、あれは…魔族か？」

「うん、前に殺されかけた」

「よく生きてたな。それにしても納得がいった、お前があのガウスの弟子なら魔物を倒したのも頷ける」

「言わなかったっけ？」

「すまんが初耳だ」

「ありやりや」

思ったよりも状況整理がついてるようで安心した、流石プロ。
ひとまずこの場はあの馬鹿魔族を適当にあしらって逃げるか。

「…で、具体的に私に何をして欲しいんですか？」

「とりあえずこれを見て感想を聞かせてもらいたい」

差し出された紙の束。

…外交官でも何でもありませんけど。

私は紙を受け取って紙をパラパラと覗いていく。

『項目1：魔族は敵意が無い事を証明して武器放棄、生爪剥がし・
牙折りを実行する。』

項目2：人間に手を出した場合は四肢を砕き、声が枯れるまで謝ら

せてから頭に岩をぶつけて絶命させる。

項目3：若い魔族を月に1度奴隷として貢……」

私はすぐさま紙束を閉じて地面に叩きつける。

魔族の方が強いのにどれだけ下手だああ！！しかも残酷な方法が明確に書かれすぎな上明らかにやり過ぎ！

逆にこんなの出したら何か思惑があるって誤解されるっての！

これが魔族の誠意なんだろうけど人間にはそんな感覚無いから！誠意の方向がずれ過ぎ！

「な、何をする……！それは3日3晩寝ずに考えたのだぞ！」

「確かに誠意は籠り、人間に歩み寄りたいという思いはある事にはありますが何もかもがずれ過ぎです。非常識にも程がありますよ！」

「リ、リンに非常識と言われるなんて世も末だな……」

「リドは黙ってて。とにかく、これじゃ和平交渉なんて無理……いえこれでなくとも和平交渉は無理です」

「何故だ！」

「人間というのは欲望に忠実な生き物です。欲望を満たすだけなら同種であろうと蹴り落とします、そんな生き物が異種と仲良く暮らすなんて夢のまた夢の話です。人間は基本、無意識のうちに自分とは違うものを憎んでいる排他的種族。そんな人間と分かり合えるはずが無く、和平交渉なんて到底無理です」

隣で立つリドは絶句する。

まあ驚くよね、人間が人間を貶してるんだから。

けど、これが真実なのだよリド君。

向こうの世界での出来事を見れば全て納得するはずさ。

「そんな事はやってみなければ分からないだろう！」

「やらなくても分かりますよ。」

長い歴史がそれを証明し

ています」

「…ッ」

こちらの世界では向こうよりは歴史量は少なくとも向こうと同じような歴史を辿っていた。

今、こちらでは中世ヨーロッパくらいの時だろうか。

この頃、地球ではたくさんさんの殺し合いに革命が起きていた。

そしてこちらでも同じような事は多々起きている。

魔族と人間との絶え間ない戦争に同じ人間同士であっても行つ戦争。

魔族はまた出直すとだけ呟いてそこから風のように消え去った。

後に残ったのは、リドと私。

戻ろつか、とだけ呟きルーメンに向けて馬車を走らせた。

その間に馬車の中でずっと考えていた。

とりあえず5億ゲット。

第十四話：ギルド依頼（後書き）

魔物は強いですよ？

あの2人が異常なんですって。

第十五話：甘えられる人（前書き）

お気に入り100件！

ありがとうございます！！

第十五話：甘えられる人

「お待たせしました、こちらが依頼金の5億となります」

カウンターの上にずっしりとした灰色の袋が置かれる。

中身は勿論金貨だろう。たった1つの依頼で大金持ちとなった私は内心ドギマギしながら受付嬢の話を聞く。

「これでリン様はFランクからDランクへと上がります。ギルドカードをお貸し下さい」

ポーチの中に放り込んでおいたギルドカードを手で探す。

異次元ポーチなので深いところまで入ってしまったのか腕をポーチの奥深くまで突っ込み、手探りで探しているとカードがあった。

この時、端から見れば異様な光景だったろう。小さなポーチに腕1本が丸々入ったのだから。

「これでリン様はDランクへと上がりました。飛び級をなされたので二つ名を付けられますがどう致しますか？」

「二つ名？」

「はい、自分の通り名のようなものです。そちらにいらっしゃるリカルド様はSランクですので『破壊の黒虎』というものを持っていますよ」

リドは恥ずかしそうに顔を俯かせる。

うん、若干中二病が入ってるね。

それにしてもSランクだったんだ、強さは納得。

「私は別にいいですよ。つけません」

「分かりました、その場合はギルドから勝手に付けさせていただきます」

「…え？」

「そうですね…。リン様は……『黒の猛獣使い』とか…」

「ま、待って下さい！！いりません、てゆうか何ですかそれ！？」

「リカルド様にちなみました。気に入りませんか？」

「気に入るいらない以前の問題ですよ！私はそんなのいりません！第一倒したのはリドですし！」

「それでも規則となっておられますので。そうだ、いつそのことリカルド様に決めていただくという手もありますが」

受付嬢は笑顔を崩さないまま、リドへと視線を向ける。
当然のようにリドは困惑するが、すぐに含み笑いへと変えた。

「そうだな…。『謎』だけでいいんじゃないか？」

「謎…ですか？」

「ああ、こいつは全てが謎のようなものだから」

「し、失礼すぎる！」

「何処がだ。お前にこれほどぴったりな言葉は無いんじゃないか？」

「それだったらリドにも当てはまるでしょ！」

「俺は知る人に聞けば謎ではない。それに男は謎があった方が良かった方がいいらしい」

無駄に正論を吐きやがる…。

謎って何なの？私の何処が謎？

確かに異世界のことは隠してるけどそれ以外は特に…。

「お前、自分の何処が謎なのか分かってないだろ」

「うん」

「……けど隠してる事はあるだろ」

「…ある」

「多分その謎が全体的にお前を謎に包み込んでるんだよ」

「…そ、なんだ」

案外的を射てるかもしれない。

異世界人だからどうしてもカルチャーショックが起きるし常識も多少違うから。

それでもこちらの人を装えたから大丈夫だと思ってたのに勘が鋭いつていうのかな、リドは。

やっぱり野生の勘は強いなあ。

「分かった。受付嬢さん、私の二つ名は『無名』でいいよ」

「無名…ですか。分かりました。………はい、カードをお返ししますね」

カードの上に手をかざし、少し念を込めた様子の受付嬢からカードを返されポーチの中へ放り込む。

そして灰色の袋をポーチの中へグイッと多少強引に突っ込むとスッポリ入った。

このポーチほんとに万能。

私はリドに目を向け、外に出ようと目で訴える。

扉に足を向け、出ようとドアノブに手を掛けようとしたその時突然後頭部に激痛が走る。

あまりに突然過ぎる上、痛くてその場にうずくまる。

「リン！おい、誰だ」

激痛の理由は投げられた酒のビンらしく、床にそれが転がる。

誰だ、こんな事したの…。只じゃ済まさない。

「ごめんよ、嬢ちゃん。手が滑ったのさ。…それにしてもこんなのも避けられなくてよく魔物を倒せたねえ！あ、つとすまない、倒したのは破壊の黒虎だった！あっはっはは！」

「お前…！」

声からすると女みたい。…甲高い声は無駄に五月蠅いし、言動も腹立つ…！

いきなり何事かと思えば高額報酬依頼完遂への嫉妬か！
まじで頭痛い…。頭が痛みで熱いし衝撃がまだ残ってる。
頭を押さえながら微かに声を漏らす。

「大丈夫か、リン。起きれるか？」

「…ッ。大丈夫…な訳無いッ」

勢いよく立ち上がると共に私は後ろを振り返る。

そこには胸元とお腹を露出するセクシーな女性が机で長い足を持て余すように組んで座っていた。

ハッとするような美人では無いが、存在感と威圧感を感じさせる佇まいを持つ。

だが別に気圧されている訳では無い。むしろ怒り心頭。この偉そうな風貌を見て余計に。

私は女性に詰め寄る。

「いきなり何するんですか、嫉妬も大概にした方がいいですよ。いい年して子供を苛めないで下さい、おばさん」

「おばさんと言うねえ。悪いけど今のは手が滑ったのさ、小娘」
「流石に怒りますよ、痛かったんですから。謝るのは今のうちです
がどうします…？」

怒りで震える声を抑える。

理不尽に攻撃されるのは一番嫌いだ。

何か理由があつての攻撃なら甘んじて受ける。私に落ち度があつたのだらうと思うし。

しかし理不尽な攻撃は頂けない。私は悪くないのだから。

「謝る？舐めるんじゃないよ、小娘が！粹がるのも大概にしな！」

ぷつつり。

何かが切れたような音が頭の中で響いた。

「じゃあ死んでください」

その冷たい声を発すると共に私のナイフが女性の喉元に刺さる

寸前で止まらせられる。

腕がいきなり動かなくなり止まった。

その止めた原因はリド。2度も私の攻撃を見極めるなんてやるなあ。

「リン、怒りは分かるが落ち着け！いいか、人殺しは……ッ!？」

止められた手とは反対方向の手で今度は心臓を狙う。

ナイフを素早く用意し、女性の急所を狙う。

今度は仕留める。

「リンッ！」

ピタリ、と女性の胸元にナイフが刺さる寸前で止まる。

…… あつぶな、危うく殺しちゃう所だった。

怒りで我を忘れてた……。失敗失敗。

ナイフを戻して何事も無かったかのように笑顔を作る。

「…と言うことで、死にたくなければ今後下手な事は言わないで下さいね」

女性は机からずり落ちるようにして地面にお尻をつく。
淡い灰色の瞳には涙が溜まっている。

冷や汗も出てるし怖い思いさせちゃったかな？

私はそのまま扉を出て、街道を適当に歩く。

リドは置いてきたまま。

それにしてもアレだけで怒っちゃうなんてまだまだ修行が足りないな。

それか今までの理不尽への怒りが一気に爆発したのかな？

あの時リドがいなかったら多分犯罪者になってた。命拾いしたな、あの人。

私は体が殺しの行動に移っちゃう所をみるとあの家の子なんだって実感しちゃうな。

実に嫌な癖が付いたもんだ。ま、じゃなきゃ今頃は捨て子だったろうけど。

珍しく感傷に浸っちゃった。柄でもないのに。

「…けど殺せない所もあるって事はまだ人なんだよなあ」

今まで殺しの行動があっても殺す事は無かった。

どうしても踏ん切りがつけられないぜ。

「リン！！」

唐突に呼ばれる名。振り向くとリドが息を切らして立っている。
さっきは止めてくれてありがと。

「や、リド！全くも、さっきのは冗談だよ？真に受けちゃ駄目でしょう？」

「俺が止めなければ刺さっていたが？」

すつとぼけてみたら一蹴されました。

「いいか、いくら腹が立つても人を殺すのだけはやめろ。じゃないと俺みたいな奴になるぞ」

「はいはい、止めてくれてありがとね。あと自分を卑下しない」

「…お前はまともに説教を聞く気がないな」

「説教を受けるなんて柄じゃないからね。それよかはいこれ」

ポーチに入れた報酬金を一掴み取って渡す。

金貨が手から零れ落ちそうになる。

「何だ、これは」

「雇い金に決まってるでしょうが。これで足りる？」

「足りるどころか多すぎだ。この1枚でいい」

私の手から1枚だけ取って笑う。

お、やっぱり美形は笑顔が違うね。私もつられてついつい笑う。

「じゃ、宿に戻るうか」

「そうだな。説教は宿に帰ってからにしてやる」

「耳栓買いに行かなきゃ」

「おい」

さっきの事件など嘘のように何も感じさせない雰囲気包みリドにお礼を言いたくなる。

さっきのことで問い詰めたことなんていくらでもあるだろうにそれをしないリドはするくないですか？

つい涙腺が緩んじやうじゃないか。こっちは感動映画大好きっ子で涙脆いんだぞ。

全く、そんな優しいリドにはご褒美をあげよう。

私は目の前に立つリドに思いっきり抱きつく。一応女なんだから嘘でも喜べ！

とか思いつつも自分の頬に冷たい雨が伝い始めたからそれを隠すために抱きついただけだけどね。

「お、おい！リン!？」

「いやあ、雨が降ってきちゃいましたね。濡れるの嫌なんでしばらくこのままで構いませんか？」

「は？雨なんか……」

そうだな、分かった」

意図を察したリドは私の背中をぽんぽんと叩く。

ほんとに優しいな、馬鹿。

何でかな、雨足が強くなってきた。濡れるのが嫌だからリドにぎゅっとしがみつく。

あゝあ、優しさに弱いなあ。私。

今まで悪意か打算的な好意しか受け取った事無いから純粋な優しさは私には大効果だよ。

こんな風に人に抱きつくなんて初めてかなあ？

両親には抱きつくどころか触る事すら許されなかったし弟にも触る事を両親に禁じられてた。破って一緒に寝た事あったけど。

人ってこんなに温かいなんて知らなかったや。

「リド……ありがとね」

「……お前が何を背負ってるのかは知らんが大人は頼ったほうがいい

いぞ」

「頼られるのは禁じられてるからねえ」

抱きついていてるため声がくぐもる。

「それは家訓か？」

「うん、1人で生きる事は絶対条件だから」

「…だったら破れ。俺を頼れ」

「あはは…。家訓破ると破門になっちゃうよ」

「構わないだろ」

「言ってくれるね」

だから優しくしないでってば。

ダムが決壊しそうだよ？

そうなってリドの服まで濡れても知らないからね。

むこうで甘えられる人はいない。

だからこっちでも甘えられる人はいないと思ってた。

けど、リド。貴方にだったら、甘えてもいいですか？

「…リド、ごめん。ちょっと服濡らしそう」

言い終えるか終えないかの瀬戸際で、耐えていた涙がボロリと大きく零れ落ちていく。

嗚咽を漏らして、リドに更にきつくしがみついて。

涙を流すなんて赤ちゃんぶりぐらい？

いや、赤ちゃんでもあまり泣いた記憶なんて無いなあ。

ここで泣いちゃうなんてみっともない。家族にばれたら罵られそう。けどそれだけ優しさを受けて無かったって結構お笑い種だよ。とゆうか優しくされただけで泣くなんて人そうそういないね。

今までどんな理不尽にも、驚きにも、恐怖にも、衝撃にも耐えてきた私が耐えられない優しさって凄い。

向こうの世界じゃ考えられなかっただろうなあ、仕事中は完璧鉄仮面の私の弱点がまさか優しさなんて。

とゆうかよく流れ出てくる、この涙。15年間分の全ての悲しい出来事の際に泣いた事なんてなかったから今になって押し寄せてくるのかな、15年間分が。

向こうで過ごした15年の思いをまさか異世界の地でぶちまけるとは思ってたかった。

「…っあー…。泣くのと結構体力使うね」

涙に1段落ついたので、溢れるだけ溢れて止まった涙のために顔を袖で拭いて顔をあげる。

清々しいくらいの笑顔で。

「落ち着いたか？」

「うん、いつやあゝ涙って意思が聞かないんだね。全然止まらなかった」

人目も憚らずに泣いてしまった事に現在絶賛後悔中。

周りの人の視線が痛そう、リドが。多分彼女を泣かせた駄目彼氏っぽくなってる。

気恥ずかしさを振り払うためにもわざと明るく振舞う。泣いてしまった自分の失態と周りの人目を消すために。

未だリドの腕が私の体に回っているため、ひとまず腕を外そうとする。

が、その直後に掻くようにして体を抱きしめられる。

（…え？……ん??）

外そうと思った腕が私の腕を掴んで体ごと抱き寄せられた。

抱き寄せた本人は言うまでもなく、先ほどまで私がしがみついて泣いていた人物　　リドだ。

い、一体何が…。

視界は影で覆われ、ほぼ何も見えない状況に等しい。

理解不能の状態で、理解不能行動を取る者の声の上から降ってきた。

「…悪いが今度は俺が落ち着くためにこうしていいか？」

「……へ？」

「お前、少しは俺が男だつて事も考える。心臓に悪すぎる」

「いや、何言ってるのかさっぱりんだけど…」

「…説教時間増やすか」

「つてええええ！？何で、何処で増やす要素あつたの！？」

「黙れ、それが分からないから増やすんだろつが。今日は寝れないと思えよ？色々と聞いてやる上にお前の非常識も正してやるから」

「遠慮する！この状況で説教聞かないとかって言えない状況じゃん

！」

「当たり前だ、狙つてたからな」

「この人でなしー！！」

その夜、きつちりと正座（何故日本文化を知っている！？）させられ延々と説教を受けました。

眠かったので大半は聞いていない上、訳の分からない事が多すぎた。

第十五話：甘えられる人（後書き）

次回は少し番外編を挟みます。

番外編：見習いの弟（前書き）

主人公の弟話です。

番外編：見習いの弟

「父さん！姉さんが消えてから半年以上経つてのにまだ何も掴めないんですか！！」

「落ち着け、彰。凜のことは全力で探してる。だが余りにも情報が曖昧過ぎるんだ…」

ある家のリビングの一室で毎日のように起こる家族会議。

頻繁に行われる会議の内容は、姉の失踪についてだ。

半年前、突然姉さんが消えるようになってしまった。

原因は不明。そして行方も未だ手がかりすら掴めずにいる。

姉の名前は兵藤凜。長く艶めく黒髪のストレートにぶっくりとした赤い唇が印象的な可愛い系の顔立ちを持つ。

そして僕は、そんな姉を探す非常識の常識と呼ばれ続けて13年。

兵藤彰。ひょうてい しょう

シスコンとまではいかないが姉の事は好きで、よく一緒にいた。

半年前も、いつもどおり仲良く買い物してる時に姉さんは忽然と消えた。

初めは迷子になったのかと楽観視していたが、半年間ずっと消えたままなのだ。

家柄的に誘拐や暗殺がされやすい我が家は、そのことで姉さんが巻き込まれたのでも思ったが、あの姉にとってそんな事はない。あっても返り討ちにしてる筈。単体で軍隊とも渡り合える人だから。

今日にの朝も同じように手がかりすらも掴めていない無駄な会議が開かれ、僕は父さんに詰め寄る。

深刻そうな顔をする父さんに、ずっと黙っている母さん。

「これだけ探しても見つからないという事は……もう諦めた方がいいのかも知れないわね……」

ぼそりと呟く母さんの言葉が頭に血を上らせる。
つい激昂して机を叩く。

「母親のくせにその言い草ですか！姉さんは生きてますよ、絶対に！」
「落ち着けといっただろ、彰。彰はそう信じていても根拠は何も無いんだぞ？」

もう姉さんを探す事を諦め、死亡届を出そうか相談している親が憎い。

まだ死んだと決まったわけでもないのに。

僕は、時計を見て時間が遅刻寸前なことに気が付く。
スクールバッグを乱暴に掴む。

「根拠ならありますよ。姉さんが姉さんだという事実がね」

台詞を吐き捨て、玄関の扉を開けて外へと出る。
先ほどの言葉、知らない方にとっては意味が分からないように聞こえるでしょう。

我が家は一般家庭とは大分違う家系で、大分変わっています。
両親や姉は決して認めませんでした、とにかく非常識過ぎるんです。

家訓には、常識と呼べるものが1つもなく、全て普通の方にとってはあり得ないものばかりです。

しかし家訓を破る……つまり常識ある行動を取れば家の庭木に吊るされます。過去に僕は40回くらい吊るされました。

唯一あの家系に生まれながら常識を捨てませんでしたよ僕は。褒め

て貰いたいくらいですね。

しかし姉は正反対に、あの家の子だと証明するような人でした。

家訓に従順に従い、常識など持ち合わせない人でした。

非常識にも程があるだろうと思わずツツコミを入れたくなる程非常識で、謎で、あり得ない位に強い人でした。

その強さは今まで姉さんがやってきた事を知れば分かって貰えると思います。

代表例を挙げるなら、ヤクザの抗争に巻き込まれても無傷だった上にヤクザ同士を和解させたとか不良50人の肅清や殺し屋30人と1人でやりあつて圧倒的にぶちのめし一生歩けない体になったり、米軍を壊滅寸前まで追い込んだり世界中の人を脅せるネタを持つていたりとか……。あれ？途中から人間じゃ無くなつてる気が……。ん？全文駄目じゃないか、これ。

だから姉さんはきつと無事なはず！むしろ無事じゃなかった姉さんなんか見たことないし。姉さんが血を流す姿なんか見た事ありません。

…すみません、嘘つきました。転んで膝から血を流してた事ありますね。

つついとい長く語ってしまいました、言うなれば姉さんが死ぬなんて寿命で以外あり得ないということです。

「よお、彰！今日も元気ねーな！」

ポンと後ろから背中を叩いて挨拶をしてきたのは、親友の正臣浩介。まさの おみ こうしけ軽いお調子者だが、正義感が強く人が良いのでクラスの人気者です。姉の失踪を心配してくれる1人です。

「どだ？お姉さんの手がかりとか」

「相変わらずですよ。姉さんの事だから死ぬなんて事は無いと思う

んですが…」

「携帯とかは無理なんだよな？」

「無理ですね。あの姉ですから」

姉さんは極度の機械おんち。

携帯とかは持たせた瞬間に煙を出して壊れる。なのにあの姉は全くそれを認識せず、不良品だとか喚いてた。

流石に携帯電話店に乗り込もうとしたのは止めたが。

「つたく、凜さん何処行っちゃったんだろうな？」

正臣はよくころころと姉さんの呼び名を変える。それがお調子者の由縁でもあるのだが、姉さんを名前で呼ばれるとイラっとする。

「~~~~ツツ!? 彰!」

無意識のうちに正臣の首を絞めていたらしく、目の前で白目をむく正臣。

我に返ったのは、幼馴染である女の声が聞こえてから。

とゆうか僕も非常識の中の常識とかって呼ばれてるけど最近はそうでもない。

姉さんが消えてイライラしてるからか少々行動が目を見張るものになってきた。

「心さん。おはようございます」

「そ、そんな事より正臣を早く放してあげなさい!」

ぱつと正臣の首から手を離すと正臣は咳き込んで地面に跪く。

ちなみにやってきた幼馴染は星間心。せいま ころも

世話焼き体質のお人好し幼馴染。ラブコメの典型的なヒロインにな

れそんな女の子でそう言うだけあってかなりの美少女。

僕は興味ないけれど、中々こうゆう要素が学校にいただけで賑わうから面白い。

「お前は俺を殺す気か！彰あ！」

「正臣が姉さんの名前を呼ぶからですよ。今度呼んだら閻魔様と会わせてあげます」

「き、気をつけるわあ」

「僕、正臣の物分りのいい所は高評価にしてるんですよ」

につこりと笑って、僕は学校の方面へと走り出す。

そういえば遅刻寸前でできていた。

正臣と心は普段から遅刻ギリギリで登校しているが僕は彼らと違ってマジメな優等生なので急ぎます。

正臣は朝のセットに忙しいという理由ですが、心は弟兄妹の面倒に忙しいからだそうです。心は何処までもラブコメ展開を裏切りませんね。若干ツンデレ要素も入ってますし。

「待ちなさい、彰！今日も置いてく気？今日は貴方にとって良い話を持ってきてあげたのに！」

心からの制止がかかり、足を止める。

普段なら気にも止めない制止だが、良い話というのが気になります。

「まあ、学校で話すわ。こんなトコでぐずぐずしてたら遅刻しちゃう」

じゃあ止めないで下さいよ、と言いたくなるのをぐっと堪える。

心の話がどんなのかは分からないが僕にとっての良い話なんて現時点では姉さんの事しかあり得ない。

早く話を聞きたい思い走るが、心は一度決めた事は曲げないので今は学校に急ぐ。

もしも姉さんの事なら一刻も早く聞きたい。姉さん…！

正臣と心を置き去りに、学校へと全力疾走で向かった。

後ろでの待てコラアア！！とかいう声はきつと幻聴だったのかな？

そうして学校に着き、クラスに滑り込む。

1年4組と書かれたプレートの下る教室では、まだ先生は来ていないらしくクラスメイトがざわついている。

僕は、鞆を自分の席に置くと、心がまだ来ていない事にやっと気づき落胆する。

どうやら余りの嬉しさで心を置いてきてしまったようだ。

その時、授業開始のチャイムが校舎に鳴り響く。

あ、正臣と心死んだな。

クラスに担任である鬼塚先生が入ってくる。

先生は中々の強気美人だが性格に難がある。

「センッサー！ギリセーフですか ！？」

1拍置いて正臣と心が教室に入り込んでくる。

息をぜえぜえと切らし、全力で走ってきた事が窺える。

「はい遅こーく」

先生は正臣と心が入ってきたのと同じくしてぺらぺらな紙を2人に投げつける。

「ぶべらああああー！！」

「きゃああああああー！！」

…正臣と心はぺらぺらな紙を体で受け止め、倒れる。

ぺらぺらとは言っても、先生の生み出すあり得ない速度によってとげとげに変わる。

僕でも目で追うのがやっとの速度を持った紙は、人体を貫くのもやぶさかではないだろう。

紙が銃弾と同等の威力を持つのでいささか危険だ。それでも死人が発生するのは見たことが無い。…先生が手加減をしているからだが、ぺらぺらな紙は遅刻反省文。遅刻した生徒には先生の制裁つきで与えられる。

だからこのクラスで遅刻する生徒はまずいない。二人を除いて。

「2人は明日までにソレ提出な！。出さなかったら頭と胸が離れると思えー」

さらりと怖い台詞を言う。…これが先生の性格に難アリと言われた理由。

認めたくは無いが先生はウチの家系の親戚らしい。

だからあの性格は納得できるが、せめて自重はしてほしいと思う。

「じゃあ今からHR始めまーす。そして終わりまーす。終了、はい解散」

…よく先生免許をとれたな、こいつ。改めて思うと絶対先生をやっではならない人ナンバーワンになりそうな人なんですけど。

先生は、倒れる正臣と心を避けて教室から出て行った。

僕はそれを確認すると倒れる心の元に駆け寄った。

早く話を聞きたい。

「心、大丈夫ですか？話はできそうです？」

「ぐっ…、話を聞きたいなら手を貸してよ…」

「分かりました。どうぞ」

「ありがとうございます」

手を貸して心を起き上がらせると、心は正臣を起こす。

「…鬼塚めえ…、いつかぜってー復讐してやる」

所詮無理だから止めたらいかがです？と心の中では思っても言いませんよ。

そんな事よりも今は心の話が優先です。

「で、心。僕にとって大切な話とは何ですか？」

「その事なんだけど…2人とも、今日の授業サボる勇氣ある？」

「聞かれるまでもねえ。次の授業はあの鬼塚だ、堂々とサボってやんぜ」

「本当に首と胸が離れそうですよ、正臣。僕は優等生ですから保健室に行ったことにでもします」

「ず、ずるい…」

普段は授業をサボるなんて許せない！的な心からサボり宣言が出されるなんて余計に期待してしまいます。

これだけ期待させといて姉さんの話じゃなかったら怒りますよ、心。ベタすぎる屋上に上がっていった僕達は、心の話に真剣になります。風が強すぎる屋上に大事な話。どんだけベタなんです？いやここでベタじゃなかったら逆におかしくなってしまうすね。

すみません、僕の偏見は無視してください。それより早く話を聞きましょう。

「…根拠なんて何も無いんだけどね、それでも…聞いてくれる？彰のお姉さんの話」

流石は期待を裏切らないラブコメヒロイン。

根拠なんて無くても構いません。聞けるだけで十分です。

「……ほんとに信じられない話なんだけど、彰のお姉さんは……凛さんは、この世界から飛んだんじゃないかって思っの」

「飛んだ？」

「うん……。友達、綾香って子知ってる？」

「知ってるよ、あの超美人だろ？」

「その綾香ってね、最近学校に来てるんだけど……少し前までは全然学校に来てなかったの。いきなり消えるように行方不明になったのよ」

「……姉さんと同じ」

「そう、私も不思議で一度聞いてみたの。そしたら、真剣な面差しで『異世界に行っていた』って言ったの……」

「異世界？おいおい嘘だろ、そんなファンタジー……」

「私も嘘だと思った！だってあんまりにあり得ない話だもの！けどね！！綾香が言うには、1日だけけどこの学校に私を元の世界に帰してくれた女の子が転入したって言ったのよ！！それで調べてみた……」

「……嘘でしょう？」

「……1時的に、たった1日で入学して退学した外国人の女の子がいたらしいわ」

驚きのみがその場を包む。

もしその話が本当なら姉さんの手がかりが掴めた。姉さんは……異世界にいる。

それならこの半年間どんな手を使っても分からなかった姉さんの居場所が頷ける。

やっと見つけた、姉さん……。

けど…異世界なんて…なんで…？どうやって行ったらいいんですか？

「その外国人の女の子の行方は！？」

僕は、心の腕を掴み問いかける。

「も、もう…異世界に帰っていつてしまったらしいわ…」

心の言葉でどうしようもない絶望感が襲ってくる。

異世界なんて、どうやって行ったらいいんですか？その女の子にも
う少し早く会えてれば良かったです…。

異世界トリップもの…と言えば、勇者召喚や国王の妃、愛人…恋愛
モノに何の意味も無いトリップ…。

大きく分けられればこの3つに絞られるでしょう。

勇者召喚…はあり得ないでしょう。姉さんが勇者なんてものを選ぶ
れるはずありません、世界が滅びます。

恋愛モノは…、認めたくありませんが可能性は十分にあるでしょう。
姉さんのあの美貌ですし、男なら惚れます。けどあの姉さんに恋愛
なんて言葉は似合いませんね。甘い言葉をことごとくかわし、強引
な手なんかは通じないと思いますし。…もし姉さんを落とせる男が
いたとするなら僕はその人を尊敬します。けど同時に殺意も抱きま
す。恋愛系は僕が認めたくありません、よって却下です。

と、残るのは意味無しの異世界トリップ。これが最も可能性が高い
です。定番でいうならそういう場合は草原や森に落とされて、強制
戦闘フラグです。姉さんなら混乱しながらも敵をねじ伏せれそうで
すね、そこらへんの心配は無用です。姉さんならなんだかんで生
き延びてると思います。こちらに戻ってくる方法も考えてくれてる
と嬉しいんですが、探してくれてますかね？素直な所がありますか
ら変な考えを植えつけられて帰らないなんて言っただけならいいん
ですが。

そうなっているなら僕が迎えに行かないといけませんね。

そのためなら家を継いでもかまいません、姉さんは必ず見つけます。…もしかしたら姉さんは家が嫌で異世界なんかに行った訳ではありませんよね？そうだとしても僕は姉さんをこちらに連れ帰って見せますよ。

僕は姉さんがいなければこの世界で生きてる意味なんて無いに等しいんですから。

「あ、彰…」

姉さんの事を考えている時に他人から邪魔されると腹立たしいです。何ですか、正臣。

「全部…声漏れてる…ぞ」

……………？

何か問題が？

「いや、…その…なあ？」

「そ、そうね……………」

正臣と心が顔を見合わせて静かに呟く。

「シスコン…」

失礼ですね。

「ぎゃあああああ！？」

「きゃあああ！！」

正臣と心、失礼な発言は控えてください。殴りますよ？

「す、既に…殴ってる…」

正臣が頭のとっぺんを押さえながら反論の声を漏らす。

「いいですか？僕は姉さんが好きなかただけであってシスコンではありません。その所を気をつけていただかないと僕の名誉負傷に繋がります」

「…いや、だからそれシスコン…」

またもや失礼発言をしようとは、殺されたいんですか正臣。これでも人の殺し方は知ってますよ？僕の家柄が何か知っていますよね？

「~~~~~ツツ！……悪かった…！」

頭の上にたんこぶを2つ作り上げた正臣を凄み、座りなおす。

邪魔が入りましたが続けましょう。

まず姉さんの居場所が異世界。ようやく手がかりは掴めました。

問題は異世界の行き方です。

姉さんが消えたのがデパートの3階ですからそこに行けば何か分かるんじゃないか？

いえ、その可能性は多分低いですね。異世界へ行くきっかけなんていくらでもあるでしょう。世界は広いんですから。

となれば、まずは全国の行方不明者事件を洗いましょう。きっと何か分かるはずですよ。

そうと決まれば警察から全国事件名簿を借りましょうか。

「正臣、心。僕は今から人生初学校の抜け出しをします。先生には

そう言つて置いてください。きつと見逃して貰えるはずですから」

「無理だろ。お前は見逃してもらえても俺らは無理だろ。鬼塚に捕まつて首から上が消えるぞ」

「じゃあ言つておいて下さいね」

「人の話を頼むから聞いてください。俺、死にます」

「3度も言わせないで下さい。言つておいて下さいね」

「死ねつてか！？死ねつて事が！！」

「頑張つてください」

「…こん畜生があああああ！！」

泣き叫ぶ正臣と震える心を置いて屋上から飛び降りる。

軽く30メートルはありますが、この程度問題ありません。

大地を揺るがすほどの振動を持つて地面に足をつけると、平然と警察署へ向けてレッツゴーです。

そういえば、まだ家がそうゆう家系が言つてませんでしたね。

別に秘密にする家系でもありませんし、言つてもいいでしょう。学校の皆さんや近所の方は全員知っています。

僕らの家系は……。

「おい、彰ー。てめえどこ行く気だー？次は私の授業だぞー、出なかつたら警察署に先回りするぞー」

…憎き同じ家系の鬼塚。

どこで話を盗み聞きしてたんですか。

数階上の校舎から鬼塚の声が降り、授業に出なければ全てが駄目になつてしまうような脅しをされたので渋々校舎に戻ります。

すみませんが家系の話はまた今度にさせて貰います。

今は戻らないとまずそうです。ではさようなら。

その後、教室に戻るとギザギザ板の上で正座をさせられている上に馬鹿共膝に岩まで乗せられている正臣と心が廊下にいました。

勿論僕も同じ目に遭わされそうになりましたが鬼塚をつまく説得、
買収して逃れました。

番外編：見習いの弟（後書き）

完璧なるシスコン。

次回は本編に戻ります。

話の内容に少し他小説が含まれています。
お気づきいただけましたか？

第十七話：見習いと傭兵のある一日（前書き）

少し短めです。

と言つか説明文が多めです。

第十七話：見習いと傭兵のある一日

「リドー！そっち行つたよー！」

「分かつてる、一撃で仕留めるぞ」

薄暗く木が生い茂る森の中、1つの木に赤い血が飛び散る。

赤い血を振り回したのは、リドの紫色の大剣を体に突き刺すオークと呼ばれる大きな獣。

現在、ギルド依頼遂行中。

今回の依頼は、オークの退治。オークは知能が低いが力の強い獣の事。見た目は熊によく似ている。

「お見事」

「当たり前だ」

オークに刺さった剣を空間に飲み込ませて、退治成功の証拠であるオークの死体をギルドカードに記録させる。

ギルドカードはギルド内での身分証明と共に、記録装置の役目も果たしている。魔物退治の時もリドはギルドカードに記録させていたらしい。

：魔物退治と言えば、あの日から既に1週間が過ぎた。

失態を犯してしまい、翌日は羞恥に塗れたがリドは何の変わりも無い様に接してくれた。

その優しさが胸に染みて、涙腺は緩んだものの涙は見せなかった。それからというものの、今はギルドで依頼を淡々とこなしつつお金をためている。

5億もあればいいんじゃないかと思ったが、貯めておいて損は無いしもうすぐこの街ではある大祭が行われるという事で折角だから参加してから他の街へ行こうと言う事になった。

リドは私の事について何も聞いてこなかったが、内心では疑問がたくさん募ってるはずだ。帰る時にでもなったら言ってみようと思う。

「リド、そう言えばさ…大祭って明日だっけ？」

「そうだ。だからここで行う依頼もこれが最後だな」

「そっかー。名残惜しいなー」

戦い終えたリドはもろに浴びてしまった返り血を手で拭いながら言う。

…むしろ血が広がってますよー…。

ちなみに私は勿論戦っていません。

リド曰く、お前が武器を持つと危なっかしいから持つな。との事。

泣いてしまった夜にお説教として盛り込まれたその言葉に逆らえるはずも無く、今はナイフも針も取られて丸腰状態。

小さい頃から武器と一緒に育ってきたような私は違和感ありまくりで生活しにくいですが素直に従ってます。

男に守ってもらう…と言うか人に守ってもらうなんて無かったから

……守る事はあっても。

う、嬉しい…？と言うか…何というか……。

ラブコメに少し憧れてたからなあ…。一生叶う事ないと思ってた夢が思わぬ形で叶った！それでも一応女の子だから！

と言うか私にはまだ女の子という思考が残ってたんだな！うん、とつくに消え去ったものだと思ってた。

『いいか、お前は確かに強いんだろう。だが殺す事はやめろ、血で自らの手を汚す事の醜さは俺がよく知ってる』

かつこいい台詞だが現実と言う台詞を見た人などいない。

それを言っただけのけるなんて流石異世界。恥ずかしい台詞をさらりと吐きますな。

肝に銘じておきますよ、リド。

「じゃあ帰ろっか」

「そうだな、足元気をつけろよ」

「子供じゃないんですけど…?」

急ぎ足で森を歩いていく。

足元には雑草や木のツタが無遠慮に伸び、足を絡めとろうとする。

まあ、普通に考えて避けれますよ?

ひよいひよいとかわして森を進み、ルーメンのギルドへと戻る。

「ギルド到着……。って何かいつもより様子が騒々しい…」

「大祭が近いからな。ギルドは稼ぎ時なんだよ、準備や要人の護衛やらで仕事が入ってくるんだ」

いつもよりも声のトーンを高くして笑い声をあげるギルドメンバー。

その顔はやる気に満ち溢れている。

大祭ってどんな事をするんだろ。

「大祭での主なメインは音楽だ、だから楽器の運びや雑用なども入ってくるがそれでも気前の良い客なら金を弾んでくれる」

「そうなんだ。大祭って面白そうだね」

「そうそう、ちゃんと明日は開けとけよ?俺が案内してやる」

「それは楽しみなんだけどリドってこの街初めてーって言ったの嘘だったんだね」

「う…それは…」

「いいよ、聞かない聞かない。そう固くなんなさんな」

この数日で特にといった変化は無いもののリドとの距離感が少し狭まった気がする。

前と明らかに違う雰囲気がりどと私を取り巻いている。

前は少し警戒の色を交らせてはいたが今はりどに対しての警戒が弱まり若干明るい雰囲気醸し出せている。

「リン、とにかく明日は開けて置けよ」

そう言うとりどはカウンターのの方に走っていった。報酬の受け取りだろう。

にしても明日は開けとけ……って別に用事なんてギルドで作ろうと思わない限り無いけどな。

まあそれはともかくりどが案内してくれるらしいし明日は楽しもう。お祭りなんて久しぶりだ！

えつと……小さい頃に今の内に思い出作っておいでって父さんに言われたとき以来かな。

ふわふわ綿飴がおいしくて印象に残ってる。

こっちでは屋台とか出るんだろうか？だとしたら全部制覇したいな。

「あの……リンさん、ですよな？」

「ほえ？」

頭にりんご飴やチョコバナナを思い浮かべながら明日の事を考えていると唐突に声をかけられる。

振り向くと、小学1年生ぐらいの男の子が立っていた。

銀髪に碧眼に天使のような笑顔を浮かべている。何この可愛い生物は。

背中に白い羽が生えていても不思議じゃないぞ。

「リン……ヒヨードさん、ですか？」

おどおどとした聞き方が萌を煽る。

ほったもちもちしてそんな柔肌だし日本に来たら絶対どこかの変態に攫われちゃうね、これは。

「そっだよ、どうしたの？」

同じ位の目線にまでしゃがみ、笑顔を浮かべる。
もち対幼い子用です！

「あの…僕、ミカエルって言います…」

この子の両親ナイスネーミングセンス！！
よりよってまさかの天使の名前！しかも地球の！
ピッタリにも程がある名前だよ。

「その、僕…実は…」

「リン、報酬は受け取ったぞ。何してる？」

ミカエルが何か言いかけようとしたがリドが来た事で口を紡ぐ。
私はリドの方へ振り返ると今の感動を伝えた。

「リド、リド！この子やバイ！天使みたい！！」

「落ち着け。……迷子か？」

「い、いいえ…。違います…」

「ここは子供には場違いな所だ、来るんじゃない。分かったら両親の所へ帰れ」

「え……………はい…」

「いい子だ」

リドの顔が笑みに崩れる。

普段は怒り顔か心配顔が無表情しかないあのリドが！？

不覚にもそれを向けられてるミカエルが羨ましいと思ってしまった。だってギャップ萌え過ぎるでしょうよ。普段は笑みなんか1つも見せないあいつがふと笑みを零す…何このギャップ、すごいツボ…。異世界だからなのか？こんなにも漫画やアニメの中の存在でしかなかった様々な要素を味わえるのは。

「…リド、私にも笑顔向けてくれませんか？」

「は？」

「いや、ギャップ萌えを生で味わいたくって…」

「訳分からん。それよりも帰るぞ」

「いたた、引つ張らんというーな」

「何語だ、それ」

首の襟を掴まれて引きづられるようにしてギルドを出ると、ドサリと落とされた。

…もろお尻打ったあゝ。

じんじんと痛みの走るお尻を押えながら立ち上がるとリドが怒っているような感じで目の前に立ちはだかる。

…何故！？

「リン、さっきの子供と何を話してた？」

「いや、自己紹介…的なモノを」

「何故だ？」

こっちが聞きたいわ！！

などと言えたらどれだけ楽でしょう？

私は怒っているリドにだけは逆らえない。

有無を言わさない感と威圧感がビシビシ伝わってくる。

だからこそうゆう時は触らぬ神に祟りなし。黙っていきましょう。

「…はあ。盗聴術を仕掛けられてるのに気づかなかったか？」

……………！！？

な、何い！！盗聴術だと…！？

いつの間に、つつか何故！！

「俺に帰れと言われた後健気に術を掛けてたぞ。まあ一瞬で解いたが」

最悪だ…。

まさかこの私が盗聴されているのに気づかないなんて…！恥にも程がある！！誰か私の頭を殴ってください！！

まさか刺客が子供だったのこの半年の平和ボケのせいのか！？

ああああああ！！鉄壁鉄仮面と恐れられていた私があああああ！！

子供であっても容赦なく刃を向けていた私は…この半年の内に消えたのか…。

それが嬉しいような、悲しいような…ふっ、これが成長を見守る親の心か。今は思いつきり使う場面違うけど。

向こうにいた頃は敵であれ友達であれ家族であれ敵意あるものはねじ伏せてきたし軍隊とかも戦ったなあ。

今はそんな闘争心消えてるし何より従おうという気無い。

私は半年の平和な日々で人間らしさを取り戻したとか？だとしたら嬉しい事は嬉しいんだけどなあ。向こうの方々が何ていうか…。

…戻りたくないとかでも一瞬考えてしまった自分が憎い。

「いいか、あまり無用心に人に気を許すな。たとえ子供でも誰かの刺客という可能性が十分にあるんだ」

「…はい」

リドに諭されている。

私だってそんな事ぐらい分かってるよ…。いや、分かった。半年前までは。

あゝあ本当に平和ボケって怖い…。

「分かったならいいが…。じゃあ帰るぞ」

リドが近づいてきて私の頭をくしゃつと撫でる。
少し照れくさそうに。

「リド、手貸して？」

「手？」

不思議そうに手を差し出すリドの手と私の手を絡み合わせる。

最近撫でられる事や手を繋ぐ事が楽しい。

触るな制限から解放された反動かな？

いきなり手を繋がれたリドは驚きに顔を染めたが、大人しく手を繋いだままでいてくれた。

そのまま宿に帰ったところ、宿屋のおばちゃんの視線が氷のように突き刺さった。…いい加減失恋の傷を癒してください。

「じゃあ今日はもう夕方だし風呂入って寝るか」

「そうだね。じゃあ行こうか」

「着替えもったか？」

「うん」

この一週間で生活日用品を少しだけ買い揃えた。

衣服は王宮の制服だったし、1着しか持ってなかったのでも2、3着軽めに動ける服を買ったりこの冬に備えての防寒具をそろえた。

黒マントは気に入っているが防寒は出来ないらしい。

新しく買った服を持つと宿の側にある公衆浴場へと向かう。
公衆浴場は初めて行った時は銭湯のような所かと思っていたが、まったくの予想を裏切る所だった。

あったのは個室に区切られたシャワー室のみ。

この世界では水に浸かるというのは高貴な神官の沐浴ぐらいで、水を浴びるとというのが普通らしい。

温泉好きの日本人としてお湯に浸かれないのは少しキツイ。

「じゃあまた後でな」

リドはその言葉だけを残して消えていった。

一応個室とは言っても男女は別れている。

私は女性用のシャワー室に入り、服を脱ぐとシャワーの蛇口を捻る。頭の上から暖かいお湯が降ってきて全身を濡らしていく。

髪が濡れて体全体に水滴が走る。

私は髪をそつと1房救って掛けていた魔法を指を鳴らして解く。すると髪は流れる水のようにさあつと色を変えて黒へと変わる。

私の…元の色だ。

ぎゅうつと髪を握り締めて決意を再び固く心に誓う。

元の世界に戻ってみせる。

再び指を鳴らして黒から茶色へと戻す。

そういえばと思って目の中に指を入れ、コンタクトレンズを取り出す。

魔法を掛けて洗わなくても汚れない魔法を掛けてあるので取り出しは無用。

だけど魔法をいまいち信じれず確認する事が度々ある。

緑色に煌くコンタクトレンズに再び魔法を掛けて目に入れる。ちなみに目を保護する魔法も。

これはお姉ちゃんから貰ったんだよな、お土産で。

ちなみにお姉ちゃんという人は親戚で学校の先生をやっている。

鬼塚真子といってとっても美人なのだが親戚の由縁あってか中々恋人を作らない。

確か学校は弟の中学校だったっけ。元気かな？彰。

私はシャワーの蛇口を再び反対方向に捻り、上から降ってくるお湯を止める。

近くに常備してあるバスタオルを取って、体を拭くと最終的には魔法で水分を吹き飛ばす。

勿論髪も完全に乾き、私はポニーテールに髪を纏める。

リドにやつてもらっていらいこの髪型が気に入り今では自分でやっている。

それから新しく買った服：丈の短い紺色のスカートに9分袖の黒いシャツ。

その上から黒マントを着る。黒マントは外せない、もうこれお気に入り。

靴は旅用に丁度いいとされる黒のブーツ。

なんかもう髪以外全体的に黒いぞ、私。なんだこれ習慣か？黒を着るのに慣れちゃってるから？

ポニーテールのためフードは被る事が難しく最近ではフードはすっかりお飾りになってしまった。

そんな事を考えて外に出ると既にリドが外で待っていた。

「リド、待たせた？」

「いやそんな事はない。さっぱりしたか？」

「うん、帰ろうか」

「ああ。帰ろう」

リドから差し出された手を繋いで宿へと戻る。

暗闇に溶け込んでいく2人の姿を1つの影が見ていた。

第十七話：見習いと傭兵のある一日（後書き）

（国の歴史書）

ここセーブル大公国は仕切っているのは皇帝ですが元々は大公様が治めていました。しかし大公様の弟　　前皇帝が大公を暗殺し、国を乗っ取ったのです。それからというものの前皇帝は自らを皇帝と名乗り恐怖政治で民を押さえつけ、好き放題にやっていました。国の名前も帝国に改めようとしたが国民からと大臣からの強い反発でとうとう変えることができず、流行病で亡くなりました。大公には子供がいなかったので仕方なく前皇帝の子、現皇帝が皇帝の座につきました。変わったにも関わらず皇帝を名乗っているのは国民からの要望で、皇帝の子が大公と名乗るのは許せない、だそうです。そうしてこのセーブル大公国は名前が大公国であつても皇帝が仕切るといふ奇妙な国となったのです。

*指摘がありましたので補足させていただきました。

第十八話：大祭の場で（前書き）

あけましておめでとございます。
今年もどうぞよろしく願います。

第十八話：大祭の場で

まだ昇り切らない太陽の光、空に舞う小鳥の鳴き声、横で規則正しく眠る人。

朝、目が覚めたときの感想はたったの3つだがそれがとても幸せに感じられる。

私はまだ重く押し掛かってくる瞼を擦りながらベッドを降りる。

床の冷たさが素足に直接伝わり、寒さに震える。

私はベッドの反対側に回り、横で寝ているリドの顔を覗き込む。

まだ寝てる事を確認して耳を少しだけ触る。

前は触りすぎて起こられたのでちゃんと学習してますよ？

止めようと思いましたが余りのもふもふさに止めれなくなりました。絶妙すぎるもふもふ感…。

少しだけ触った後に、身なりを整え壁に掛けてある黒マントを着る。

「よし…と。そろそろリドを起こそう」

もふもふ感を体験してから少し時間を置いて起こす。
これはもう日課です。

「…普通に起こすのもアレだし…」

うん、つまらない。

「ここは…アレだな」

私はまず、リドを覆いかぶさる布団をむんずと掴む。
そしてお約束展開、布団を一気に剥がす。

冬の冷気をもろに浴びたリドは一瞬で目を覚ます。

「……………リ〜ン〜?」

寝た状態で私を睨みつけるリド。

…やばい、これ説教フラグだ。

私はいち早く察知するとその場から逃走を開始。

ものの数秒で捕まえられました。…獣人足速え…。

そこからはまた正座させられて、しっかり叱り付けられた。

「お前は何度言ったら分かるんだ。普通に起こせ、何故違う事を追求しようとする?」

「そこはほら…。ご期待に応えて…」

「俺はそんなものを期待したことは一度も無いがな。いいか、明日からは普通に起こせ。これ、もう何回も言っているぞ」

「えー…と、リドの普通?それとも私の普…」

「俺のだ」

「……遮るなんて酷い」

「好奇心から聞いてみるがお前の普通は?」

「うん?夢の中でふらふらしていると異様な殺気が襲ってくるから目を覚ますと両親が武器を持って私に襲い掛かってくる」

「分かった、今の質問は忘れてくれ。俺は聞かなかったことにしたい」

「了解」

何はともあれしっかり起きたリドは身なりを整え始める。

…リドって自分では気づいてないみたいだけど結構寝起き悪いんだよね。

普通に起こそうと体をゆすつても中々起きなかったり声を掛けても無反応だもん。

だから普通をしても無駄だから今のような事をやらなきゃ1発で起

きない。

「よし、今何時だ？」

「今は丁度7時」

「もうすぐ大祭開始の合図が鳴るな」

そう言うてにんまりと笑ったリドは窓の方へ駆け、窓を開けて乗出す。

私も窓に近寄り、外を見てみると今日はいつもよりたくさんの方が大通りを歩いていた。

私と同じ旅人のような服装をした人やいかにも傭兵ですといった感じの鎧を着けた人などがいて市外からもたくさんの方が集まっているのが分かった。

そして中央の広場では人が溢れかえっている。

大祭って凄い…！

そう思って見ていると、突如鐘が鳴り響くような轟音が市中に広がる。

その鐘の音と共に人々が騒ぎ出す。何処からか音楽も鳴り始め、一瞬でお祭り騒ぎになった。

「す、凄い…」

「だろ？俺も初めての時はお前みたいになった。さ、行くぞ」

「え…、ちょ…リド。手…！？」

「は？お前がいつもすることだろうが」

不意に手を繋がれてひかれる。

そりゃあ自分から繋ぐ事はしょっちゅうだけどさ…。

リドからなんて滅多に無いよ？

心臓が驚くから勘弁して下さい…。

そのまま外に出ると屋台が道の両端に隙間無く広がり、騒ぎお酒を飲む人の姿が目に入り込む。

（お祭りだ…！何年ぶりだろうなあ…、あの時はたいして楽しむ事なんてできなかったけど今日は楽しめるんだ！）

我ながら子供だと思うようなはしゃぎ方でその光景を見つめる。
リドと繋がれた手を今度は私が引つ張って屋台に近づく。

「おう、らっしやい。カップルかい？熱々だねえ…」

「なッ！？ばっ…カップルじゃない！」

「お兄さん…、怪しさ満点だよ？照れなくて良いから！」

「違いますよ、おじさん。カップルじゃなくて傭兵とその雇い主、です。今日は無理言つて案内を頼んだんですよ」

「なんだ…、お嬢ちゃんの方は慌てないのか。つまらなあ…お兄さんの事嫌いなのか？」

「とんでも無い。大好きですよ、好きでもなきや一緒にいませんよ」

「ふん。良かったなあ、兄さん」

「…店主、あんたいい性格してるよ」

「はっはっは、どうも。それよりおっさん特製唐揚げはどうだ？」

「買います、食べたい！」

「…お嬢ちゃんは色恋よりまだ食い意地のが大切なんだな」

屋台のおじさんとリドとの話がよく分からなかったけど、まあいいか。

おじさんから唐揚げを値切って買うつ、周りにいた人からおじさんが哀れみの視線を受けた。

何故だ…、300Lから20Lにしたから？

案外値切られる事に慣れていない屋台の人間は値切りやすかった…。
城下だったら値切る事なんてできない、むしろ値上げされる。

ふ…ちよろかつたぜ。

「…お前は鬼か」

美味しく何かの肉の唐揚げを食べているとリドから呆れたような視線を受けた。

「失礼な、ただ値切っただけではないか」

「その値切り方が鬼だって言ってるんだ…普通あんな風に値切るか？」

リドが大きく溜め息をつく。
うん、少し回想に入ろう。

『おじさん、高い。そこは値切ろう』

『え…？いや、値切るって…そんなことは…』

『見たところ原材料は50L程…。それを300Lって高い。騙し金も含めて10L』

『な、何故それを！？しかも安すぎる！』

『じゃあ20Lでいいよ。私の良心からで』

『既に値切り方が斬新なせいで良心も何も無いと…』

『で、値切る？』

『いや、それは無理…』

『値切る？』

『え？だから無…』

『値切る』

『断定！？』

『値切れ』

『もう命令形なんだけど！！分かった、値切ります！！』

…てな感じ？

いやあ押しに弱い人でよかった。

城下での買い物スキルが思わぬところで役立ったぜ。

はふはふと熱い唐上げを頬張りながら幸せな笑みを浮かべる。

それを見ていたリドも心なしか笑みを浮かべたような気がした。

そう言えば、この肉って何なんだろ…？無駄においしいけど。

「リド、この唐上げのお肉って何？」

「…唐突だな。それはオークだ。昨日倒した」

「へえ。美味しいね！」

につこりと笑ってリドの方を向くと、リドは少し驚いた顔をしながら口元を緩めてああと呟いた。

その顔が嬉しくて頬が赤くなる。

リドの笑った顔は好きだ。

私の手に入れた笑みとは全く違って温かみがある。

私の笑みは大抵、作り笑顔か愛想笑いぐらい。

けどリドといてからは自然と笑みが零れる事があるようになった。

それがリドと同じ笑みなのかは分からないけど私からも笑みができる事がわかって嬉しかった。

もしかしたらこの世界に飛ばされた理由って私に人間らしさを取り戻そうとさせてくれた神様の粋な計らいかな、なんて。

そんな事を考えるまでにリドといると私は人間らしくなっていく。

「リド、広場では何があるの？」

「広場は音楽会が開催されている。見に行くか？」

「もちろん！」

人混みを掻き分けながら広場の方へと進み、広場がなんとか見えるような所へと来れた。

広場ではステージのような所で楽器が置かれ周りの人々は何かを待っているような面持ちでステージを見守っている。

「あの、すみません。今から何が行われるんですか？」

隣の女性の人に話しかける。

すると女性はふわりと恋する乙女のように顔を赤く染めながら笑った。

「歌姫様のステージに決まってるじゃない！！あの方…、今日はたまたま用事があってルーメンにいらしてたらしくて…。今日は特別舞台を披露してくれるらしいの！！」

興奮したように話す女性に多少引きながらお礼を言う。

歌姫か…。そんな風に呼ばれるなんてよっぽどの歌上手なんだろうな。

少し楽しみかも…。

「ね、リド聞いた？歌姫だって…」

リドの方を振り向きつつ話しかけるとリドが驚いたような顔で固まっていた。

その顔には尋常ではない冷や汗が流れ、心配になる。

…どうした、リド。

「…リド？」

もう一度話しかけるとリドはやっと気づいたように私の方をゆっくりと向く。

「あ…ああ。何だ？」

「だから歌姫…」

「言っな！！」

ビクリと体が跳ねる。

リドがいきなりの大声を出すなんて本当にどうしたんだ？

「あ、悪い…。いきなり怒鳴って悪かった…。気にしないでくれ、それよりかそのフード貸してくれないか？」

「フード？ いいよ」

「すまない」

ナイフでざっくりと私の黒マントのフード部分を切り取ったリドはそれを自分の頭にかぶせる。

おかげであの虎耳と美形顔が隠れる。

…本当にどうした？ 訳の分からない行動を説明なしでやられるとこっちは辛いんですけど？

そんな時、突然周りが沸いたように黄色い声を上げ始める。

その声は鼓膜を破らんとする程で耳を押える。

微かに聞き取れた単語で歌姫様というものがあつたところからまさかの本人登場？

ゆっくりと顔をステージの方へと向けると、ステージの中央には女神がいた。

…いや、比喻だけどね！？

そう思うくらい綺麗な人がステージに堂々と立っていた。すらりと伸びた手足にマーメイドドレス。スタイルの良さが強調されている。

白い肌に神様に愛されているとしか思えない程精巧な顔の造り。唇がぶっくりとして髪は少しカールのかかった金色の糸。

どこをどう取っても完璧としか言いようの無い美人。
誰もが彼女を見れば感動するほどだが、不思議と私は何も感じなかった。

その理由は彼女の瞳だろう。

他は完璧すぎるほどで勿論瞳も少しツリ目で綺麗な藍色を浮かびだしている。

だけど何も感じられないような無気力な瞳だった。
何か大切な物をなくしたような、そんな瞳だった。

「悲しい瞳……」

そんな声が無意識に漏れる。

その声に反応したリドが不思議そうに顔を傾げる。

「どうゆう意味だ？」

「あの人、随分悲しい瞳してるなあ……って」

「……何故分かる？」

「私は人の観察に慣れてるからそう感じたただだよ。大した意味は無いから気にしないで」

「……そうか」

リドはそう言うのと顔を俯く。

私は再び彼女を見る。

すると、歌姫は大きく口を開けた。

その瞬間、後ろのバイオリンやトランペットが一斉に音楽を奏で始める。

美しい音色が響き、観客は聞き入る。

そこで歌姫はゆっくりと開けたままだった口から息を吸い込み、喉を震わせる。

歌姫の生み出す音色と音楽が混じり合い、とても綺麗な音楽が生ま

れる。

周りはずっととした表情でそれに聞き入り、音楽に集中するために瞼を閉じていた。

隣を見てみるとリドも瞼を閉じていた。

「ただ周りが感動を流す中で私だけが感動できずに突っ立っていた。人間らしさを取り戻す事が完全では無かった私にはまだ感動するという事が難しいらしい。」

今まで言葉では感動というものを使っても感動が分からない私は感動ができない。

歌姫の音楽は確かに綺麗だし美しい。けど感動が出来なかった。いや、歌姫の音楽が悪いわけじゃなくてね？私が悪いんですよ！。

（感動：ねえ。リドの優しい言葉には感動するけど…）

昔、誰かから感動すると涙が出ると聞いた事がある。

そして気づいたら歌姫の歌は終わっていて、周りが歓声と拍手を上げた。

漠然とああ、終わったのかと、そう思っただけだった。

自分だけ何もしていないのは変だから合わせて拍手を送る。

「皆さん、こんにちは。サタナキアレライエです。今回の歌は新曲なのですが楽しんでいただけたでしょうか？」

するとマイクを使って歌姫こと、サタナキアは紹介を始める。

マイクは魔法で音の拡大をしている。

この世界では、魔法を使って現代で見られるような物もたくさんある。

たとえば、携帯電話と似たような装置が良い代表例だ。

「まだもう1つの新曲があるのですが聴いて貰えますか？」

その声に賛成というように観客の声が響く。

「ありがとうございます。この曲は楽器を変えなくてはいけないので変える為にしばらくお時間を貰いますね」

サタナキアがそう言うと、楽器の伴奏者が下がリステージの奥から楽器を持つ人の姿が見えた。

そこで私は少しだけ驚く。

楽器を持ち運びしているのは小さな男の子なのだ。

その男の子は間違いなくギルドで出会ったあの天使のような姿を持つミカエルだった。

重たそうな楽器を持って並べる係りのようで額に汗を浮かべながら頑張っている。

ああ、可愛い…。

「リド…、あの子」

「だな。まさかあいつの差し金か…？」

呟くように言った最後の方の言葉はよく聞き取れなかった。

私は必死に楽器を持つミカエルに見入っていた。

…てあれ？あの子って私に盗聴術かけた張本人じゃ…。

ま、細かい事は気にしないところ。きっと何かの間違いだよ。

……私って子供好きだったんだなあ。

「では新曲を披露させていただく前に、紹介させて貰いたい事があるのです」

いきなりの重大発表みたいな事から観客がざわつく。

「実は先日あるパーティーからお誘いを受けまして、その皆さんを紹介したいのです」

ざわつきが一層大きくなる。

おお、歌姫の加入パーティーか。気になるよね、そりゃあ。

ステージの奥からゆっくりとそのパーティーが姿を現す。

私はそこで目を見張る。

……嘘でしょ。

現れ出たのは、よく見知った顔。

そこにいたのは紛れも無く勇者一行だった。

第十八話：大祭の場で（後書き）

再会なるか？

第十九話：勇者との再会

人で埋め尽くされた広場の中央、歌姫のステージにて現れたのは勇者一行。

私は驚きで固まる。

勇者は反対方向に行っていたでしょうが…！

何故ルーメンにいるんだよ…。

ステージに立つのは、あのハーレム4人と歌姫、それにミカエル。そして…勇者。

あの笑顔の仮面を貼り付け、ステージに堂々と立っている。

しかし口は確かに笑ってはいるが黒色の瞳は全く笑っていない、むしろ絶対零度の冷たさを誇っている。

しかも何故かその瞳が私を見ていると言つのは絶対気のせい、気のせい…。

こんな人ごみの中で私を見ているとかどれだけ自意識過剰なんだ。

私はリドを見て目配せをする。

リドもこの状況の危機感は悟っていたらしく、ひとまず観客のフリをすることになった。

ただし顔は伏せがちのまま。

うゝ。リドにフード取られてるからなあ…。

「大丈夫だ。いくら勇者でもこんな人混みでお前には気づかない」

「と言うか何で私って勇者に狙われてたんだっけ？解決したよね、確か。探さないで下さいで」

「あつちは何故かお前に異様に執着してたけどな」

「そこまで仲間がいるかな？傭兵でも雇えばいいのに」

「よく分からんよな」

「勝手に断りも入れずにパーティ離脱しちゃったから怒ってるのか

な？プライド傷つけたとか」

「それが一番可能性あるな。しかしどうあっても勇者とは接触しない、これがお互い良さそうだろう」

「そうだね。ひとまず観客のフリ」

大丈夫、私は平凡顔だ。

こんな大勢の中にいるんだから溶け込んでいるはずさ。

ゆつくりと視線をステージの方に向けると、バチリと勇者と目が合った様な気がした。

その瞬間、勇者は口元の笑みを更に深めた。

……気のせい……だって……。

じわりと冷や汗が流れ落ちる。勇者なんか私ごときに気づく訳無い……。

視線が合ったまま外せないでいると、勇者がおもむろにステージの中央まで歩いていきマイクの前で止まった。

そしてそっと口を開けた。

「……初めまして、観客の皆さん。私は異世界から召喚された勇者リユートと言います。まだ正式に発表はされていないのですが知られている方は知られているでしょう」

とゆうか瞬夜が起きたんだから誰でも知ってるよ。

「実はこの度新たな仲間として歌姫をお誘いした所良い返事を頂いたので我がパーティに加入していただきました。そしてそれを皆様に知って頂くために今回はこのような場を借りて言わせて頂きました」

「そう言うことです、皆さん。ですから私のステージはしばらくは行えなくなるかもしれませんが。申し訳ございません」

歌姫が深々と頭を下げる。

歌姫の言葉を聞いた観客は悲しそうな声と雰囲気醸し出す。
私も周りに合わせて顔を両手で覆う。

多分これでいいはず。

「ではこんな発表のために耳を傾けていただきありがとうございます。……ごさいました。……歌姫」

「はい、では新曲の発表をさせて頂きますね。ご視聴下さい」

勇者は何やら歌姫に耳打ちをしてからパーティと共にステージから下がった。

歌姫はそれを見届けた後に再び口を開き、歌い始める。

さつきと同じような感動の渦が巻き起こり、私も感動と言ったように瞳を閉じる。

綺麗な声だけど何故か空っぽのように聞こえる。

貴方は何を無くしたの？そんな悲しい声で歌って何に気づいて欲しいの？

そんな声が途切れる頃に歌は終わる。

周りの歓声と共に。

（やっと終わった……。それにしても他人に依存するような声だったなあ）

うん、誰かに帰ってきて欲しいような縋った声だった。聞いてて気持ちが悪いなあ。

恋人か家族が死んだのかな。

「……ご視聴ありがとうございます。これで終わりなのですが、今日を境に活動を休止しますので皆様にファンサービスをしたいと思っています」

満面の笑みで微笑む歌姫の放つ言葉に会場が沸く。
ファンサービス？

「誰かお1人に舞台へ上がって頂き、私からの花束を受け取っていただきたいのです」

その瞬間観客は奇声をあげたり、叫び声をあげる。
…あの、うるさいです。

「……そして上がって頂きたいのはそこにいる茶色の髪の子です」

ビシリと歌姫の長い人差し指が私のいる方を指す。

………は？

…気のせいかな。誰だ、茶髪の女の子って。私はきょろきょろと周りを見回す。

一面茶色だらけ。その中に点々と違う色が混ざっている。

「えっと、黒マントのポニーテールの貴方です」

…あれ、私？

完璧特徴一致??

何このフラグ…。花束なんて貰ってどうすればいいのさ。

「…リド」

「……ひとまず行け」

「…うゝ」

一歩足を踏み出すと前の観客が綺麗に道を作ってくれる。

…モーゼか!?

行かなきゃならない雰囲気になり、足を進める。

ステージ前まで来ると階段を使ってステージに上がり、歌姫と顔を合わせる。

いやあ、本当に美人ですね。きらきらしたオーラが舞ってますよ。

「初めまして。聞きたいんだけど……、貴方がリン・ヒョードさんで間違い無いわよね?」

「…それが何か?」

「合ってたならいいのよ。ウチのリーダーが貴方に会いたがってるの。会ってやってくれないかしら?」

「断ります」

「…即答なんてツレナイわね」

「とりあえずどうでもいいんで早く花束下さい」

「はあ…わかったわ。はい」

歌姫の腕から赤い花の詰まった花束が私の手に渡る。

ポワンと良い香りが鼻孔をくすぐる。

ふむ…、何て花?

花束を覗き込むとその瞬間、花から何かのガスのような物が唐突に私の鼻に向けて噴射する。

頭が理解するよりも早く体が咄嗟に花束を投げ捨てる。

あ、危な…。…少し嗅いだけどあの匂いは…催眠ガスか…。

なんつーモノ渡すんだ、この人…。

一連の流れを客観で見ていた観客はハットしたように我に返り、ブーイングを騒ぎ始める。

…うっさい、外野め。

「…なんて事するんですか?」

「ふふ、言っただでしょ?リーダーが貴方に会いたがってるらしいの」

「ああ…そう」

「そうよ。貴方を連れて行けばまたあの人に会えるもの！」

「…貴方の事情に私を巻き込まないで欲しいんですが？」

「五月蠅い！あの人と会うためなら私は他人なんてどうでもいい！」

…こりやまた典型的な自己中心タイプですな。

「だから…眠らなかったってその時の対策はしてあるの」

…してなかったら随分私も甘く見られていたよね。

「…皆さ〜ん！どうやらこの花束、花が枯れていたらしいんです！悪い事をしてしまいましたのでこの人にはお詫びをしてきたいと思っています！それまで皆さん、待ってくれますか？」

歌姫は体を正面に向けマイクで大声を発する。

可愛らしく首を傾げ、有無を言わさない状況へと持っていく。

どうしても勇者と私を会わす気が…。

さて、ここで腹を決めるか振り切るか…。考えるまでも無いね、素直に付いてくだ。

下手な事してリドに迷惑かけたら悪いし。

私はリドのいる方向を見て、リドを見つける。向こうも会話には何となく気づいてくれたらしく緊迫した表情だった。

私は声を出さずに口をゆっくり動かす。

『今日の昼御飯は屋台でいいよね』

につこりと笑顔で口をパクパクさせる。

リドはフードを少しだけ外し、苦笑して口パクで勿論だ、と返してくれた。

じゃあ行つて来る。

「さ、行きましょうか」

「逃げ場無さそうですね、すしいいですよ」

「減らず口…」

「失礼ですね」

素直にステージの奥まで付いていき、ステージ裏に連れて行かれる。そこには案の定、勇者が仲間と佇んでいた。

…不機嫌そう。

瞳はさつきと変わらず絶対零度。頼むからやめてそれ。

「……リン」

呼ばれた声に体が跳ねる。

声冷たッ!?

鋭く光る黒い瞳は間違いなく見つめただけで誰かを射殺せるはずだ。

…ここはひとまず挨拶からか？

少しでもこの雰囲気緩和したい…。

えーと…、お早うございます? いや、まずは謝罪からか？

挨拶の出何処から戸惑ってるぜ、私よ。

四苦八苦していると唐突に腕を掴まれる。

掴んだのは勇者。そのまま、引きづられるようにして何処かへ連れて行かれる。

え…ちょ、誰かヘルプ…ヘルプミー!!

叫べるはずも無く為すすべもなく大通りの裏路地へ連れてこられた。…これまさかの説教フラグ? 嘘でしょう、説教はリドだけで十分ですよ?

「…リン、お前今まで何してた？」

演技が取れて不満が一気に顔に現れ出る。

いや、笑顔も怖かったけどこっちはこっちで数倍怖い！！

「……ギルドの依頼ですが何か？」

何故か対抗する私。

「…あの男は？」

「あの男？リドの事ですか？」

「リド？その男はどこにいる？」

「広場にいますよ。ついさっきまで一緒だったので」

私は何とかこの尋問から早く解放されたい。

けど前勇者、後ろ壁。悲しきかな。

「用がそれだけなら私は失礼…」

唯一の逃げ道横から逃げようと脱出を試みる。

その瞬間、ダアンと大きな音をたてて勇者の腕が壁に伸び、完璧に閉じ込められる。

…これはやばい。

目の前勇者で完全ホールド。

「あ、あの…」

「…お前さあ」

顔を俯ける勇者。

どうした？少しだけ何事かと思い、手を伸ばそうとすると唐突に体

が2つの腕によって搔くように抱きしめられる。

………はい？

視界が翳り、体に腕が絡む。

額に熱く荒い息がかかる。

……こ、これ一体何してるのさ。勇者。

「いい加減にしろよ……。どんだけ心配したと思ってるんだ、いきなり消えるし男と一緒にだし……」

甘く耳に囁かれる。

背中にゾクリと電撃のようなものが走る感覚がした。

「凜……」

静かなのに甘い声が熱い吐息と共に耳に入り込む。

………ってあれ……？

今の私の名前の発音が『リン』じゃなかったような気がしたけど……。

気のせい……かな？

そ、それよりこの状況……！放せ、勇者……！

私は何とか放して貰おうと勇者の胸をどんと叩く。

すると逆にもっときつく腕が絡まりつく。何故……？

「やっと見つけたんだ……、逃がすわけ無いだろ……」

勇者の顔が私の肩へと沈み込む。

いやいやいや！放してくださいって……！！

重く押し掛かってくる勇者の体に潰される……！

「っ、潰れる……」

掠れた様な声を絞り出すと、気づいてくれたらしい勇者は慌てて放してくれた。

…た、助かった。

力強すぎです、勇者…。

「わ、悪い。大丈夫か？つい加減を忘れた…」

「…まあ別に私が悪いからいいんですけどね…こぼッ」

少しむせた…。

流石禁術を一身に受けただけある…。

「じゃあそろそろ帰ります…」

「は？帰るってどこに」

「広場ですよ？」

「…あの男か？」

「へ、まあ…」

「じゃあそいつなら今はステージ裏だろ。…捕まってるはずだ」
「…？」

リドが捕まってる？

…ダッシュ！！

「お、おい！？待てって！！」

「リドの馬鹿…！呼んでくれれば助けに行くのに…！！」

「それ普通男が言う台詞だろ」

「それより捕まっただって！？」

「うん？聞いてないのか？」

先ほどのステージ裏に向けて走る中、勇者は涼しい顔で後を追ってくる。

そして額に汗を一滴浮かべてステージ裏に着くと、そこには目を見張るような光景があった。

「リド様！ーやっとお会いできました…、貴方のいない日々、世界から色が消えたようでした…！！」

「放せ、サタナキア！何故お前がここにいるんだ…！」

「愛の力…です…！」

「寝言は寝て言え…！」

椅子に縛り付けられたリドが足にしがみつく歌姫であるサタナキアを足蹴にする光景。何てシニール…。

しかもサタナキアの方は恍惚とした表情。…まさかのDM。
それにしてもこの光景は一体…。

「歌姫はあの男…リカルド」ベラフォルトに心酔しているらしく、今日の舞台はあの男を捕まえるためだったらしい」

勇者よ、分かりやすい説明ありがとう。

それにしてもリドってばあんなに綺麗な人に好かれちゃって…。
お似合いのカップルですな。

「リド、お母さんは悲しいよ。こんなに綺麗な彼女さんがいて紹介もしてくれないなんて…」

「誰がお母さんだ誰が…！こんな変態を彼女にしたつもりも無い！とりあえず助ける、リン！」

「あ、助けるといえばどうして捕まったとき私の名前を叫ばなかったのさ。何かあったら私の名前を呼んでよ、守るから」

「何が悲しくて男が女に守られなきゃいけないんだ…！お前は馬鹿か！」

「男女差別反対ーしかも馬鹿って言ったーもう助けないから！そこ

で一生彼女といちゃついでろ!!」

「リド様…嬉しいです!!」

「うわあああああ!! 寄るなあああ!!」

「おお、リドの絶叫とは…。中々貴重だ」

「頼むから助ける、リン!!」

「あともうちよい」

「何があともうちよいだ!!」

その後、ステージ裏をこっそりみていた係員からの話に寄ると、物凄いかオスな光景だったらしい。

椅子に縛り付けられた男が天下のアイドル歌姫を足蹴に、それを見て笑みを浮かべる勇者と私に少し引いているハーレム。

歌姫ファンの1人だった係員は泣きながら話してくれた。

うん、ご苦労様。

第十九話：勇者との再会（後書き）

次回から一気にカオスになりそう…。

第二十話：悪夢の再来

「と言うことで私、リカルド様の恋び……」

「そろそろ黙らないと本気で怒るぞ、サタナキア」

「あぁん……貴方に怒られるなんて光荣です……」

サタナキアのステージも終わり、少し話があると言う事とある力
フェに場所を移した私達は周りから痛々しい視線を浴びている。
原因はこの目の前でいちゃつく2名。

サタナキアは幸せといったオーラを満面の笑みで表しているが、リ
ドは世界の終わりとも言ったような沈んだ顔だ。

私はそんな2人とはいかにも他人と言った感じに優雅にお茶を飲む。
勇者も同じように。

あ、ちなみに勇者の周りにくつつくハーレムには宿に帰っていただ
きました。

帰っていくときのあの恨みがましい視線……中々の眼力だった。

さて、そんな事よりも今はこの状況を整理しないと。

「……でさ、リド。私というものがあらながら恋人なんて作ってた
訳を言いなさいな。怒らないから」

「まずはお前の頭の治療をしようか。いつお前が俺のものになって
サタナキアと浮気したなんて事になった……」

「まあ！リン＝ヒョード！！私のリカルド様を誘惑したの……！！」

「そっちこそ……！私のリドを誘惑したのね……！！」

「とりあえず黙れえええ……！！」

リドの怒鳴り声が店内に響き、店内は静まり返る。

ちえ……、少し冗談入っただけなのに。

全く、女心と冗談が分からない奴だなあ。

「……はあ…、すみませんがまともに話をさせてもらえませんか？」

ここで、さっきまで我関せずと優雅にお茶を飲んでいた勇者が話しに割り込む。

しかも演技が入っているおかげで周りのお客をちゃっかりと誘惑している。

演技の勇者って慣れない…、本性が悪ど過ぎるもん。

「わ、悪い。……えーと…まずサナキアとは幼馴染だ。小さい頃から一緒にいて、仲が良かった。そしてだんだん年を重ねることにサナキアが異様に執着してくる様になった……んだ」

「それに耐えられなくなったりドは傭兵となり、離れる事を決意。だがここでサナキアに再会してしまった！…かな」

「お前は人の心でも読めるのか？ 大方その通りだ」

「サナキアさんも間違いないですよね？」

「ええ。リカルド様との出会いはあの雪の降る冬の12月24日15時43分22秒で、会ったときはそれは可愛らしくてまだ5歳4ヶ月の時でした。お話し相手としてリカルド様と出会いお会いしたときから一目ぼれでその思いは一向に募るばかり…。そしてその思いが止まる事は無いまま爆走していた所……」

「あ、もういいです。黙ってください」

終わりが見えない様な気がしたから話を区切る。

…普通出会いの日といえど秒刻みで覚えます？

幼馴染なんて美味しいシチュなのリドの容姿の良さが裏目に出たね。

「……2人の関係は分かりました。では貴方達2人の関係は？」

勇者が指をさした方向は私とリド。
関係？傭兵とその雇い主ですが何か？

「リンは敬語が取れてる上にリドって愛称ですよね？」

…そこ別に気にしなくても良くねえ？
細かい所気にするなあ…。

「リドは敬語が苦手みたいだし、リドっていうのはリカルドが長い
って事からですよ」

「……そうですか。では私にも敬語はやめて貰えますか？」

「…別に構わないけど、敬語嫌いが集まるね」

どうしてこつても敬語嫌いが集まる？
普通敬語って嬉しいものじゃないの？

「…それでは関係も把握できた事ですし本題に入りましょうか」
「本題？」

「はい、単刀直入に言うと…リン〃ヒョード、リカルド〃ベラフォ
ルト仲間に入ってもらえませんか？」

……………悪夢再び！？

「嫌だ！」「」

リドと私の声が重なる。

何故また悪夢になりそうな事に好きではいらにやいかんのだ！
リドもサタナキアが勇者パーティにいることから断る。
すると勇者はにっこりと優雅に微笑む。

「……………そう、じゃありカルドさんの話は聞けないしリンが行こう
としての情報都市への道を閉じようかな」

「是非お仲間にして下さい！！」

お、恐ろしい！！

こいつ脅迫ネタで揺すってきやがった！！しかも権力乱用する気満
々だよ！

思わず叫んじやったよ…ああ、悪夢からは逃れられないの？

「良かった。実は、宿で待機してもらってる皆さんは首都に帰るよ
うに要請を貰ったらしくて今仲間を集めてて」

「だからサタナキアさんを？」

「あともう一人いますよ。ミカエルって言っんですけど」

「ミカエル君……ってことは盗聴術を掛けさせたのは……！」

「何のことか」

「あんな子供を刺客に送り込むなんて……！やっぱり仲間になるって
の取り消……」

「簡単に仲間になるのを止めるなんて言いませんよね？自分の言っ
たことに責任は持たないと」

「くッ…言質を…！」

やっぱり演技背負ってても悪どい勇者。

もう魔王やってよ、魔王職の方が絶対似合っつて。

「あの4人はだから宿に戻らせたのね」

「すぐに戻るようにと言われてるらしく多分今頃は帰路についてま
すよ」

「薄情ね、仮にも仲間だったんなら見送りぐらいすればいいのに」

「元々仲間は1人で良いと言ってましたから」

サタナキアはやれやれと呆れたように肩をすくめる。

…本当に薄情というか何というか。

仮にも1週間行動を共にした相手ならもう少し労ってやればいいのに。

じとりと勇者を睨む。

……睨み返された、何故笑顔で睨める？今どうやって睨んだ？

「…リン、悪い。勢いで仲間になると言っただが本当にいいのか？」

「どうゆう意味です？何故リカルド様がリン」ヒヨードに決定権を委ねるような事を？」

「リドの今の雇い主だからだよ」

「え…？待ってください、それはおかしいです。だってリカルド様の雇い主は…」

「サタナキア、お喋りが過ぎる」

「……あッ、ご、ごめんなさい……」

「おおっと、今の怪しい発言。……と思ったところで問い詰める気はさらさら無いけど」

「お前のそう言うところは感心が持てる」

「基本厄介事嫌いなもんで」

少し気になった発言が出たとしても追求はしない。

こちらの世界に来てから好奇心で動きまわってた事あったけどそのせいで痛い目見たこと何回もあるしね。

例えば少し変わった地形が珍しくて突き進んでたら魔物に取り囲まれたり、怪我した老人に道案内してたら盗賊に襲われたし。

…全部完膚なきまでに叩きのめしてやったけど。

それに今の発言はどことなくおうけど私に関係の無い話らしいしどうでもいい。

他人の厄介事に関わるとろくなことが無いなんてことは今時小学生でも知ってる。

私はまた目に前でいちゃいちゃしだした2人を尻目に勇者に小声で話しかける。

「それよりさ、勇者。仲間になる事は承諾したけどこれから何処行つて何するの？」

「ここから少し迂回してフィルカ村に向かい、そこから船で魔族の陣地どる辺境に行く」

「なるほど、真正面攻撃でなく背後からの攻撃……。考えるね」

「そこまで奴らを舐めてるつもりも無いからな。一気に叩く…事は出来ずとも不意打ちは可能。相手に心理的圧迫を与える」

「流石、勇者様。とでも言っておくね。私はなるべく傍観者に徹するから頑張つて」

「やつぱり参戦する気はないんだな？」

「うん、だから守つてね」

「……………はあ、分かった」

正統派勇者なら真正面から挑んで散るのがモットーだがさすがはこの規格外勇者。

作戦を練り、いかに相手を倒す事ができるか考えてる。

こうゆうの好きだわ。

たとえ失敗した事も含めて相手に確実に与えられる一撃の作戦を練る。

軍師であつても中々考えられない。

改めてこの勇者の凄さを感じる。これなら魔王打倒も夢じゃないかもしれないよ？

（だとしたら…キープスで違う帰り方を探す必要は無くなった。このまま魔王の大切な物とやらに頼ってみようかな）

余計な寄り道が消えた今、目指すは魔王打倒か。

…けど大分強いって聞いたしなあ、私も腕にはそこその自信があるけど不安要素は消しておきたい。

勝てなくても確実に魔王の大切な物を手に入れられれば私はいい。勝ちに執着する事なんてない。目的を果たす事のみに執着してきた。そのためには、やはり図が必要か？

…はあ、とりあえず旅をしながらでも効率よく魔王を翻弄しつつ大切なモノを手に入れる方法を考えよう。

…我ながら非道な事を考えるな。

ま、こんな考え方を非道と思えなかった前の私がおかしいのか。

「じゃあそろそろ行こうか、リド」

「は？」

「屋台だよ、屋台。屋台なんて久しぶりだから楽しみにしてたの！」

「そういえば言っていたな。分かった、行くか」

「え、じゃあ私も行きます！」

「私も行きたいですね」

「勇者とサタナキアさんは表に出たらまともに歩けなくなるでしょ」

「そうだな、サタナキアは歌姫だし勇者は勇者だからな」

「そ、そんな…。私が…もう不要だとおっしゃるの？リカルド様…」

「…今更なんだけどサタナキアさんって被害妄想強いよね」

「本当に今更だな。お前ならとくに気づいてるとおもってたんだが」

「私はそっち系には疎いほうみたいだね」

ぶっちゃけると私は彼氏いない暦イコール年齢だ。

というか作りたいと思った事すらなかった。

両親が大恋愛の末に結婚し、現在でもラブラブなため暑苦しいと思いつけた結果かもしれない。

仕事中はそんな事無いのにプライベートスイッチが入った瞬間ラブラブになる。

恋愛に関する本は読んでいたので恋愛についての関心はあるがこんな恋愛をしてみたいと思った事は無い。

あくまで空想、と割り切る事が多かった。

勿論恋愛だけでなく違うジャンルの本も読んだ。

そこで今思い浮かぶのは異世界トリップものの本だ。

恋愛やアクションの方面が多いこのジャンルは読んで面白いは感じたがあくまで空想だったので現在こんな事が起きてるなんて空想も馬鹿に出来ないなと思っている。

…ほんと、馬鹿に出来ないな。

「じゃあサタナキアさんと勇者、また後でね」

「待ち合わせは宿でお願いします」

勇者とサタナキアを置いて、カフェを出ると一面に広がる屋台を回っていく。

…見知ったような屋台が1つもないけど良い香りが漂ってくる。

「美味しそ〜、おじさんこれください！」

「おっと、嬢ちゃんやめときな。これは子供の買える代物じゃねえよ。金貨2枚という超高額な高級食材のフライなんだ」

「ふっふっふ、舐めてもらっては困る。……はい」

ポーチから金貨2枚を取り出して差し出すと屋台のおじさんは驚き目を見開いた。

「なッ！嬢ちゃんを舐めてたか…、どつかの貴族かい？」

「旅人だよ、稼いだのさ」

「そうか…、まあ金さえ持ってりゃ小さくても客だ。ほらよ」

串に刺さった揚げ物が差し出され、一口かぶりつく。

うん、うまい。

そしてその後も屋台で食べ物を買ひ捲る。

両手が食べ物でいっぱいになってきたその頃、いきなりある屋台からブーイングが巻き起こった。

「ふぁひ？（なに？）」

「分からん、言ってみるか？」

「むぐ（うん）」

言ってみると、そこはどうやら射撃屋らしく中々的が倒れないとクレームを受けているらしい。

ほほう、射撃の典型的なクレームだね。

しかもクレームをつけているのは見るからに不良と言った感じの男集団。

むむ、店主は可愛らしい女性。これは頂けない。

この正義のヒーローが助けてしんぜよう。

「ひほ、ほえもっへへ（リド、これ持ってて）」

「え、おいちょ…待て」

「パリモグモグゴクン……ふはぁ、大丈夫大丈夫！」

両手に持っていた食べ物をリドに預け、クレームをつける男集団の方に寄る。

「まあまあ、クレームなんて大人気ないぞ。的が倒れなかったのはあんたらの腕の悪さが原因だろ？」

「何だこのガキい！！」

「射撃っていうのは狙うところを狙えば倒れるもんなんだよ。それを出来なかつたくらいでピーピー五月蠅いんだよね。大人しく金を払って立ち去りな」

「このガキツ、ゆうにことかいて……!!」

「止める、馬鹿」

集団の中で一番大きい体格の男が殴りかかるがリーダー格な男がそれをとめる。

可愛い女性をいじめるなんていけません、ちょっと心を鬼にしてください。

なので若干口調がおかしくなっておりますが気にせず。

「……確かに俺達の腕の悪さもあるかもしれないが的には細工がしてあるんだ、絶対に倒れないように」

「ふむ、やはりこっちの細工も定番か……」

「的の後ろに鉄がはめ込んであつて絶対に倒れないんだよ」

私はそんな言い分を無視して射撃の銃を取る。
そして、射撃に弾を当て込み狙いを定める。

「おい、何やってる？無駄だぞ的は倒れない」

カチリと引き金を引き、的の急所に弾を発射。
こつんと的に弾が当たるが確かに倒れない。……て言うか1mmもぶれない。

あー……確かにこれはクレーム付けたくなる。

「言ったとおりだろ？分かったら下がってろ」

「……しょうがない、本気で撃ちぬくか」

「は？」

私は再び銃に弾を詰める。

射撃の銃というのは構造的には単純なもので、引き金を引いてその

反動で弾が出るものだ。

つまり引き金を引く速さによって弾の速さは決まる。

だったら話は簡単。思い切り引いて、鉄ごと撃ち抜けば良い。狙いを定めて、そのとおりにしてみた。

すると案の定、小気味良い音と共に的にはぽっかりと穴が開いた。うん、正義は必ず勝つ。

「やった、撃ち抜けた。お姉さん、商品頂戴」

「え…え、う、嘘…」

鉄ごと貫いた銃の威力にお姉さんは呆然。

何を呆れるのやら、元々銃ってのは人体の骨もを撃ち抜くために作られたんだ。

その銃が鉄を撃ちぬけないはずない。

「あゝ、倒れなかったけど撃ちぬけた賞が欲しいな」

「ごごごご、ごめんなさい〜！」

につこりと笑って商品のおねだりをする又何もくれないままお姉さんは逃亡。

いつの間にか男集団も消えていた。

…ひとまず解決でいいやあ。

私はリドのところへ戻ると、再び食べ始める。

「…お前は、本当に謎だな」

「ほうはな〜？（そうかな〜？）」

「…ほら」

「ふむ？（うん？）」

「撃ち抜き賞だ」

差し出されたのは綺麗な琥珀色のネックレス。
いつの間にか買ってたのさ？

「あいあとお（ありがと）」

「どういたしまして」

「モグモグ…よし、今度はあの屋台…！」

「まだ食べる気が…？」

「当ったり前よ、さあ倒れるまで付き合ってもらってからね！」

「お前…、太る…ぐはッ！」

「はいそこ乙女に向かって何てこというの、めッ」

私は食べ物を両手に抱える中で、琥珀に輝くネックレスをぎゅっと握り締めた。

第二十話：悪夢の再来（後書き）

だんだん距離の縮まる2人。

く補足く

5億LⅡ金貨50枚分。

つまり金貨一枚で100万円の価値。

通貨は金貨とL札、L貨のみ。

L札1枚で1000L。L貨1枚で10L。

…金貨使い勝手悪い…。

1月8日補足

第二十一話：子供は天使（前書き）

ハーレムはゲストキャラとなってしまった…。

第二十一話：子供は天使

大祭が終わり、ルーメンに朝の光が射す頃に私達はルーメンを立ち馬車でフィルカ村へと向かっていた。

馬車の中では、勇者が瞼を閉じて瞑想しサタナキアがリドに寄り添い甘い雰囲気を出すのをリドが諦めたような顔をして見ている。

それと、馬車の揺れで眠りを誘われたミカエルを私が膝枕している。客観的に見てみるとなんてカオスな光景なんだろうか。

とか思ったが、ミカエルの寝顔が天使というよりも神様化しているせいで不思議と全てがどうでもいいように感じる。

ミカエルとは今日の朝に出会った。

勇者の仲間になってるのは勇者に命を助けられたからだそうで、その恩を返すために雑用として入っているらしい。

昨日のサタナキアのステージで楽器運びをやっていたのもそれが原因。

そしてギルドで会ったのも案の定勇者の差し金で、街で見かけた私を探れとか言われたらしい。全く意味が分からない。何をしたかったのさ、勇者。

その際に何故か懷かれてしまった私はミカエルと仲良くなり、現在に至る。

「うん……ふああ、リン……さん？」

「うん？目え覚めた？」

「……はい、おはようございます……」

「おはよう、よく眠れたかい？」

「おかげさま……で……ってうわああ！？ご、ごめんなさい……！」

ミカエルは現在の状況に驚いたようで飛び退く。
癒しに逃げられた……。

「どうして逃げるの？」

「い、いえ…あの、ごめんなさい…」

ミカエルはもじもじと顔を赤く染めて、俯く。

「あ、あの…僕…頭、重くなかったですか…？」

そしてまさかの乙女発言。頬を赤く染めた上目遣いは破壊力抜群だ。
……可愛すぎる！

思わずミカエルを抱きしめる、気持ちは大きなぬいぐるみに抱きつく女の子。

「ああ、もう何その可愛さ！襲っちゃいたい！！」

勢いのままに発言すると、リドが盛大にこけ出した。
…座ってるのにこけるって凄いな。

「…何て発言してんだ、お前はあ！！」

「え、何か変な発言した？」

ミカエルに抱きついたまま首を傾げると、リドが私とミカエルを剥がす。

ああ、ミカエル…！

「お前は…！自重と言っ言葉を知れ！！」

「うゝ、分かったから…どいてそこ」

ミカエルの前にリドが立ちはだかり、抱きつけない。
手をわきわきさせてミカエルに再び抱きつこうと企むが僅か3秒で

無理だと痛感する。

話を適当に受け流したせいか、リドが説教モードに入る。

「…そこに正座しろ、リン」

「……はい」

馬車の上で正座なので体が揺れて、バランスが取りにくい。
くっ…これだけでも既に効果ありだよ！

「いいか、お前は何度も言うように……」

決まり文句から始まる説教は延々と続くのがお決まり。

だが、今日はいつもと同じようにはさせない！そう、何故なら今日はサタナキアというお人がいるからだ！

サタナキアならリドの説教を喜んで引き受けてくれるはず。

説教を他人に擦り付ける生贄作戦を思いついた私は早速サタナキアの方を横目に見てみる。

すると、サタナキアはリドに熱い視線をぶつけながら息を荒げ、頬を紅潮させていた。

「嗚呼、リカルド様が私を放置プレイ……ハアハア…。いつだって私の新しい嗜好を目覚めさせるのは貴方なんですネ…うふふ」

でも本能的に関わりたくない判断、全力で目を逸らす。

戦場以外の所で始めて本能が危険を感じ取った瞬間だった。
サタナキアは既に色々と末期だ。

「おい、リン？聞いているのか？」

「え…？あ、ごめん。それよりもサタナキアさん見て」

「は？サタナキアがどうし」

目をサタナキアに向け、リドは固まる。

流石に事の重大さが伝わったようで、リドも全力で目を背けた。
ちょ…リドが原因なんだからリドがなんとかしてよ。

「リド、現実から目を背けちゃ駄目だよ。リドの責任なんだから止めてよ、じゃないとサタナキアさんが新たな境地に目覚めちゃうよ」

「既に手遅れだろ、俺は関わりたくない」

「…雇い主命令、サタナキアさんを止めて」

「それだけはどうかあつても嫌だな」

「じゃあどうするの？ フィル力村に着くまでずっとあの痛々しい姿を見てろって言うの？」

「そ、それも嫌だな…」

苦虫を噛み潰したような顔でサタナキアを見るリド。

…サタナキアは黙ってさえいれば絶世の美女なのに本当に中身が残念だな。

私はサタナキアを極力視界に入れないようにして、正座のバランスを取る。

「…あの、リンさん。サタナキアさんは…どうしてしまったんですか…？ 昨日から突然人が変わったように…」

リドの後ろからミカエルがひょっこりと顔を出して、尋ねてくる。
何気にリドの肩に手を乗せている仕草は狙ってるの？

「ミカエル君…、とりあえずこっちおいで」

「へ…？ あ、はい」

ぼんぼんと自分の横の席を叩くと、ミカエルがちょこんとそこに座

る。

座高のせいで上目遣いは必須条件。小さい子を見ると息が荒くなってしまうような変態だったら間違ひなく理性が飛ぶ。

…あ、私は変態じゃないですよ？至ってノーマル。息が少々上がったのは気にしないで下さい。

「あのね、サタナキアさんが突然変わってしまったのには目の前にいるお兄さんが過去にサタナキアさんを弄んだ事が原因だよ」

「お前は語弊のある言い方しか出来ないのか！俺は何もしていない！！」

「またそうやって否定して！私の事も遊びだったならサタナキアさんの事も遊びだったのね！この外道！！」

「だからお前のそのキャラは何なんだ！いい加減やめろ！」

「リ、リカルドさん…、大丈夫です…！まだ謝ればリンさんは優しくからきつと許してくれますよ…！」

「よし、まずはこの子に誤解させきっている所から謝って貰おうか、リン」

リドの声が少し震える。

…あらら、そろそろ止めとかなないと怒られるな。

「…ミカエル君、説明するよりも見せた方が早いかも」

私は虚空を見つめて悶えるサタナキアを見て、覚悟を決める。

…何の覚悟かって？決まってるよ、あのサタナキアと関わるなんて相当の勇気があるよ。

こんなに関わりたくないと思う人、人生で4人目だ。

私はサタナキアの隣へと移動し、とんとんと肩を叩く。

すると帰ってきてくれたらしいサタナキアはきょとんと私を見つめる。

くッ…美人に見つめられる事がこんなにも重労働だったとは。

「…どうしたんです、リン＝ヒョード」

「とりあえずは帰ってきてくれてありがとうございます、早速なんだけどサタナキアさんがリドの事をどう思ってるのか話してくださいませんか？」

「まあ！！いいですね、話して差し上げます！そうですね…初めて会った時に体中に電撃が走ったような衝撃が始まりです…。その見目麗しい容姿に瞳は捕らえられ、体中がこの人の事を大好きと悲鳴を上げた瞬間でした…！メイドのマリーに聞くとそれが恋だと言う事を知り、私はその日から恋についての書物をたくさん読みました！それからそれから…！」

いきなりマシンガントークをし始めるサタナキアをミカエルに見せる。

ミカエルは初めて会った時から思っていたけど賢く、すぐにサタナキアがどんな状態なのか理解してくれた。

その証拠に、苦笑を浮かべている。

「…と言うわけなんだけど理解はして貰えたかな？」

「はい…、わざわざ危険を冒してもらって…ありがとうございます」

「ミカエル君のためなら別に構わないよ。…っとそろそろ止めないと」

私は話をし続けるサタナキアを止める。

止める際に不機嫌そうな顔を表したサタナキアを宥めるのが大変だった。

そうですね、私が悪いです。聞かせて欲しいと言ったのは私ですもんね。

「ごめんなさい、けど聞くのが辛い……じゃなくて余りにも素晴らしい話が私には難しかったので」

「全くもう！酷いです、折角私とリカルド様の愛の話をして差し上げようと思ったのに……」

「確かに酷かったです、けどリドを好きなようにしていいから許してくれませんか？」

「リカルド様を？」

「リ、リン！？お前……ッ」

「ええ、好きなように。ただしフィルカ村に着くまでですが」

一応助け舟は用意しておく。

それでもリドが辛い思いをする事に変わりはないけど。

ごめんね？リド。

リドに手を合わせてこれからの苦難を祈る。

「まあ！なら許してあげますね、ささ！リカルド様、こちらへ！雇い主から許可を頂けましたわー！！」

「呪うぞ……リン……ッ！」

「許してとは言わない、生贄リドよ」

馬車を降りてからの説教が怖い。

だが、今を乗り切れるなら構わない！！

私はいちやいちゃ出した2人（1人は絶望したような表情だが）を見ないようにして今度はミカエルを膝に乗せて抱きしめる。

恥ずかしなただけど、膝に乗ってくれたミカエルを撫でる。

ああ……本当に可愛い。

「あ……リン……さん。……リカルドさん、いいんですか……？」

「いいよ、リドならこれぐらいの苦難を乗り切れるから。それよりもミカエル君の方が気をつけたほうがいいよ」

「ふえ？」

「あんまり可愛すぎると、どこかのおじ様に『君可愛いね、ハアハア』。おじさんの家がすぐ近くにあるんだけど一緒に来ない…ハアハア』とか言われて拉致られちゃうよ」

「…き、気をつけます…！」

「うん、いい子いい子」

ミカエルへの忠告は本当に真摯に受け止めてもらいたい。シャレで終わりそうに無いから。

と言つか実際、私も小さい頃に同じような体験をした事があるんだよね。

デパートで迷子になってたら変なおじさんに出会って今のような台詞を吐かれた。

勿論、男の勲章を蹴って逃げたけど。

私でさえこんな体験をしたんだからミカエルは絶対にこんな目に遭う。

逆に今まで遭わなかった事が不思議だ。

「あ、リンさん。そろそろ…フィルカ村が見えてくる筈ですよ」

撫でていると、ミカエルが急に馬車の外を指差す。

私は馬車の窓を開けて、前方を見してみる。

すると、うつすらと民家の並ぶ集落が見える。

あれがフィルカ村？海に接してるや。

と言う事は漁村かな？

「あ、案外早くて助かった…！」

リドの顔に希望が射す。

よかった、説教をする気までサタナキアによって削られたみたいだ。

私はほっと安堵の溜め息をつく。

ありがとう、サタナキア！

「…そろそろか」

馬車に乗って以来、ずっと瞑想していた勇者がやっと目を開く。

その顔には私とは違う安堵の色が浮かんでいる。

「よくこんなに長い間瞑想なんてできたね。私だったら絶対飽きてる」

「…瞑想すると心が安らぐからな、最近はよくしてる」

「あー、驚きの連鎖だもんねえ。お疲れサマ」

そう言えば勇者はまだ召喚されてから1週間だ。あまりに馴染み過ぎて違和感無く過ごしていたけど普通の人ならパニックに陥ってるよね。

感心…としか言い様がないです。

「…と言つかさつきから演技取れてるけど大丈夫？ここ一応皆いるよ」

「歌姫とリカルドは2人の世界だしミカエルは初めての海に感動中だからな、誰も聞いていない。それに…別に演技をする必要も無いだろう、元々演技は世の中をうまく渡っていくための処世術だった上にここにいる奴らは全員俺の本性を知っているし」

「そっか、私は素の勇者の方が好きだからそっちの方が嬉しいよ」

「…っ、そう…か…」

顔を赤くして視線を逸らす勇者ににっこりと笑いかける。

下手に取り繕ってるより素の方が私は好感が持てる。

リド達が勇者の本性をいつ知ったのか分からないけど、きっと皆も

素の方が好きだと思うよ。

「リンさん……もうフィルカ村に着きますよ……!!」

いきなりミカエルが興奮して私の袖を引っ張る。

その次の瞬間に馬車の揺れが完全におさまる。

御者席から着きましたと声を掛けられて、一番にミカエルが馬車を飛び降りる。

袖を掴まれていた私も引かれて馬車に出る。

外に出た私の前に広がったのは、数件の木で作られた民家と広場に村の奥に見える海の青色。

地面は土色で舗装されていない。石がごろごろと転がって転んだら痛そうだ。

木は所々に目に入るが、多いとは言えない。

いかにもRPGで出てきそうな漁村だった。

「綺麗な海ですね……、リンさん」

「そうだね、思いつきり泳ぎたいかも」

「泳ぐのは諦めとけ、そんな時間は無いぞ」

「やっと……解放された……!」

「嗚呼、リカルド様……、もう別れだなんて……貴方の温もりが恋しい……」

私達が降りると、馬車は踵を返して走り去っていった。

「さて、じゃあ船を貸して貰えるように交渉をしに行くぞ」

「行動が早いなあ。……村長さんっているのかな?」

「いるだろ、どこかの民家に」

「じゃあ片っ端から民家を漁っていこう!行くよ、ミカエル君!」

「は、はい……!」

「待てその非常識人間がああ!!」

リドの声は私達が勝手に民家に入っ中にないた村人に上げられた悲鳴によってかき消された。

第二十一話：子供は天使（後書き）

勇者パーティー完成。

勇者^{リン} 腹黒チート

魔法士見習い^{リカルド} 非常識と謎の代名詞

傭兵^{サタンキア} ギルドS級ランクの萌え要素

歌姫^{ミカエル} 限定の変態

雑用^{ミカエル} 癒し天使

第二十二話：フィルカ村

悲鳴を上げられ続けて8件目、やっと村長らしき方とご対面。
村長と会うまでの道のりは長かった…。

民家に押し入り、1件1件念入りに村長がいるかどうか搜索したから住民には悲鳴を上げられるわ、自警団を呼ばれそうになるわで大変だった。

もちろん全力で止めたけどね？

村長の家は、一見普通の民家と変わりなく目の前にいる老人が村長だと気づくのにには村長の家をくまなく漁った後だった。
村長は白い髭を蓄えた杖を持つ老人で、何とも期待を裏切らない様な風貌だった。

「じゃて…、こんな村に何の御用かいの〜？」

口をもごもごさせて出る言葉は掠れてて聞き取りにくい。
…ゲームの字幕が欲しいな。

「初めまして、村長さん。早速ですが我々は船を貸して頂きたいためにここへやって参りました。船をお借り願えませんか？」

勇者が演技スイッチを入れて用件を簡潔に述べる。
すると村長は、はぁあ？と耳に手を当てて首を傾げた。

「ですから、船をお借り出来ませんか？」

勇者が仕方なくもう一度言う。
村長はやっと理解できたと言うように手をポンと叩いた。

「はいはい…、孫の写真を見たいとな。少し待っておれ…」

どこをどう聞き取ったら孫の話になるんだろうか。
一文字も合っていないよ。

「違いますよ、村長さん。船です」

「ん…？あゝ、すまんすまん…妻の写真のう…。あつたかの…？」

「ふ・ね！です」

「少し黙っておれ…！、今写真を出すわい…」

どうあっても言葉を理解しようとしないう村長は拳句の果てに逆ギレ。
勇者はだんだんイラついてきている様子だ！

やばいやばい！黒いオーラが滲み出し始めたよ！

「お爺さん！その方たちは船を貸してと言っているのよ！」

その時、玄関から謎の女性が入ってきて村長に呆れたように話す。

「んん…、そうなのかい？それは、悪い事をしたのう」

先ほどまで勇者の言葉は全く理解していなかったくせに、女性の言葉は瞬時に理解する。

凄いな、この村長。勇者をここまで挑発するなんて…。

勇者は今にも腰にささる剣を抜いて村長に切りかかってもおかしくないような雰囲気醸し出していた。

「ごめんなさいね、お爺さんつてば耳が悪くて…」

女性はペコリと頭を下げる。

いや、耳が悪いとか言うレベルではないと思います。

「構いませんよ。それよりも貴方は？」

「あ、失礼しました。私は村長の孫のアンと言います、ようこそフイルカ村へ」

いかにもマニユアルに書いてありそうな事を嚙まずに言っただけのけたアンは、ニツコリと営業スマイル。

勇者も作り笑顔で返す。

… どちらも笑顔なのにそれが本心からの笑顔でないと言っただけのは怖い。

「それよりも船でしたよね、船ならトマさんに頼めばすぐに出してくれますよ。案内しますから着いてきてください」

何て無駄な話をしない人なんだろうが、こういう人は大好きだ。変な詮索もせず用件を受けて只、淡々とこなす。

この人日本に来たら絶対凄腕のキャリアウーマンになれる。

アンは扉を開けて外に出ると私達を船の所まで案内してくれた。

広場を抜けて、浜辺へと出ると浜辺で船の整備をする男性がいた。

「トマさん！ ちょっといいですか？」

「ん？ お、村長さんこのガキか。どしたー？」

「こちらの方々が船をお借りしたいそうなんです」

「船を？ そいつぁ無理だ、ここ最近海が荒れてて危険なんだよ」

「そうなんですか？」

「ああ、海の主が怒ってんのかねえ」

トマと呼ばれた漁師風の男性は、ハチマキを取って大きく溜め息をつく。

海が荒れてるとな？

だから船が出せない…と。ふむ、困った…。

私ならここは海が落ち着くのを待つ。

勇者はどうするつもりだ？

私は勇者を横目で見てみる。勇者は顎に手を当てて、考えてる素振りだった。

「どうするの、勇者？」

「…ここは落ち着くのを待ちたいが、落ち着く時期が分からないのなら今は避けるべきだろうな」

「選択肢はたったの二つ、待つか船を無理やり出すか！」

「おいおい、そこのお嬢さんは頭がイカしてるのか？海を舐めんじやねえ、一瞬で転覆して命を刈り取られるぞ」

冗談で言ったつもりがトマに真剣な顔で注意される。

私だってそんな事は知ってるんだけどなあ。

しかもイカれるとか失礼な！至って正常だわ！！

トマに対する怒りパラメータが急上昇、子供だからって馬鹿にして！

「…怒るな、リン。冗談が分からない大人だっているんだ。特にその冗談の仕事に携わる人なんてな」

怒りを滲み出しているのがばれたのか、リドがそつと耳打ちしてくる。

優しいな声音に少し怒りが収まる。

「ううん、私も少し不謹慎だった。ごめんなさい」

ここは素直に謝る。

私の冗談を分かってくれた事が嬉しかったから。

正直、一番私を非常識だと言うリドが私の今の言葉を冗談と分かつ

てくれるなんて予想外だった。

「よく言えた。その言葉をこの状況で言えるのはそうそう容易い事じゃない」

頭をくしゃりと撫でられ、自然に頬が緩む。

「撫でられるのは嬉しいんだけど、これって確実に子供扱いだよなえ？」

「トマさん、悪かったな。だが今はこいつの冗談なんだよ、その所は分かってやってくれ」

「お、おあ…、そうだったのか。悪かったな、お嬢さん」

ちゃんとフォローを入れてくれるところが本当に抜け目ない。

まあ…嬉しいけどね。

「そうでしたの？リン＝ヒョード。私はその後者に賛成だったのですが」

1人、サタナキアだけは冗談を素で受け止めてくれたらしい。
何というか…素直だな。

「冗談ですよ、私もそこまで海を馬鹿にしているつもりもありませんから。…私の唯一弱点とする場所でもありますし」

最後の方はボソリと口の中で呟く。

基本的に運動は得意なのに、水泳だけはどうしても無理なのだ。

小さい頃に仕事で海へ行った際に水の中で息を止める時間を延ばすなどと言われ、重りを付けられて海へ沈められてからと言うものの若干トラウマになっている。

『凜ならできる！頑張れ！』で10分間水の中よ？死ななかったの奇跡でしょう。

親は目標30分とかほざいていたけど、彰が止めてくれてなんとか助かった。その後、私は何事も無かったように食事をしていたそうだけど内心では水への恐怖感と彰への感謝、親への殺意が渦巻いていた。

そして、それから水の中に入ると必ず溺れるようになった。息を長時間止めれるようになっていたから溺れても苦しむ事は無かったけど。

学校の水泳の時間は毎回プールの底で体操座りをしていた。

え、じゃあ村に着いたときに海で泳ごうとか言ってたのは？

別に泳ぐのが嫌いな訳ではなくて、むしろ好きです。ただ、体が浮かないと言っただけで。

体にすっかり水に対しての恐怖感が刻まれてるんで。

「それよりこれからどうするんだ、勇者。船は出ないそうだし引き返すか？」

リドが勇者にこれからの決断を仰ぐ。

勇者はリドをちらりと見ると、睨みだす。え、何故。

「…こういうときは何か攻略法がある」

「は…？」

勇者が独り言のように呟き始める。

「ゲームでは必ずと言っていいほど移動法に関する問題が生じる。そんな時は攻略法が用意されているはずだ」

…ここ、現実です。

確かにRPG風味な村だけでも！ゲームとは違うからね、これは現実で何が起こるかかわらないの繰り返しが訪れる世界なんだから！流石に問題が起きた時の対処法を勇者1人に背負わせすぎたせいかな勇者が壊れた。

それとも意外と勇者は抜けているのか？

「はい、勇者。現実逃避終了！ちゃんと考えて！」

手を叩いて、勇者を現実へと引き戻す。

「…あ、ああ…。悪い、余りにもゲーム的な展開が続いたもんだから…」

いかにもな村長といかにもな孫、止めにありがちなトラブル。

まあ…しゃーない。私もゲームみたいだと思っていたし。

「トマさん、シケはどの位でおさまるかご存知で？」

「舐めるな、海の男がそれぐらい知らずにやってけるわきゃねえだろ。シケは大抵3日でおさまるな」

一々この人むかつくな…。

それにしても3日か…、思わぬところで足止めをくらった。

「言つとくがこの村には宿屋なんてたいそうなもんはねえぞ。待つなら3日は野宿でもしてろ」

最悪だ、この人。

泊まっただけは流石に無くてももう少し優しい言葉は掛けられないのだろうか？

ああ、むかつく！

ここまで地味にむかつかせてくるなんて……！この人、人を怒らせる
検定一級は確実に持つてるよ！

「い、いえ！そんな事をして頂かなくても私の家に泊まっていつて
ください！2階のベッドも多く余っていますし折角来て下さった皆
さんを野宿だなんて酷い待遇はできません！」

何アンさん、超良い人だよ！

ここまで来るといつそ惚れるね！

「か……ッ！あんな、良い人ぶんのも大概にした方がいいぜ？何
処の誰かもわかんねえような奴らを泊めるなんてどこの物好きだよ」

「トマさんッ！失礼ですよ！」

「はいはい……、口うるせえとこだけは母親似だな」

トマは吐き捨てるように言うと、浜辺の砂を蹴って去っていった。

アンはトマの最後の言葉に赤くなって口をパクパクさせたが何も言
い返さずに、口を噤んだ。

そして私達を先ほどの民家 村長の家に付いて来させ、2階
に案内した。

「……先程は申し訳ございませんでした、トマさんは少し口が悪いだ
けで決して悪い人ではないんです……。どうか分かってあげてくださ
い」

「いえ、構いませんよ。ええ、全然構いませんとも」

「リン、笑顔が恐ろしいぞ」

「あはは何のことかな、リド。私は至って平常ですとも」

あのトマって人……、むかつく上にアンにフォローを入れさせて……！
アンもあんな人庇わなくなっただけでいいのに偉いですね。

「この部屋はどうぞお好きにしてください。何かあれば下にいますので言ってくださいね」

アンはそれだけ告げると、階段を下りていった。

ひとまずこれで宿は確保できたけど3日でシケがおさまると言うのはあくまで目安だから実際の所はいつ出発できるのかは分からないかな。

「…さて、これからの事だが最低3日間…どうする？」

勇者が数あるベッドのうちの1つに座って、全員に問いかける。初めにリドが口を開く。

「俺は少しお前と話したい。元はと言えばそのために今まで動いてきたからな」

リドに続いてサタナキアが答える。

「私はフィルカ村を少し見て回りたいです」

次にミカエルが私の袖を引っ張って小さな口を開ける。

「ぼ、僕…。リンさんと…海を見たい…」

うわ、超可愛い。

これを断る馬鹿はいない。

「私がミカエル君からの誘いを断るとでも？喜んで」

「よ…よかった、です…！」

ぎゅうつとミカエルが私の腰に手を回して抱きつく。
ぐふッ……！その可愛さは反則でしょう！

私にとって初めて戦闘以外で負けを認めた瞬間だった。

「……ミカエル君、将来お嫁さんに来て下さい」

理性を飛ばされた私は割りと真面目に口走ってしまった。

「ふえ、え……？あ、あの……僕……がお嫁さん……？」

「ッ！？お前は何言い出すんだ！色々おかしいだろ……！」

リドに頭をスパンと叩かれる。

……痛い……。……はッ！私は今一体何を口走ったんだ！？

理性が無事帰還を果たし、正気にかえる。

「ご、ごめん！余りにも可愛くて理性破壊された！いつか私ミカエル君に本気で求婚しちゃいそう！どうしよう、リド……！」

「知るかぁ！お前は犯罪者にでもなりたいのか……！」

「いやいやいや、私の理想のタイプって年上の男性だよ！？まず無いんだけどミカエル君が余りに可愛くて……！おかしいよね、これ！まだリドなら頷けるけど……！」

「はッ！？す、少し待て！とりあえずは落ち着け……！」

「すう　　はぁ　　。よし、落ち着いた」

「早いな……！」

「うん、ごめんね。迷惑かけた」

「いや、別にそれはいいんだが……」

リドが顔を赤くしてそっぽを向く。

興奮させすぎてしまったかな？ごめんなさい。

私は両手を見つめて自分の両手をリドの頬にくっつける。
リドは驚いて飛び退く。

「なッ…！な…！」

「いや、顔が赤かったから冷やしてあげようと思って…。私のせいだからね、冷たい？」

また両手をリドの頬に近づける。

少し体を引いて拒否の色を示したが、素直に私の冷たい両手を受け入れた。

頬の赤かった所は少しだけ赤みが引いていく。

リンは視線を泳がせて落ち着けないようだ。

うん、本当に悪い事をしてしまったな。

しばらくそうしていると、いきなり両手をリドの頬から剥がされる。

剥がしたのは不機嫌な様子の勇者とミカエルだった。

勇者が私の両手をリドから剥がし、ミカエルが私の体に抱きついてリドと少し距離を取らせる。

「…お前の冷たい手をリカルドに当てたら失礼だろ」

「リン…さん…、早く海へ…行きましょう…」

勇者め、何て言い草だ。冷たいからこそ当てるのではないか！

そしてミカエル、力入ってます。意外と締め付けるんだけど、この子お！

そのまま、抱きつきから手を繋がれて階段へと引っ張られる。

「…リカルド、話があるって言ってたな。丁度いい、俺も今…話が出来たところだ」

「は？いや、確かに言ったが…」

勇者のリドを睨む力が異様だったんだけど。
ミカエルに引かれるままに私は階段を下りて行く。
その際にミカエルが呟くように言い始める。

「リンさんは…リカルドさん…と仲が良い…ですか？」

「リドと？さあ、どうかな？」

「え…？でもさっき…リドさんに…」

「リドとは知り合って間もない上にお互いの事を何にも知らないなあ。友達…でもないし、何だろうね？」

「恋人…じゃない…ですよ？」

「恋人！？ないない！リドにはサタナキアさんがいるもん！」

「良かった…です」

「けど、リドの事は好きだよ。関係は分からないけどこれだけははっきり自信もって言えるね」

リドとの関係か…。考えてみると奇妙な関係だよなあ。

恋人なんてありえないし友達でもないから…何だろう。

…言うなれば、同志？仲間？いや、私が雇ってるから仕事上の関係かな？

うーん、そんな簡単な言葉で表したくないような気がする…。

分かるのはリドが大好きって事くらいかな。

ま、それだけ分かってれば一緒にいる理由なんて十分だ！

私はまだよく分かっていないリドとの距離を掴めずにながら荒れる海へと赴いた。

第二十二話：フィルカ村（後書き）

仕事関係にしては近すぎるけど、親密にしては遠い。
未だに掴めない2人の距離。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9051y/>

同じ世界の勇者と見習い魔法士

2012年1月14日16時51分発行